白き復讐者

遠歩

闇。

そこにはそれ以外何もない。宇宙であれば無限の煌（きら）めきを見せる星々が灯火（ともしび）となり暗闇のなかを照らすのだろうが、生憎とそこにはそんな気の利いたものは存在しない。ただ墨を流したような漆黒の世界が拡がるのみだ。

その暗黒に満たされている場所に響く音がある。何であろうか？

カリカリカリカリ.....。

それは壁を引っ掻く音である。人の爪が漆喰（しっくい）を指先で削ろうと足掻（あが）く音である。

誰ぞ牢獄に閉じ込められた者がいて、彼が世の理不尽に抗うために無駄と知りつつ抵抗を試みているのであろうか？ その想像は外れてはいないが事実とは若干異なる。

音の主は亡者であった。白髪白髯（はくはつはくぜん）。着ている衣服も死に装束を思わせる白衣。

彼は名のある彫刻家あるいは名人と言われる面細工職人が「苦悶」と題したような皺（しわ）深い顔をしていた。この世のあらゆる辛酸（しんさん）を舐め尽くしてきたような疲れた顔をしていた。それだけに迫力があり、育ちのよい女であれば、顔を合わせた途端に失神しそうな迫力を有している。

その皺深い顔には、当然ながら眼がある。暗闇のなかにも鮮やかなギラギラと輝く獣（けだもの）の眼が。月明かりすらない夜道で野犬と出くわした時のような不気味さと、何処か目を離せない美しさを内包させているあの情景を思い起こさせる。

ギラギラと輝く獣の眼の下には、赤い筋がある。怪我しているのではない。彼は泣いているのだ。流しているのは単なる涙ではない。血涙だ。文字通りの血なのだ。腸（はらわた）がよじれんばかりの怒りが、彼をして過去の絵物語に登場するような恐怖の情景を造り上げている形だ。

暗闇のなかには耐え難い悪臭——死を意識させる臭いが満ちている。血涙滴らせている亡者の怒りを尚更に増幅させるのは、実のところその臭いである。単なる不快感からではない。彼の魂を根本から揺さぶる怒りが、死を連想させる香りから喚起されるのだ。

その意味や理由を知る者はこの場にはいない。いや生者すら絶無と言えよいか。

カリカリという音が、やがてガリガリに変化した時、亡者の唇からこの世ならざる声が一獣の咆吼（ほうこう）が響いた。それは人の身には本来なら理解しかねるものであるが、無理矢理にでも人語に約せばこうなる。

「許すものか.....許すものか.....貴様ら、纏（まと）めて呪い殺してくれる！」

亡者の雄叫（おたけ）びは、暗闇のなかで何度も何度も反響した.....。

瑞穂本国。皇国首都（インペリアル・キャピタル）――

総人口六〇〇〇万を数える瑞穂皇国の首都には、その一割――約六〇〇万の人間が住まう。瑞穂皇国は本国列島と外地――海外領土で構成される島国だが、大陸にある国家と同じく、都市部に人口が集中するという現象からは無縁ではいられない。他人に無関心で文明の灯火からも遠ざかりたい世捨て人でもない限り、人はやはり便利な都市部に住みたがるものなのだ。

されども大陸部にある大都市と皇都はいささか趣（おもむき）が異なる。無秩序な市街地の拡大に伴う混沌とした情景――中央政府が都市整備計画を断行しない限り、意図せぬ迷路と化した街並となる――は皇都では見られないからだ。

皇都は飛龍にでも跨（また）がり鳥瞰（ちょうかん）すれば、碁盤の目のように各区が整然と区切られているのが判る。歴代大皇（瑞穂皇国の国家元首。世襲制の君主にして国教である瑞穂正道の主催者を兼ねるので、他国からは皇帝兼法王だと解釈されている）が皇都はそうあるべきだと定め、民衆もそれに従っているためだ。

このように皇都は整えられた街であるが、数百万もの人間が生活していれば、行き交う人間の数も必然的に増える（食糧や衣服に代表される生活必需品が大量に必要ななるのだから当然）。ゆえにどうしても道が狭くなり、ごみごみとした印象を道行く者に抱かせてしまう。

だが、その郊外――人の行き来がさほど激しくない、緑豊かで、昔の面影をそこかしこに留めている区域になると、大分様相が異なる。そこは皇宮と隣接し、国家の中枢を担うべき官庁が集合している霧賀崎（きりがさき）と本当に行政上は同じ場所なのかと思わせる風情がある。

冒険探偵――を自称する、世間的には実録小説家だと認知されている暮林千榛（くればやしちはる）は、そこ――皇都の外れにある浅海（あさみ）街に自宅兼事務所を構えている。昔ながらの瑞穂家屋で木造二階建て。流行作家の一人であり印税収入もそれなりにある者が居を構えている場所には、どうしても見えない。世捨て人かそこを終の棲家（すみか）と定めた偏屈爺さんが一人で住んでいるような印象を視る者に与える。

されども今の暮林は一人で仕事をしているわけではない。つい先頃に比利品（ひりぴん）から戻ってきた後、彼の地から瑞穂本国に戻る客船で知り合った可愛らしい弟子兼助手が出来たのだ。名は千綾帰蝶（ちあやきちょう）。

とは言え、彼らは同じ屋根の下で暮らしているわけではない。若い男女がそんな真似をしていたら直ぐに噂になる。噂話とは人類が石器時代の時から付き合いのある良き友なのだ。押しかけ女房的にやって来た帰蝶は気にしなかったが、暮林の方が気を遣い、近くの集合住宅（アパートメント）を借りてやり、寝起きはそこでさせていた。

その暮林は今、一階の事務室で肘掛け椅子に腰掛け、新聞を拡げていた。朝食が済んだばかりのくつろいだ時間――彼は会社勤めをしているわけではないので、世間一般的な時間感覚とは無縁でいられるのだ――だからという訳ではない。

皇都日報。朝陽新報などに代表される有名新聞や地方紙などを乱雑に執務机の上に並べ、紙面

を確認しているのだ。まるで本職の捜査機関関係者のように。

「先生、新聞をそんなに眺めて何か見えるんですか？」

ワイシャツに黒い襟飾（ネクタイ）というラフな格好で愛用の煙管（キセル）を銜（くわ）えたまま新聞を捲っている師匠兼雇い主に、帰蝶は怪訝な眼差しを向けて訊ねた。暮林とは異なり、帰蝶は白を基調とした半袖の水兵（セーラー）服という夏らしい出で立ちに身を包んでいる。紺色の襜褕袴（プリーツスカート）の丈も膝は疎か太腿が覗くほどに短く、彼女が持ち合わせている快活さを現している。

「帰蝶さん。新聞はね、ネタの宝庫だよ」

暮林は新聞を閉じると右手人差し指を立てた。その顔には真剣さが滲んでいる。既に師匠の顔を見慣れている帰蝶であるが、彼が水も滴るような美形（ハンサム）なため、そうされると未だにドキリとする。からかわれるのが嫌なため表情に出したりはしない。見抜かれている気がするが。

「ネタの宝庫ですか。と言いますと？」

あの眉目秀麗（びもくしゅうれい）な男性だけが様になるぶっきらぼうな動作を交え、暮林は弟子に教えた（彼は冗談めかして言う時は女弟子を下の名前で呼ぶのだが、普段は名字でしかも君付けである）。

「新聞には世間で起きていることが幾つも載せられている。解決未解決を問わずにね。僕の仕事は実録小説家だが、いつも都合良くネタが手に入るわけではない。探偵小説（ミステリー）も手がけているしね。そこで空想の出番となるわけだが、完全な想像ばかりで執筆を続けていたら、さすがにきつい。そこでね、現実を軸にして想像の翼を拡げるのさ」

「想像の翼——ああ」

帰蝶は幾らか得心がいったような顔になる。「事実は小説よりも奇なり」とは度々用いられてきた表現だが、それは話を判り易くするための慣用句ではない。面白おかしい空想よりも、現実にした馬鹿話の方が笑いを誘うのは珍しい話ではない。

「例えばね、そうだな……」

暮林は机の上に山積みになっていた新聞を適当に一つ取ると、帰蝶に見えるように無造作に開いた。それは先に記した皇都日報や朝陽新報といった全国区の有名新聞ではなく、地方紙だった。「古府（こふ）新聞」と記されている。「古府」とは昔の瑞穂の首都が置かれていた八洲（やしま）県を指す。

「古府新聞？」

「僕の友達がそこで事件記者をしていてね。送って貰ったのさ」

開かれた新聞には、でかでかと「小村（こむら）伯爵御令嬢共々転落死」の見出しが躍っている。どうやらその地方の大物が事故死したようだ。丸で囲まれた貴族的な容貌をした男性とその愛児の写真が目を引き。

帰蝶が両膝に手を当て新聞記事を覗き込んだのを確認してから、暮林は続けた。

「千綾くん。もしこの事件が単なる事故ではない——と考えてみたらどうかな？」

「事故ではない——と仰（おっしゃ）いますと？」

「小村伯爵はお嬢さんと一緒に地元の観光名所——地獄峠（じごくとうげ）で乗っていた岩が崩れて転落死したそうだがね、それが偶然ではなく仕組まれたものだと考えるんだ」

「つまり殺人ですか？」

帰蝶は眉を顰（しか）めた。例え話にしては物騒な話だ。暮林は冒険探偵を自称しているから、前回のような冒険活劇的な事ばかりではなく、血生臭い殺人事件の調査を何度かしたことがあるのかも知れない。弟子入りしたばかりなので、想像の域を出ないが。

女弟子の反応に構わず暮林は続けた。

「そうだ。そして犯人は奥方だ。彼女は良人（おっと）がいる身でありながら、他の男性を愛したのだ。許されぬ恋に溺れたのだ。そんな彼女がついに情夫にそそのかされたのか、あるいは魔が差したのか、道ならぬ恋を貫徹することに決めた。その結果——」

「邪魔者の良人を殺し、再婚の障害になるであろう娘を始末した……？」

「うん。新聞記事からは読み取れないが、そんな聴くだにおぞましい愛憎劇が潜んでいるのかも知れない。貴族夫人ともあろうお方が、間男との情事を一晩限りの火遊びと割り切れず、関係をズルズルと続け、取り返しの付かない間柄になったのかも知れない。

もしかしたら旦那（だんな）さんに情夫との情交を視られ、離婚を突きつけられていたのかも。この新聞には小村伯爵は資産家で、親戚らしい親戚もなく、彼の死後莫大な財産を受け継ぐのは奥さんただ一人だと記されているしね。財産と愛人を一緒くたに喪うぐらいなら、凶行に及んでも不思議はないさ」

「成程」帰蝶は小さくため息をついた。

本職の小説家の想像力——この場合は妄想力と言い換えても良いのかも知れないが——の逞（たくま）しさ、その一端に触れて驚きを隠せない様子である。

そこに玄関の方から呼び鈴が鳴る音が響いてきた。暮林は強く舌打ちした。話の興が乗ってきたところで邪魔が入るのを嫌う心理ばかりが理由ではない。担当編集者が原稿の催促に来たのではと推察している。このところ毎日なのだ。

「千綾くん、君が出てくれ」彼は煙管を煙草盆に叩きつけて中の灰を出した。かちんと金属的な音が響く。「いつもの編集者であれば原稿はまだだと答え、他の出版社の執筆依頼であれば、今は忙しいから無理だと言うんだ」

要するに誰が来ても門前払いにしろと命じているわけだが、探偵としての暮林の顔を知る帰蝶は、そこに思いを至らせ、冗談交じりに訊いた。

「探偵のご依頼であれば？」

弟子の問いかけに師匠もまた冗談を交えて答えた。「それなら直ぐに通すんだ。僕は退屈している。空想だけではないネタが欲しい。大歓迎だよ」

帰蝶は玄関へと向かう。この家には女中や従僕（じゅうぼく）という気の利いたものはない。暮林と彼女しかいないのだ。必然的に来客対応は彼女の役割と決められ、事情を知らない者からすれば、家主の妹かその幼妻（おさなづま）なのだろうと見られている（暮林の言う『いつもの編集者』は、彼の家族構成を把握しているので、後者の方だろうと考え、彼なりの頓珍漢（とんちんかん）な祝辞を述べている）。

引き戸の鍵を開けた帰蝶は「お待たせしました」と来客に一礼した。「挨拶（あいさつ）は大事だよ」と親に昔から言われてきたので、その辺の物腰は丁寧だ。

それから顔を上げて相手の顔を視る。暮林とはまたタイプの違う美形である。色白で彫りの深い顔立ちには、何処か異国人のような情緒がある。男性らしい野太さを有した眉の下に焦げ茶色の眼がある。その瞳には女性の耳目を引く力が認められた。背広越しにも明らかな筋骨逞しい身体には、洋風彫刻の男性像を思わせる感じがある。

「暮林先生はご在宅でしょうか？」

思わず相手の顔を見つめた帰蝶に構わず、男は訊ねた。

問いかけられて、帰蝶はドギマギしながら「先生は現在多忙でありまして、新たな小説執筆の方は無理かと……」と微苦笑を顔に刻んで答えた。

「僕は雑誌編集者じゃありません」男は美しい顔に戸惑いを宿しながら言う。「僕が用事があるのは、探偵としての暮林先生です。どうか一度お取り次ぎ願えませんか？」

「探偵の依頼であれば直ぐに通せ」――師匠のその弁を思い出した帰蝶は、「判りました」とコクリと頷きながら応じ、彼を事務室まで通した。

暮林は執務机の上に山と積まれている新聞を片付けもせず、依頼者を出迎えた。男の一人暮らしなので、その辺に関する感性は案外適当なのかも知れない。弟子入り以来、小説家としての彼にしか触れていない帰蝶としては、もう少しどうにか出来ないかと思うが、別に口にせずにお茶の準備をした。

「川嶋龍夫（かわしまたつお）さん――と仰いますか」

手渡された名刺を一瞥して、暮林は相手の名を呼ぶ。職業は名刺に記されている一文を信じる限り、画家だという。筋肉質な外見からして、彼が室内で画布（キャンパス）の前に立ち油絵の具を浸した絵筆を手に行っている様子が想像しにくい。

「はい。僕は大学を卒業後、小村伯爵にお世話になっていたのです」

「小村伯爵？」暮林の形良い眉がピクリと動いた。「古府で娘さんと転落死した？」

「ご存じでしたか。その故小村伯爵と僕は大学の同期で親友でした」

先程の新聞記事に絡む話だ――と帰蝶は偶然がもたらす奇妙な出来事に驚き、唾を呑み鳴らした。まさか先生は予知能力者ではあるまいか、とあらぬ妄想が頭をもたげてくる。

「それで？」暮林は続きを促した。

「その小村伯爵家に――正確に言えば伯爵の未亡人のところに、最近脅迫状が届くようになったのです」川嶋は懐から一枚の紙片を取り出した。

「俺はお前たちをいつも見ている。天罰が下される瞬間は遠い話ではない。覚悟しておけ。

白き復讐

者より」

文面は極めて単純であるが、文字は黒ずんだ赤である。恐らく血で書き記したのであろう。そこから不気味さが伝わる。鬼気迫る雰囲気がある。そこかしこに滲んでおり、単なる悪戯（いたづら）だろうと笑い飛ばせない怨念じみたものを感じさせた。

「これと似たような文面のものが、三日と開けずに数通届きました」

「身に覚えはありませんか？」

「小村夫人は——留美子（るみこ）さんは、他人の恨みを買うような人ではありません！」

川嶋は声を荒げた。大柄で筋肉質の彼がそうすると迫力がある。

「身に覚えがなくとも、恨みというものは、いつの間にか抱かれています」暮林は素気（そっけ）ない。彼は仕事柄世間的な評判など犯罪者の前では何の関係もないことを学んでいる。愉快犯にせよ営利目的者にしても、自分の目的を遂げるためには手段を選ばないのだ。

「……………」

脅迫文を送りつけてきた相手に、常識を求める方が無駄——と遠回しに告げられた川嶋は沈黙した。言われてみればその通りなのだ。こんな狂気を感じさせる代物を送りつけてきた人間の事だ。自我を際限なく肥大させて、本人にしか判らぬ妄想的な正義感を有しているに相違ないのだ。

「誰が送りつけてきたのか見当が付かないのですね？」今度は確認の意を込めて暮林は訊ねた。依頼者に皮肉をぶつけて反応を愉しむ趣味は彼にはない。得体の知れぬ脅迫者の正体を突き止めて欲しいと言うのであれば、探偵としての職務の範疇だ。

「はい。今のところ実害はないのですが不気味で……小村夫人も気味悪がっています」

「そうですか」暮林は頷いて煙管を銜えた。煙草を肺腑（はいふ）まで吸い、紫煙を大きく吐き出す。

傍目から見ると大いに不躰だが、これは彼が考えを纏める時に良くやる癖なのだ。弟子入り以来、師匠の性癖を共に過ごすうちに帰蝶は学んでいる。

その仕種の意味に気づいていない川嶋は、苛々（いらいら）させられたのか、

「暮林先生、それで僕の依頼を引き受けてくださるのですか？」

問い質すように訊ねた。彼からすれば、今は亡き親友が残した愛妻の身を案じるのは、一種の使命のようなのだ。はぐらかされて怒り出すのも無理はない。

その問いかけに対し、暮林は鷹揚とした態度を崩さずに答えた。

「興味が湧きました。実に僕好みだ。お引き受けします」

「では——」

「直ぐに出立しますよ。現地に赴かねば判らないことは多々ありますので」

とんとん拍子に進む話を、帰蝶は何処か他人の話のような気分で聴いている。自らが当事者だという感覚がどうも湧かないのだ。そんな彼女に暮林が促した。

「千綾くん。君も旅支度を調えるんだ」

「私も」帰蝶は自身を指差した。「行くんですか？」

「当然だろう。君は僕の助手なのだからね。僕の捜査が捗るように手助けをして貰わないと困る。それに生きた情報に接するまたとない機会だ」

「成程。判りました」

頷いた帰蝶を視て、暮林は宣言した。

「さあ、古府へ行こう！ 鬼が出るか蛇が出るかは判らないが」

古（いにしえ）の都と言えば、さぞ立派な歴史的建造物があるのだろう——と人々の想像を膨らませるものだ。欧洋州はイタリア王国の首都——ラティウムであれば、その願望を恐らく満たせるだろう。市街地にはラティウム帝国時代に築かれた円形闘技場や銭湯跡地に代表される著名な遺跡が溢れているからだ（イタリア人らしい大らかさで、『現役の建物』として使用されている物もある）。

だが、ラティウムから惑星半周分離れた先である瑞穂皇国の古都には、感傷的（センチメンタル）な気分を満足させる代物は存在しない。平地は少なく、山に山。草むした田舎風景が広がるばかりだ。観光用案内書（パンフレット）から読み取れる情報を要約するとそうなる。

汽車に揺られながら窓から映じる風景を眺めていた帰蝶は、その通りだと認めた。田園風景だと言えば格好がつくが、何も建造物がない場所——草むらや田んぼがただ延々と続くとなれば、皇都と同じ国だとは到底思えない。

「皇都とさほどの距離がないところとは思えませんね」

「この辺は山が多いからね。窪地の皇都とは事情が大分違うのさ。歴史的建造物の殆どは、〈テムジンの軛（くびき）〉の時に灼（や）かれたからね。それ以来、開発されることなく今に至る」

〈テムジンの軛〉とは、この時代よりおよそ七〇〇年ほど前に、瑞穂本国の過半が侵略者——満（まん）帝国に占領されていた時期を指す。瑞穂史には無数の暗黒面があるが、それはその極みで、十数年の間を他民族に蹂躪された経緯から、人種差別が基本的でない瑞穂でも、旧満帝国人——テムジン人は番外だとされている。彼らはこの国の道をまともに歩けないのだ。

「成程」帰蝶は頷いた。次いで、雇い主兼師匠が先程席を外した理由を、その膝の上に載せられているものから見当を付ける。

「ところで先生、それは……」

助手兼弟子のどこか呆れたような眼差しを、暮林は軽く受け止めた。

「旅の風情は駅弁で感じるものだよ」

言いながら弁当の蓋を開ける。程良く火を通された牛肉が甘辛いたれを絡めた格好で濡れ光っている。それがその駅弁の最大の特徴だった。お新香なども隅の方に盛られているが、誰がどう見てもメインは牛肉だろう。

蓋を開けた瞬間に、ぷうんと食欲をそそる匂いが解放される。宗教の規律が緩い瑞穂では、禁じられている肉など、犬や猫といった下手物（げてももの）を除けば、禁鳥——白鶴ぐらいしかない。勿論帰蝶もそうした宗教規則の緩い生活を楽しんでいる者の一人だ。だが、師匠の膝の上に弁当箱が三個もあるとさすがに呆れてしまう。

「人数分買ってきたんだ。君のもあるよ」

「くれるんですか？」

「自分の分だけ買ってきて見せびらかすほど、僕は悪趣味じゃない」

そう言うと、暮林は隣の席に腰掛けていた帰蝶に、気前よく弁当箱を渡した。次いで向かい合う形で座する川嶋に「貴男はどうします？」と問いかけた。

「僕は遠慮します。小村夫人のことが気がかりで……」

秀麗な容貌に苦悶の皺を刻みながら、川嶋は答えた。どうやら本気で古府に残してきた、亡き親友の未亡人のことを気にかけているらしい。

「そうですか。なら僕と君とで分けようか」

師匠にそう言われて、帰蝶は首肯した。活発な女性全般がそうであるように、彼女もまた太るのを気にして食事量を制限するような真似はしない。むしろ活動するために積極的に栄養摂取を求めていると言うべきか。

三人前の弁当を手早く一・五人前に分けると、暮林はそれに手をつけた。ガタンゴトンガタンゴトンと軽快に揺れ続ける列車は、どこかに観光旅行気分を宿した師匠と弟子、真剣な表情で未亡人の心配をする男女を乗せて、目的地へと向かい進んでいく。

古府中央駅は名前負けした感が否めない、寂れた施設である。日頃から人の出入りが少ない場に特有の寂しい風情がそこかしこに漂う。駅員も若い者の姿は少なく、四〇歳以上だと思われる者が過半を占めた。中には還暦を過ぎているのではないか――との老人（ロートル）もいる。

「観光案内所である程度まで把握できていましたが」帰蝶が周囲の風景を見回しながら呟いた。

「本当に何もありませんねえ」

「山また山の平地が少ない土地ですから」川嶋が答えた。彼はこの街の出身ではないので、淡泊なものだ。まあ事実だから否定のしようがないと諦めているのかも知れないが。

「小村伯爵邸は？」

暮林が訊いた。彼はこの地に友人がいるので、最低限の土地勘――外聞や地図上での把握に留まるが――を有しているが、何処に誰の家があるのかを細かく知っているわけではない。

「案内します」川嶋が先導役を務める旨を口にした。「この先に馬車を待たせてありますので」

古府中央駅から幾らか歩いたところに水車小屋があり、その近くに馬車が待機していた。馭者（ぎょしゃ）は田舎の農夫といった風情を漂わせている中年男で、この辺りならば何処にでもいそうな顔つきをしている。その彼に川嶋が声をかけ、暮林や帰蝶が乗り込んでから、馬車は小村伯爵邸へと向かい進発した。

掛け声と共に馬に鞭（むち）が打たれて、舗装（ほそう）されていない田舎道をガラゴロと音立てて進む情景は、一種の芝居を感じさせる。石畳あるいは練石で道が固められた最近の皇都では、体験しようにもできない図だと言える。

「ここからどのぐらいかかりますか？」

帰蝶が川嶋に訊ねた。石ころや木の根などは片付けられているから、途中で車軸が折れて横転する心配はなさそうだが、列車に比べると快適とは言いかねる。

「一時間ほどですね」懐中時計を懐から取り出しながら、川嶋が教えた。

「大分離れていますね」暮林が言った。

伯爵を名乗る資産家が居を構えるにしては辺鄙（へんぴ）な――との意が込められている。

「小村伯爵家は元は大家家なのですがね。故小村伯爵のお祖父さんが大変な人嫌いで、人里から離れた場所に屋敷を建ててそこに移り住んだのです」

「人嫌い……？」

「お殿様と呼ばれる人種にありがちなことですが、変わり者だったようです。まあ周辺の山は殆どが御料地（ごりょうち）で、幾つもの工場を経営していましたから、他人に会いたくないと思えば、その無理を押し通せたのでしょうが」

「成程」

人は他人に決して脚を踏み込ませない心の中で理想郷（ユートピア）を描く。大抵の者は現実の持つ重みに押し潰されて、夢は夢のままで終わるが、金持とか権力者と呼ばれている連中は、持ち前の財力や伝手でその夢を叶えてしまうのだ。

それを愚かしいと言うか羨ましいと評すかで評価が分かれるが、一つの夢を形はどうあれ実現したのは間違いない。

「小村伯爵はどのような人でした？」

変わり者の子孫もまた変わり者なのではないか――との推測をしながら、暮林は故人の親友だった人物に、その人柄を訊いた。

「善人でしたよ。紛れもない」

どこかに意地の悪い響きを持つ質問に対し、川嶋は間髪入れずに答えた。

「先々代とは違う？」

「ええ。伯爵は慈善事業（チャリティー）に熱心な方で、私費で孤児院を運営したり、見所のある青少年に学資を進呈していました。彼に個人的な恩義を感じている人は、この土地に多いと思いますよ」

「貴男もその一人？」

「僕も伯爵に仕事場（アトリエ）を建てて貰いましたからね。画家として独り立ちできるようにと、顧客を紹介して貰ったり……」

遠い昔を思い出すように、川嶋は言った。画家とは確かに浪漫を感じさせる商売であるが、山に住まう仙人ではない以上、仕事を受けて喰わなければならない。その手助けをしてくれた相手への感謝が滲んでいる。

「伯爵が亡くなられた後は？」

「そうした慈善事業は伯爵個人の趣味でしたからね。孤児院は閉鎖され学資支援もなくなりました。事故で伯爵と一緒に娘さんまで亡くなりましたので、それを区切りに」

「財産管理は？」

「小村未亡人がしています。伯爵は親戚らしい親戚のいない方でしたので」

「苦勞なされているんですか？」

「義理堅い使用人が残ってくれましたから。それに、先年南加（なんか）大陸から戻られた資産家が未亡人の後見役を引き受けてくれましたので」

「南加から戻った資産家……？」

「後で紹介しますよ。その方は大抵小村伯爵邸にいますから」

良人亡き後も家を護り続ける未亡人に、南加大陸帰りの資産家――果たしてそれらはどのような人間なのだろう？ 暮林は内心で疑問を弄（もてあそ）んだ。だが、意味のないことだと気づいてやめた。どのみち実際に顔を合わせて話をしなければ判らない事柄は多い。下手な先入観を

抱いて視野を狭くするよりも、柔軟な姿勢こそ大切だと、彼は探偵本能に従い自らに言い聞かせた。

4

辺鄙な場所にある屋敷と言えば、蔦（つた）やペンペン草に覆われた廃墟――との印象を抱く者は多い。それは一面において真実であり、不便な場所に好きこのんで住む変人などそうはいらざるも無い。

壮麗な造りの小村伯爵邸は、そうした偏見を覆すのに最適な材料だと言えた。手入れの行き届いた門や庭に、欧洋州の名門貴族が代々居を構えている場所だと言われても不思議はない洋風の屋敷は、初めて眼にする者の息を呑ませるのに十分な威力がある。

「市街地から遠く離れた場所にあるお屋敷だと聴いていましたが」嘆息しながら暮林が視線を走らせている。

「僕も初めて視た時は魂消（たまげ）ました」川嶋はそうした反応に慣れているのか、薄く笑うのみだ。「伯爵のお祖父さんは欧洋州かぶれだそうでして。変人につきものの凝り性な部分があり、この屋敷も由緒ある建築物を欧洋州の貴族からもらい受けて移築したものだそうです」

「あるところにはあるんですね」

意図的に「お金」の部分を省いて、帰蝶は広大な屋敷を見回した。

彼女の言葉の、足りない部分に気づいて、川嶋は苦笑した。他人から何と言われようともまるで気にしない人種とは探せばいるものなのである。

川嶋の案内を受けて、一同は屋敷の敷地内に足を踏み入れることにする。先導役である川嶋が呼び鈴を鳴らすと、鉄で造られた門扉（もんぴ）が軋み音立てながら開く。小村伯爵の父親の代から仕えているという執事――志田（しだ）老人が、黒い礼服を着て立っているのが見えた。

「お待ちしておりました。奥様のところにご案内します」

干涸（ひか）らびた河童（かっぱ）のような外見をしている志田は、声も嘎（しわが）れていた。少年向けの探偵小説に出てくる怪老人をそのまま具現化したような人物だと言えば、そこは判り易いだろうか。

志田執事の案内を受けて、暮林たちは屋敷内へと入る。内部は外見通り洋風な造りで、緋色の絨毯（じゅうたん）が廊下に敷かれている。壺（つぼ）や絵画に代表される装飾品も、素人目にも明らかに高そうな代物ばかりだ。

「どれも一身代に相当するものばかりですよ」川嶋が教えた。

「この屋敷で隠れん坊をしたら、一生かけても返せない借金を背負うことになりそうだね」

暮林の笑えない冗談に、帰蝶は肩をすくめて見せた。娘さんも伯爵と一緒に亡くなった――との話を思い出すと、この屋敷には遊び回る子供などいそうにない。いや先生ならば必要であればこの場でも銃撃戦をしかねないかと考えを改めた。

ひときわ立派な扉の前で、志田が歩みを止めた。そこを叩く。

「奥様。川嶋様とそのお連れ様が」

「お通しして」

扉越しに、老人の嘎れた声とは正反対の、張りのある声が響いてきた。若く美しい女性であるのが、それだけで理解できた。

恭（うやうや）しく頷いた志田が、扉を開いた。川嶋を先頭に立てた一同は、室内へと入る。

室内には、窓から明るい陽射しが差し込んでいた。そよぎ込んできた風が白い遮光幕（カーテン）を揺らしている。調度品の数々は、廊下がそうであるように高級品で固められており、格調高い雰囲気にある。

暮林は、部屋の中央で、丸洋卓（テーブル）を挟んで、白髪白髯の老人と向かい合う形で座っている女主の方へと目をやる。遮光幕と同じ色をした洋服を着た、咲き初めた白桜のような感じの人である。若い娘のように短く整えられた黒髪が、艶やかな光沢を放ち、柳眉と切れ長の美しい眼がそこに続く。

娘がいた未亡人などと言われてもピンと来ない風情がある。抜けるような白い肌に雅典彫刻のように形よい鼻や紅色をした唇を視ていると、いつの間にやら退き困るような感じがする。

「留美子さん。暮林探偵をお連れしました」

挨拶を促されて、暮林は一礼してから名乗った。

「皇都で探偵稼業を営んでいる、暮林千榛と申します」

帰蝶が続けて答える。「先生の助手の千綾帰蝶です」

「ほう。探偵」雪のように白い髪をした老人が、暮林たちの方へ顔を向けた。

暮林は彼の顔を見返すが、反射的に仰天する。彼は顔に大きな黒眼鏡（サングラス）をかけていた。先に志田を「少年向けの探偵小説に出てくる怪老人」のような人物だと記したが、彼は「怪奇小説に出てくる死神みたいな男」のようだと評せた。

これは外見だけに起因する問題ではない。前進から漂う不気味な波動が、彼の印象をどうしても悪く、他者に警戒心を抱かせるような空気を放たせているのだ。

「ああ、これですか」老人は暮林が見せた反応に慣れているのか、不快感を覚えた素振りも見せずに応じた。「儂は南加大陸帰りでした。彼の地のお日様に眼をやられたのです。医者から直に天道を視るなど言われまして。おかげでいつも黒眼鏡をするようになったのです」

「南加大陸帰り……？」暮林は記憶の引き出しから情報を取り出した。

「となると、貴男が小村伯爵の未亡人の後見役を引き受けた、という？」

老人は頷いた。川嶋が後を引き継いだ。

「里中（さとなか）さんはかれこれ半世紀ほど前に一念発起して南加大陸に渡り、そこで莫大な財産を築かれたのです」

南加大陸には、一山当てようと夢見て彼の地へと渡った瑞穂人入植者が少なからずいる。だが、どんな業界にも当てはまることだが、甘い夢を見る者ほど地獄を見る。成功した者はごく僅かで、大半は喰うや喰わずやのうちに異境の土と化すという。

「凄くないですか。それでなぜ昨年に戻られたので？」

「儂も瑞穂人じゃからな」老人は悠然と答えた。「生まれ故郷で余生を過ごしたいと思い、南加で築いた財産を整理して戻ってきたのじゃ」

「里中さんは、亡き主人の、母方の親戚ですの」小村夫人が愛想の良い女性特有の、優しげな笑みと共に言葉を添えた。

「親戚……ああ……」

急にやって来た成金老紳士など、胡散臭（うさんくさ）いものの極みだ。よくそれで貴族未亡人の後見役になれたな——と暮林は疑問を弄んでいたが、それが氷解した。彼は初めから「身内」だったのだ。

「しかし留美子さん、警察ではなく探偵とはどういう風の吹き回しかな？」

じろり、と黒いレンズ越しに、里中は暮林たちを睨め付ける。

成程。胡散臭さなら僕らの方が余程上か——と暮林は奇妙な感心をした。

「僕の判断ですよ。もうすぐ留美子さんと里中さんの婚儀なのに、警察を呼んだら騒ぎが大きくなり、それどころじゃなくなりますからね」

「婚儀……？」暮林は首を傾げた。

二〇歳だと言われても納得がいきそうな小村夫人と、どう見ても古希——齢七〇を過ぎている過ぎている里中老人が結婚するなどと言われると、質の悪い冗談にしか聴こえない。

里中がはにかむような、照れ臭さを隠しているような、何とも言えない感じで言った。「儂が留美子さんに一目惚れして、頼み込んだのじゃよ。老いらくの恋というやつじゃな」

「里中さんは南加では女嫌いに通っていたそうで、この年まで独身だったそうなんです。ところが帰国して間もなく留美子さんの虜（とりこ）になったそうでした」

暮林は非礼を承知で、里中と小村夫人の顔を見比べた。とても経産婦とは思えぬ、花が咲いたような美女と、額や頬に深い皺が刻まれた老人とでは、「不釣り合い」では済まされない隔たりがあるように感じられた。二人の間の唯一の共通点と言え、莫大な財産を保有している事だろう。男は汗と涙の果てに自力で金を積み上げ、女はその美貌を活かして伯爵夫人になり、良人亡き後にその財産を相続した——との過程の違いがあるが。

もしこれが、財産も何もない小娘が、老人の妾にでもなるというのであれば、疑問など微塵も感じずに済んだだろう。よくある話の一言で片付けられる。だが、小村夫人は亡夫から一生を享楽（きょうらく）のうちに過ごしてもあまりある金銭を相続しているらしい。今更金策に苦労するような身分でもあるまいし、解せぬ。

思考が気づかぬ間に視線に現れていたものであろうか。

「志田さん。暮林さんたちに屋敷の中を案内して差し上げて」

小村夫人が、刺すような、絡みつくような暮林の眼差しを言葉で遮るかのように、志田老人にそう告げた。

「畏（かしこ）まりました」老執事は一礼した。

他人の色恋沙汰にとやかくと口を挟むのは、上品な振舞（ふるまい）とは言えない。また事件の現場となりうる場所を下見しておく必要もある。暮林は異を挟まなかった。

「それでは」暮林もまた一礼した。この屋敷には表沙汰に出来ない話の一つや二つは潜んでいるのではないか——と持ち前の作家精神あるいは野次馬根性とでも言えるものを働かせながら考えた。

暮林の後に、帰蝶も続く。彼女は彼女なりに、女の嗅覚（きゅうかく）で何かしらの事情を嗅ぎつけたらしい。だが、それをこの場で口にしないだけの節操はわきまえていた。

5

志田執事は外見に違わぬ無愛想な老人である。質問されればそれに答えてくれるが、自分から余分な事柄について触れようとしないタイプの人物で、放っておいたら現世の終わりが告げられるその日まで、沈黙を貫いているのではないか――と邪推できた。

その老人と共に広い屋敷の中を一巡りするのは、ある意味における忍耐力を必要とする行為だった。少なくとも暮林たちはそう感じた。むっつりと押し黙った年寄りと知らない場所を歩いて回るのが好きだという特殊な性癖の持主以外は同意できるであろう。

探偵として人に接することになれている暮林は、普段は自身のコミュニケーション能力に不足を感じることはない。初対面の相手でも何かしらして会話が成立するきっかけを掴み、情報を引き出してきた。だが、「他所から来た、信用のおけない相手」を頭から拒絶してかかる姿勢を見せる老人が相手だと、何をとっかかりにしてよいのか直ぐには判らない。

暮林の助手――帰蝶にしても、師匠より優れた交渉術を有するわけではない。二人して「どうにかならないものかしら」と目配せをしながら語り合う。けれども困惑の果てによい知恵が浮かぶ道理もなく、仕方なく帰蝶が世間話を振るような感じで、窓の外から見える広葉樹のことを口にした。

「立派な樹木ですね」

「顰（しか）め面」と題された仮面を嵌めたような顔つきの老人、その表情に僅かながら変化が生じた。彼は微かに頬を綻ばせてから答えた。

「伯爵様の御母堂がお好きな木でした。御母堂自らがお植えになって」

「御母堂が」今度は暮林が訊ねた。「では今は誰が手入れを？」

「女中の中に植物好きな者がおりまして。今はその者が。ああ――」

志田は何か気づいた様子で、手招きをした。仕種（ジェスチュア）で呼ばれたことを察した相手が、早歩きで近づいてくる。

「お呼びですか、志田さん」

張りのある少女の声が響いた。暮林が相手の顔を視ると、直ぐにその理由が理解できた。彼女はまだ一〇代中頃から後半程度の少女だった。一昔前のヴリタニヤの金満家で雇われている洋女中（メイド）を連想させるエプロンドレスを着用している。胸元にまで垂れている黒髪のお下げが、彼女に幼さを更に添加しているようで、「絵本から抜け出してきた可憐な少女」そのままとも言えた。

「皇都から来たお客様だ」

志田が暮林と帰蝶の二人を示すと、少女女中はぺこりと頭を下げた。

「私は当家で女中をしている寒川茅乃（さむかわかやの）と申します」

「探偵の暮林です。こちらが僕の助手を務めてくれている千綾くんです」暮林が応じ、帰蝶が「

宜（よろ）しく」と続けた。

「この寒川が庭木の手入れをしております」

志田の言葉に、茅乃ははにかみの笑みを浮かべた。

「旦那様が元気でおられた時に教わったのです。草花の世話は昔から好きでしたし」

「小村伯爵が以前は直に手入れを？」

「旦那様は植物がお好きだったんです。優しいお方で私のような者にも親切に接してくれました」茅乃は昔を懐かしむような調子で言い、俄に眉を曇らせた。「奥様はあの木を視ると旦那様のことを思い出して辛いと仰るのですが、切り倒すのも枯らすのも忍びなくて、私が暇を見て手入れをしているのです」

「成程」暮林は得心の表情を浮かべた。彼には屋敷の広さの割には使用人の数が少ないように感じられていた。庭の手入れだけで大変そうなのに、川嶋の弁からするに、義理堅い使用人ぐらいしか残されていないようだがどうしているのだろう——と。どうやら残った面々が何役か兼任しているのだろう。

「後で庭を見せてもらえませんか？」

暮林の問いかけに、茅乃は即答せず志田の方を視た。「私は構わないのですが」

「奥様のお客様だ。ご案内して差し上げろ」

「判りました」

「では、また後で」暮林は少女を長く一カ所に留めるのを気の毒に思い、話題を転じた。「屋敷内を一巡りしてから案内を頼みます」

「はい」茅乃は一礼した。「私は掃除の続きをしますので」

去りゆく少女女中の後ろ姿に一瞥をくれながら、暮林は志田に訊いた。「彼女——寒川さんは、ここに勤めて長いんですか？」

「伯爵様がお亡くなりになる一年前からですので、三年ほどですが」

「来て直ぐに伯爵のお気に入り？」

彼女の年齢を一五、六だとすれば、一二歳か一三歳で奉公を始めた計算になる。亡き伯爵が少女愛好家だったのならば判るが、彼には美人で気立てのよい妻がいる。その辺の心理は前後関係を知らねば図りかねた。

「正確に言いますとですね」志田老人は孫ほどに年が離れているとは言え、同じ屋敷に勤める同僚が無責任な好奇心に晒されるのを怒っているようだ。

「寒川は伯爵様が経営なされていた孤児院の出身なのです。伯爵様は孤児院にちよくちよく足を運び、身寄りのない子供たちを慈しんでいました。寒川もその一人で、彼女は伯爵様にご恩返しをしたいと、この屋敷に奉公することにしたのです」

「ああ成程」暮林は自分の邪推を恥じた。「だから彼女は伯爵が庭に残したものの世話をしているんですね」

志田は暮林の顔をギロリと睨んだ。「皇都の探偵というのは、皆が想像力が豊かなのですかな？」

余程腹に据えかねているのが、表情や態度、更には仕種にまで現れている。人には他人が踏み

込んでは行けない領域があるのを熟知する暮林は、素直に詫びた。

「済みませんね。僕は探偵稼業だけでは喰えないので、小説家もやっているんですよ。おかげで無駄に好奇心ばかり発達しまして」

「小説家……ああ……」

「新聞記者（ブンヤ）じゃありませんから、知り得た情報を世間に面白おかしく伝える習慣はありませんよ。探偵として職務の範疇（はんちゅう）で知ったことに対する守秘義務もありますし」

胡散臭い相手を視る時の、怪訝とも侮蔑とも取れる色を双眸に浮かべた志田は、「お客様が当家で知り得たことを、職業倫理に従い、口外なさないことを期待します」と強烈な釘を刺した。

「心得ています」暮林は微苦笑を浮かべた。

そんな二人の遣り取りを、帰蝶はハラハラしながら見守っていた。

6

人はどんな時でも食事を摂らねばならない。これは国や時代を超えた決まり事だ。機関車や自動車が燃料補給なしに動くことが叶わぬように、人間もまた栄養補給なしに活動することは出来ない。

そんなわけで、暮林や帰蝶も夕食の相伴に預かることになった。

小村伯爵邸は、洋風な造りである。そのため食事も欧洋州の大貴族が晩餐会（ばんさんかい）を催しても問題がない広さを持つ大食堂で取る。一度に数十人が列席できる大きな洋卓の上に雪のように真白（まっしろ）で染み一つない洋卓掛け（テーブルクロス）が掛けられ、幾枚もの皿や食刀（ナイフ）、肉刺（フォーク）が並べられる様は、圧巻の一言に尽きた。

「まるで皇都洋風旅館（ホテル）の洋食屋（レストラン）みたいですね」

そう帰蝶が小声で言うのを、暮林は同じく小声で返した。

「月並みな感想だが僕も同感だよ。日頃の食生活がどうにも貧しくてね」

「冒険旅行に出ているのに、満漢全席（フルコース）のガリヤ料理何て出るわけがありませんからね」

「貧食は冒険の友達さ。身体を鍛えておけばいざという時に役に立つ。贅沢慣れした懦弱な人間には想像がつくまいが」

「負け惜しみにも聴こえます」

「……………」

弟子の直接的な指摘に、師匠は返す言葉を持たない。うまい料理をいつも腹一杯食べたいと願うのは、人間の本能だからだ。美容のためにと減量（ダイエット）を心がけるご婦人方にしても、腹の内から込み上げてくる衝動と日夜戦っているではないか。

「……済みません、先生の食事内容を余計に貧しくしている身で」

「言うな。自分で選んだ道だ。躊躇いも後悔もない。それよりも今のうちに栄養を付けておこ

うじゃないか。何日も何食も預かれるとは限らないのだからね」

「はい」帰蝶は頷いた。

晩餐会——と言うには大袈裟で、精々が夕食会と言える集まりに来たのは、暮林と帰蝶の二人の他には、招待主（ホステス）である小村留美子夫人に、その婚約者である里中老人、彼らの共通の知人である川嶋龍夫画伯だけである。数十人は座せるだけの席に僅か五人では寂しく、如何にも閑散としている感じがする。

給仕役は、志田老人に茅乃である。主人たちの食事の世話も彼らが兼任しているらしい。厨房（ちゅうぼう）から料理を運んできた彼らは、そつなく配膳を進めてゆく。

前菜のスープからして美味だ。洋匙で掬い一口分を口腔に運んだ暮林は、そう感じた。腕の良い料理人を雇っているのだろう。今は閑散としているこの大食堂も、かつて主人が健在だった時には、幾人もの来客があり、大賑わいだったのだろうか——と彼はスープの味から在りし日の幻想にチラリと思いを向けた。

そこに音楽円盤（レコード）の音が重なる。食堂の隅に蓄音機が置かれていたのだ。それが西洲合奏団の格調高い調べを奏でてゆく。

「まるで皇国聯合艦隊（インペリアル・グランド・フリート）司令長官の昼食みたいですね」

「確かあれは第一艦隊旗艦艦上で軍楽隊付だったっけ」

暮林と帰蝶は、話に聴いた海軍三大要職——皇国聯合艦隊司令長官・海軍総長・海軍大臣がそれである——の一つ、一般国民に人気のある役職について触れた。

瑞穂海軍の最大戦力である皇国聯合艦隊を率いる人物は、主力戦艦群で構成される第一艦隊司令官も兼任するのが常だ。そしてその艦隊の旗艦は、世界有数の巨大戦艦と決められている。皇国聯合艦隊司令長官は、そこで軍楽隊付の昼食——豪勢な洋食であることが多い——を最前線にでもない限り、毎日取るのだ。

如何に金満家とは言え、小村伯爵家にはお抱えの交響楽団はいないらしい。食事中に流される音楽として、蓄音機発のそれが選ばれたことから、暮林はそう考えた。もっとも、裕福な家の蓄音機だから質が良く、音はかなり鮮明なのだが。

音楽を聴きながら、食事は進む。かなり量のある牛炙肉（ビーフステーキ）——主菜（メインディッシュ）を食べ終わると、食後の締め（デザート）としてケーキが運ばれてきた。薫り高い珈琲と共にそれを愉しもうとした矢先、音楽が終わった。微妙に時間が足りなかったらしい。

その沈黙に合わせるかのように、不意に室内の電灯が消えた。今まで真昼のように明るかったものが、闇に包まれる。

「何だ、停電か？」里中が訝しんで電灯の方を見上げた。彼はいつも黒眼鏡を掛けているので暗闇に眼が慣れている。対応が老人の割に素早いのはそのためだ。

俄に室内をざわめきが満たし始めた時、更なる異変が起きた。暗闇の中に、窓からぼんやりとした光が差し込んできた。雷であろうか？ 否である。雷声一つ響いていない。では雲の切れ間から気まぐれな月光が差し込んできたのかと言え、そうでもない。

ぼんやりとした光は、壁に焦点を定めると、はっきりとした形をそこに結んだ。大きな眼だ。巨人のぎらついた双眸だ。何とも言えない憎しみを湛えた輝きが、室内にいる人間を睥睨してい

るのだ。

「先生！」

帰蝶は怯えて、隣に座っている暮林の身体にしがみついた。無理もない。突然オバケに出くわせば、年若い娘が近くにいる男性に頼るのは当然の反応である。

一方、頼られた暮林は、弟子に慰めの言葉をかけもしない。彼もまた動揺しているのであろうか？ 違う。では不甲斐ない弟子を無言で叱りつけているのか言えば、そうでもないのだ。彼は乙女の身体から発せられるかぐわしい香りや柔らかな感触などを一切無視して、壁に浮かび上がった巨人の眼を睨んでいた。どこかで視たことがあるような気がする――と記憶の中の引き出しを確認している。

場数を踏んでいる師匠が、弟子よりも冷静に物事に対処できるのは珍しくない話だが、怪奇現象の素人とは言え、川嶋や留美子夫人の慌てようは異常であった。彼らは人間の眼を一〇〇倍から二〇〇倍に拡大したものを眼にした途端に、絞め殺される獣のような悲鳴をそれぞれの口唇から迸（ほとばし）らせていた。

「あれを！ あれを早く――」

「何とかして」の部分が口にされていない。だがその意図は理解できる。されども停電の最中に起きた怪奇現象を今すぐどうにか出来る者など、この場にははいはしないのだ。

「落ち着きなさい留美子さん」里中老人が恐慌状態にある婚約者の身体を、七〇を過ぎた老人とは思えぬ力強さと共に抱き締めた。

「君、志田くんでも寒川さんでも構わないから、配電室へ行ってきてくれ。停電をまずどうにかするんだ！」

何の権限か判らないまま発せられた命令。だが、最初に名前を呼ばれた志田執事が、暗闇の中を手探りのまま進み始めた。

ガタガタとマラリアにでも罹患したかのように震える小村夫人を固く抱き締めながら、里中は川嶋を叱りつけた。

「川嶋くん、君まで恐慌を来してどうするのだ。こういう時は若い君こそがしっかりしてくれなくては困る」

返す言葉もない批判を浴びせられた川嶋は、一緒に慌てた自分を恥じて俯いた。

そこに追い打ちがかけられる。部屋の隅から謎の声が響いてきた。

「うふふふふ……」

不気味な笑声。地獄の底から響いてきた、悪鬼の嘲笑（ちょうしょう）とも言えるそれは、急速にその声量を増してきた。怪奇現象とは、一つ起きるとドミノ倒しの連鎖するものなのであろうか？

この場にいる全員が不可解な出来事に恐怖を感じ、身を硬くして脂汗を額に滲ませていると、声のみの存在が語りかけてきた。

「留美子。俺はいつも君のことを視ているよ。俺は君が普段何を食し、何を読み、誰に語りかけているのか全て把握しているのだ。そう。俺は君を知ったその時から、ただ見守るだけで満足できていた。夫を亡くし、寡婦（かふ）となった君を心から慈しんできた。俺の存在を終生報せる

まいと考えていたのだ。だが――」

一瞬間が置かれた。全員が固唾を呑む。

誰もが声の主が次に何を口にするのかを考え、聴力の全てをそこに傾けていた。

「君は再婚を決めた。そこにいる老翁（ろうおう）とね。俺はこれを許しがたい裏切りだと感じた。誰に恥じることない大貴族である小村伯爵ならば、まだ俺も諦めがついたが、老い朽ちた穢らしい老人と一緒にとなると言われて納得できるはずがない。俺は嫉妬に我が身を焦がしたよ。そして復讐を決心した！」

次の瞬間発せられた、叩きつけるような声は、か弱い夫人の心臓を鷲掴（わしづか）みにでもしたのか、遂に失神させた。何と表現してよいのか判らない、微かな呻き声と共に、彼女は白目を剥いてしまったのだ。人形のようにだらりと手を下げ、口の端から泡を吹いていた。

帰蝶は度胸のある女性らしく、さすがに気を喪ってはいないが、文字通りの鬼気迫る声に恐怖を感じているらしく、暮林に縋り付く手、それに更なる力を込めた。

「俺はもう君を誰にも渡さない。誰のものにもさせない。俺がこの結婚話を滅茶苦茶に壊してやる。誰にも邪魔はさせないぞ。君は俺のものなのだ……」

冥府の獄卒がするような不気味な嘲笑が部屋全体に再び響き渡る。悪夢を現実に見るような気持で、気絶した留美子夫人を除く面々が全身を強張らせていると、不意にあかりが戻った。巨人の眼が消えた。

「停電が、直ったか」

暮林のその声が呪縛を解く鍵になったのか、一步も動けぬ彫像のようになった各自の身体が、俄にその機能を取り戻した。椅子から立ち上がった川嶋が、声の正体に気づいて、そこに駆け寄った。

「蓄音機からだ」彼は針を外すと、音楽円盤を憎々しげな手つきで外した。「蓄音機にこいつが仕掛けられたんだ」

蓄音機には、いつの間に誰が仕掛けたものか、「白き復讐者より」という紙が貼られていた。恐らく暗闇に紛れて、問題の人物がそれをセットしたのだろう。

「こんなもの！」

音楽円盤を床に叩きつけて壊そうとした川嶋を、暮林は制した。

「待ってください。犯人が現場に残した貴重な証拠品です。壊さないで」

そう言われると、川嶋は今にも床に叩きつけようとしていた物に込められていた力を抜いた。成程確かにそうなのだ。これまで不気味な手紙だけを送りつけてきた謎の犯人、その正体に迫る材料になろう。

「しかし暮林さん、犯人はいつの間にこんな真似をしたんです？ 僕には皆目見当がつきませんが」

「僕にも、今は断言できる事は殆どありません」

「殆ど？ では幾つかはあるのですか？」

「はい。『白き復讐者』を名乗る脅迫犯は実在すること。そして彼が既にこの屋敷の中に身を潜めていることです。まさか彼が幽霊でもない限り実体があるはずですから」

「幽霊――」川嶋は身震いした。つい先程まで壁に浮かんでいた巨人の眼が彼の脳裏に焼き付いて離れないのだろう。それが表情からも窺えた。

「それにしても犯人はなかなかの行動派ですね。僕が来たその日のうちから行動を開始するとは」暮林は脅迫犯に対し感嘆とも取れる言葉を漏らした。

「暮林さん、感心ばかりされても困ります」川嶋は叱りつけるように言った。「『白き復讐者』を名乗る脅迫者は、もうこの家の中に忍び込んでいるんですよ。どうかかしてくれないと――」
「判っています。僕も目の前でこんな事をやられて闘志（ファイト）が湧いてきたところですよ」

「では……」

「明日から本格的な調査を開始します。この屋敷の何処かに潜んでいる犯人を見つけ出し、白日の下に晒して見せます」

「そう仰ってくれるのは心強いですが……」

チラリ、と川嶋は失神している留美子夫人の方を視た。彼女は間もなく正式な伴侶になる老人に抱かれて眼を閉じている。そうした無残な様でさえ、どこことなく美しかった。

「留美子さんを、部屋に運ぼう」

老人に促されて、川嶋と一緒に留美子夫人を自室へ運ぶ手伝いを始めた。使用人たちは、まだ近くにいるかも知れない犯人を捜すためにこの場を離れており、彼らでやるしかなかったのだ。

「先生……」

帰蝶は意識を現世に留めていたが、自体の急な進展に頭がついていかず、戸惑いを表情に現していた。

「僕らも用意されて部屋に戻ろう」暮林は弟子に告げた。「考えを整理したい」

「はい」

師匠の脳裏で進められているであろう推理の数々。機長はそれを重い気を取り直した。先生は肝心な時に我が身を張る気概があるし、それを実行に移せるだけの能力もある。この人についていけば大丈夫なのだ――と彼女は自らに言い聞かせた。

7

暮林たちに用意された部屋は、外部から来た客人が宿泊するために設けられたものだった。公式には夫婦でも親戚でもない彼らは、若い男女という事もあり、別に部屋を用意されていたのだが、明日以降の予定を話し合う意味もあり、この日は日付が変わる頃になっても一緒にいた。

「これが屋敷の見取り図なんだが」

暮林が机の上に手書きの見取り図を置いた。藁半紙（わらばんし）に鉛筆（えんぴつ）である。如何にも急拵えという感じは拭えず、彼個人が用意したものであるのが一目で理解できた。

「先生、これは？」

「昼間のうちに志田さんと屋敷の中を巡っただろう。それを頭の中に叩き込んで作成した。通してもらえなかった区域は推定になるが」

「一度視ただけで覚えた？」

「記憶力が勝負な部分もあるからね」暮林は職業上必要な事柄だから身につけたと主張した。「証言の食い違い――前後に翻された言葉の矛盾に気づくには、自分自身が覚えている必要がある。まあ日常生活では揚げ足取りにしか使えないがね」

「さすが先生」

帰蝶はおもねりの意を込めずに褒めた。彼女は方向音痴ではないが、初めて足を運んだ場所の見取り図を早速作成できるほど器用ではない。これからも暮林と行動を共にするのであれば、否応なしに身につけなければいけない能力の一つになるのかも知れないが。

「元が欧洋州の大貴族の屋敷だけあって、無闇矢鱈（やたら）と広い。出不精な人間が自室と食堂の往復ばかりで過ごしていたら、一生足を運ばない区画が山のようにある。使い道のない場所は物置代わりにされていることが多いそうだから、誰かが隠れ住むとしたら、その辺りだろうね」

「お化け――などとは考えていないんですね？」帰蝶が念を押すように訊ねた。彼女は大食堂で視た怪奇現象が忘れられないらしい。

「お化けだって？ 莫迦を言っちゃいけない。そんなものがこの世を平然と闊歩（かっぽ）しているのならば、今頃は霊媒師（れいばいし）が国家公務員になるか免許制になっているはずさ。確実に必要だと思われるものは、政府はいつもそうしてきたからね。酒や煙草を皆が無許可で造れたら、收拾がつかなくなるよ。

霊媒師もそれと一緒にさ。本当に幽霊がいるのであれば、政府が注意を呼びかけている。それがないのは、大抵の人が信じているように、幽霊などいないからさ」

「なら、宜しいのですが」帰蝶は冷や汗を額に滲ませる。

「君ねえ」暮林は頼杖を突いて呆れたような眼差しを弟子に向けた。「探偵ならば常識を基準に物事を考えなくちゃ。お化け怖いじゃ話にならん」

「私、小説家志望ですから」帰蝶は弁解した。「想像力が豊かなんですよ」

「怪奇(ホラー)小説か。僕も知り合いの編集者に頼まれて何度か別名で書いたが」

話が思い切り脱線しかける。二人とも探偵としての仕事より小説家とその秘書みたいな感じで過ごすことが多いから、基本的にそちらの方に関心が強いのだ。

日常の延長とも取れる遣り取りの無意味さに気づいた暮林が、路線修正をかけた。

「ともかく犯人は人間だよ。でなければ、わざわざ血文字で脅迫文など書いて送りつけたりするものか。音楽円盤の仕掛けからしてもそれは判る。相手が幽霊ならば、文明の利器になど頼る必要はない」

「あの巨大な眼は？」帰蝶が最も気になる部分を訊ねた。あのお化けの眼。その謎について暮林はまだ一言も触れていないのだ。

「あんなものは難しくない」暮林は一刀両断するような感じに答えた。

「難しくない!？」あまりのさりげなさに、帰蝶は素頓狂（すっとんきょう）な声を上げていた。

「どういうことです？」

「簡単さ。あの窓の近くに大きな木が植えられていたろう。あそこに実物幻灯機と懐中電灯を抱

えた人間が一人いれば良い。後は暗闇と混乱が投影したものを何倍にも膨らませてくれる」

実物幻灯機とはレンズの屈折と光の動きを利用した玩具（おもちゃ）だ。それをを用いると胡麻粒（ごまつぶ）よりも小さな虫けらが何倍もの大きさに拡大された姿で壁に映し出される。子供がわざと締め切った暗くした部屋で捕まえた甲虫（かぶとむし）や蜻蛉（とんぼ）を、襖（ふすま）を映写幕（スクリーン）代わりにして大写しにするのは、珍しい話ではない。

「成程。どちらも懐に入るような大きさのものですな。抱えて木を登るのも不可能ではない」帰蝶は顎に手を当てて感心した。だが直後におかしな点に気づく。

「でも待ってください。停電の直ぐ後にあれは現れたんですよ。配電室に忍び込んで電源を落とし、あの木に登るにはどう考えても一〇分以上は必要なはずですが」

彼女は見取り図に視線を落としていた。暮林と一緒に屋敷の中を歩き回ったから、移動に必要な時間がどのくらいなのか、おおよその見当はついている。

「偶然に頼って木登りするなんてあり得ないな。犯人は停電が起きると確信していたことになる」暮林は弟子が指摘した問題について触れた。

「つまり、まさか……」帰蝶は唾を飲み下した。

「犯人は複数いると考えていい。もしくは屋敷の使用人の中に協力者がいる」

暮林は断言した。帰蝶は絶句した。複数犯か内通者がいるなどと突然言われても、自体の進展が急で頭が追いつかないのだ。

「実物幻灯機云々（うんぬん）についてあの場で触れなかったのは、誰が犯人の一人、あるいはその協力者なのか判らなかつたからだよ」

「複数犯か内通者――」帰蝶は驚きに眼を瞬いている。混乱状態から立ち直れないままに、思いついたことを口にした。

「どこかに抜け穴とかはありませんかね？ 古いお屋敷を移築したものなのではないでしょうか？」

貴族に代表される特権階級は、実のところ臆病者が多いのである。敵など両手足の指では足りないほどいるという輩は珍しくないし、その暮らしぶり――一般民衆から税金を巻き上げ、贅沢三昧（ぜいたくざんまい）を続けている――だけで千万単位の人間の恨みを買っている。慎重かつ攻撃的で、「敵」だと認識している存在が近づいてきただけで、殺すか逃げ出すかしたくなるぐらいが丁度良いとの極論もある。

その理屈に従えば、帰蝶の言う「抜け穴」は一定の説得力を帯びている。殺せないのなら逃げるしかない――との常識内に収まるからだ。

だが――

「抜け穴があるにしてもおかしい。何で犯人がそれを熟知しているんだ。危機的状況に際しない限り、出番がない代物だなんて、一族の者しか知らないとみるべきだ」

「確かに……」

犯人が内部事情について精通しているのは、疑う余地がない。しかし、あるかどうかは判らない抜け道を相手が使用しているのを前提に話を進めるのは、今は無理がある。

「明日からは屋敷の内外を探してみよう。今日はいろいろあって疲れているんだと思う。部屋に戻りなさい」

「一人で、ですか？」

まるで本物の幽霊屋敷にでも迷い込んだかのような顔つきになる帰蝶を、暮林はたしなめる。「君ももう子供じゃないだろう。幾ら僕らが一緒にいるのが仕事とは言え、夜中も同じ部屋で過ごしたとなれば、あらぬ噂を立てられかねない。それでは君も困るだろう」

「先生なら構わない気もしますが……」

「莫迦を言わないでくれ」暮林は菓子や玩具をねだる近所の子供をあしらうような口調と身振りを交えた。

「僕ももう休む。睡眠不足は推理の敵だ。頭の働きが鈍くなるとロクな考えが浮かばなくなる。君もそうしなさい」

体よくあしらわれた――と帰蝶は感じた。黒曜石を思わせる瞳に名残惜しげな光を束の間だが宿す。暮林の意思が変わりそうもないのを確認すると、小さくため息をついて辞去する旨を告げた。

「それじゃ先生、お寝(やす)みなさい」

「ああ」暮林はおざなりに手を振る。「君もお寝み」

扉を開け閉めする小さな音。さほど身体が大きくない人間が歩み去る時に発せられる小さな足音。それらが完全に消えてしまうと、暮林は寝間着にも着替えずに、寝台に倒れ込んで顔を埋めた。金満家が客のためにしつらえた寝床の、奇妙な柔らかさが顔面を通じて脳に伝わる。

そんな感触を、愉しんだかどうかはさておき、満喫した暮林は、大きくため息をついた。

「別に手を出さなくても、一緒に寝るぐらいはしても良かったかな」

暮林は比利品から内地――瑞穂本国へ戻る船の道中から、帰蝶のことが気になっていた。あの時、彼女は護身のために男装して筆名（ペンネーム）だけを名乗っていたが、自分の好みをそのまま現したかのような顔立ちを一目見た時の衝撃は忘れられぬ。

面喰い――異性のことを容貌だけで評価するという癖を、暮林は持ち合わせていない。少なくともそのつもりでいた。帰蝶と出会う前までは。

だが、今では、仕事の手伝いという名目で彼女と毎日と一緒に過ごせるのが楽しくて堪らない。年上の余裕を見せるために素気ない態度を続けてはいるが、そのうちに見抜かれるのではないかしら――と疑っている。

もしかしたら、意外に鋭い彼女のことだから、全てを理解した上で小悪魔的な態度を示し、こちらをからかっているのかも知れない。誰かが言っていたが、色恋沙汰は先に惚れた方の負けなのだ。常に相手に主導権を握られるから。

そこまで考え進めて、暮林は寝台からむくりと顔を起こした。

「莫迦なことを考えていないで、もう寝よう……」

作家だから徹夜には慣れている。だが、犯人と近接格闘をしなければならない時に寝不足では体力的に困る。あと一踏ん張りが利かないばかりに全てを喪った者は数多いのだ。健全な精神と肉体は決して無関係ではなく表裏一体なのだ。どちらかが崩れる時に、もう片方も運命共同体となり崩壊する。

旅行鞆から素早く寝間着を取り出して着替えた暮林は、部屋の明かりを消した。掛け布団を頭

から被ると、直ぐに寢息を立てた。

部屋の中に衣擦れの音が響いている。次いで、男女が絡み合う時に発せられる独特の雰囲気が出息と共に室内に拡がる。空気に舌で感じられる味などありはしないが、それでも味があるとするならば、間違いなく「甘味」であろう。それも一口食するだけで虫歯になるのが確実な類の。

だが、永遠に続く星や国家が皆無なように、永続的に続けられる行為もありはしない。やがて一合戦終えた男女が荒々しい息を吐いて布団の上に突っ伏した。

女が隣で煙草を吸い始めた男に、不意に問いかけた。

「ねえ。今日の夕食の時に現れたあの眼……あの人の眼に似てなかった？」

「何を言い出すんだい。君はあれを幽霊だとでも考えているのか？ あの探偵が言っていただろう。犯人は人間に違いないと」

「そうじゃなくて……」女は言い淀んだ。口を何度かモグモグとさせてから続けた。

「あの人が実は生きていて、私たちに復讐をしようとしているんじゃないかって……」

「それこそ莫迦話（ナンセンス）だ」男は灰皿に煙草を押しつけた。細い紫煙が立ち上り、消える。

「あいつの死体は確認した。医者も死亡診断書を作成した。立派な葬式までしたじゃないか。なのに今更生きていましたなんて、ありえないよ」

「でも、私たちに深い恨みを持つ人間なんて、あの人以上は……」

「あいつが縦しんば生きていたところで、何で僕たちの悪行を知り得るものかね。あいつが生きていた時から僕たちはこうしているがね、バレたという兆候すら確認できなかった。だからこそ僕たちは今もこうしてられる」

男は女の身体を再びまさぐり始めた。慣れた手つきだ。先程の口振りからも判るように、もう何度も肌を重ねているのが、読み取れた。

「誤魔化さないで」女の口調には強い拒絶の色はない。口ばかりの抗議。

「もう何日かしたら、また君を他人のものにせねばならないかと思うと、妬（や）けるね」

「貴男が言い出した話のくせに」

「若く、そして美しい僕たちにこそ金を持つ意味があるのさ。老人が後生大事に大金を抱えて墓場まで持ち込むなんて、莫迦の極みじゃないかな？」

「それもそうね」

いつしか男の手つきは熱を帯びている。微かな嫉妬の焰がぼやから本格的な大火に移行したことを言葉ではなく行動で物語るかのよう。

甘やかな吐息が女の唇から再びこぼれる。肌を紅潮させた女は、しなやかな身体を男に絡めた。寝所でふざけ合う男女の夜は、人知れず更けていく。

捜査開始二日目。

暮林たちは早朝から小村伯爵邸内を探索し始めた。犯人が使用されていない区画に隠れ潜んでいる可能性がある以上、一部屋一部屋確認する必要が生じていた。暮林が冗談のつもりで口にした隠れん坊を犯人相手に本気でやることになったのだ。

「手分けして探そう。君が犯人を見つけたら手出しは無用だ。見取り図に印を入れてくれば良い。後で僕が確認に行こう」

「その場で確保を試みなくて宜しいので？」女だから荒事は苦手だと思われるのは、何だか癢だ――との意図を、帰蝶は覗かせた。

彼女が何が言いたいのかを察した暮林は、微苦笑と共に説明を補足した。「君はまだ場数を踏んでいないだろう？ 人間が死に物狂いになった時の馬鹿力を舐めてはいけない。細身の女性ですら安全弁（リミッター）が外されたら、大の男が数人がかりで押さえつけようとしても駄目だった――との事例がある。無理はしないことさ」

「護身用の拳銃ならありますが」

「咄嗟（とっさ）の時に当たるとは限らない。それどころか敵に奪われて逆効果になるのも珍しくない」暮林は叱るように言った。「今回の犯人は蛇のように執念深く、用意周到な奴だ。侮ってはいけない。とにかく気をつけてくれ。危険を感じたら逃げてくれて構わない。情報を無事に持ち帰ることこそが肝要なのだ」と理解してくれ給え」

強く念を押されると、帰蝶は逆らえきれない。仕方なく「判りました」と頷いた。

「成果があってもなくても、昼には落ち合おう」

そう告げると、暮林は帰蝶と別れた。小村伯爵邸は本館と別館とに別れている。彼が担当するのは、屋敷の主――留美子夫人や亡き小村伯爵などが起居に用いていた本館だ。大食堂や洋風旅館並の設備を持つ厨房などがあるのがそこで、当然ながら別館よりも広い。と言うよりか、別館は外部から客が来た時か、代々の主人が趣味で集めた蔵書などに触れ合う際にしか使用されていないらしい。普段は無人なのだった。

単純に隠れるのであれば、別館の方が向いている。誰もいないところで全力でくつろいでも気づく者などおるまい。だが「白き復讐者」と名乗る脅迫犯は、留美子夫人のことを一日中監視しているような感じだった。となれば本館の方にいる確率が高い。少なくとも別館から千里眼を行使して本館を覗いていると考えるより、可能性がある。

――どこかの小説家が屋根裏を徘徊（はいかい）する変人のことを題材に推理小説を書いていたけれども、「白き復讐者」なる御仁もそうしているのかな？

暮林はそんなことを考えた。透明人間でもない限り、人目を完全に避けて移動するなど不可能だからだ。それならばヤモリとかイモリのように屋根裏を這いずり回りながら進んでいるとみた

方が自然だ。

だが、小村伯爵邸は移築された洋館である。瑞穂の家屋のような屋根裏は存在せず、招かれざる客が自由に移動できる余地などありようもない。

――やはり誰かが協力していると見るべきなのかな？

人間が己の存在を完全に殺すのを難しいと感じるのは、生きている限り襲い来る数々の生理現象による。衣食住――その中でも服ぐらひは多少不潔でも我慢できるが、食事や寝床がないのは大問題だ。周りは田舎だから、夜中に屋敷をそっと抜け出して獣を仕留めていると考えるのは苦しい。それだと、「白き復讐者」は無人島に閉じ込められた人間並みに逞（たくま）しいことになる。相手が超人であるとの前提は、さすがに無茶だ。

食糧はさすがに屋敷内のものを失敬していると考えた方が、矛盾がない。

そう判断した暮林は、厨房の方に足を運んだ。そこの責任者である料理長（シェフ）――名は肥田（こえだ）という――に訊ねた。食べ物が微妙に減っていたりしませんかね？

ガリヤ人のようにでっぴりと太った肥田は、暮林のその問いかけを真っ向から否定した。「厨房は僕の管轄下にある。乾酪（チーズ）一欠片（ひとかけら）でもなくなれば直ぐに気づく」

職業意識に溢れた物言いだと言える。彼は以前、皇都でも名の知られた洋食屋に勤めており、その総料理長（グランド・シェフ）をしていたとか。その経歴を信じる限りでは、何ら疑う余地はない。

しかし、彼の丸々とした、白い料理服からはちきれんばかりに膨らんだ体つきを視ていると、暮林は「味見の名目でつまみ食いを繰り返しているから、冷蔵庫の中身に完全精通しているのではないか？」と邪推してしまうのだ。勿論、当人にそんなことは言いはしないが。

「なくなっているものがなければ、それで良いのです」

暮林はそう言って、その場を辞去した。彼が「白き復讐者」と共謀している可能性は皆無ではなかったが、もっとも、口調や態度からして、肥田が嘘を言っているようには見えなかった。嘘をつく人間は、余程それに慣れていない限り、どこかおかしい部分が出てくる。彼からはその不信感がまるで感じられなかった。

――食糧は手引きしている人間が外部から購入すれば済む。缶詰や乾パンならば日持ちするし、持ち込む際の手間もあまりかからない。他の線を当てるか！

一つの線に固執しないことが、調べ物をする時の暮林の長所であった。視野狭窄（きょうさく）に陥ると、どうしても見落としが多くなる。全体に視線を転じることこそが、事件の全貌そのものを見渡すことにもなるのだ。

虱潰（しらみつぶ）しに一部屋ずつ調べてみるか――そう思い立った暮林は、万能鍵（マスターキー）を持つ志田老人の元へ行くことに決めた。本来なら如何に宅の主人、その客人の扱いを受けているとは言え、部外者が各部屋の鍵を貸して欲しいなどと申し出たところで相手にされないのがオチである。だが、彼には既に不審者を屋敷の中に侵入させてしまったという落ち度がある。雇われた専門家がその後始末をすとなれば、真向から拒絶されることはあるまい。

そんな風に、ある種の突破口を見つけた暮林だが、一方別館の調査を任された帰蝶は、場に不

慣れなこともあり困惑気味だ。

「まず、何処から手をつければ良いのかしら？」

取り敢えず客室全体を見て回れば良いのかも知れないが、それだけで二〇部屋あまりあるとなると、気が遠くなる。しかも運良く犯人と出くわせたところで、暮林から「手を出すな」と釘を刺されている。冒険心に富んだ女性らしく、それに反発してみたい気持もあるが、返り討ちに遭って人質にでもされたら、師匠に合わせる顔がない。子供をそのまま大きくしたような部分を持つ彼女からすれば、自制する必要が認められた。

適当に歩いているうちに、道に迷いそうになる。懐から取り出した見取り図で現在位置を確認した。「図書室」と記入されている。読書家の分限者は自宅に公立図書館並の区画を設けると言うが、小村伯爵はさてどうだったかな――と臆気な記憶を頼りに扉に手をかける。

室内には洋女中姿の少女――茅乃がいた。本の手入れをしているのが見える。革張りの立派な書籍が目立つ場所だ。だがよく視ると彼女が手にしているのは、古ぼけて黄ばんだ絵本である。これが市立図書館だと言うなら場所柄理解できるが、ここは蔵書の数では匹敵しても個人が趣味で造り上げた空間であり、公共の場ではない。それがより不釣り合いぶりを強調しているかのようだ。

違和感と言うよりか不思議な気分を覚えた帰蝶は、年齢が近いこともあり、茅乃に遠慮を感じる気分にはない。何食わぬ顔で声をかけた。

「蔵書の手入れですか？」

「えっ!？」

茅乃は余程集中していたのであろうか、軽く声をかけられただけで酷く狼狽（ろうばい）し、机の上から本を落としてしまった。慌てて拾い上げる。

「御免なさい」帰蝶は驚かせたことを素直に詫びた。

「いえ、私も不注意でしたから」茅乃は一緒に落ちた補修資材――針や糸を拾い上げる。その彼女の後ろ髪に窓から差し込んだ光が当たり、金属的な光沢を強く放った。

「うん？」暮林並みの冒険マニアだが、装飾品の類も決して嫌いではない帰蝶は、それに目敏く気づいた。鈍い金属色をした銀杏（いちょう）に似た葉と梅の花みたいなもので、その髪飾りは構成されていた。葉の方は最近何処かで視たことがある。思い出した。志田老人に話しかけるきっかけとなった木の葉っぱだ。

皇都ではまず見かけない木のものだけに、記憶にピンで留められていた。だが、妙に古臭い感じがするし、茅乃のような年頃の少女が身につけるものとしては幼さを感じさせた。こちらもどうにも不釣り合いなのだ。

本と道具を拾い上げた茅乃に、帰蝶は問いかけた。「絵本……ですか？ 何でまた」

「これは亡き旦那様が手ずからお書きになったものなのです」茅乃は帰蝶に、絵本の由来を教えた。「旦那様はたいそうな子供好きで、孤児院の子供たちの許を、暇を見つけては訪れ、よく絵本を読んであげていました」

「絵本を……！」

故小村伯爵は奇特な方だと聴いていたが、孤児たちに自分が書いた絵本を読み聞かせるほどの

ものだと、さすがに帰蝶も想像していなかった。

「お嬢様にもそうしていましたよ」茅乃は遠い昔を懐かしむような感じで言う。「乳母に任せるだけでは駄目だと仰って――」

普通、人の上に立つ者はそんな真似はしない。自分は頭脳で使用人は手足だと割り切る。それが良い悪いかは別にして、そういう風に出来ている。なのに小村伯爵は違った。余程慈愛の心に溢れていたのだろう。

「ああ、だから……」

本のあちこちがボロボロなのか、と帰蝶は口にしかけて、違和感に気づいた。確か伯爵がお亡くなりになってから二年ほど経過している。つまり、本が傷んだのなら直している時間的余裕はあったはずなのでは？ もう読んであげる子供もいないことだし。

帰蝶の瞳に滲んだ違和感、それに気づいたのか、茅乃は説明を補足した。

「私も旦那様に絵本を読んでいただいた孤児の一人です。だから時折懐かしくなって、ここにこれを読みに来るんですよ」

心の整理が付けられなくて、今まで手つかずだった――と言われても帰蝶は納得しただろうが、そちらの方に説得力を感じた。誰にでも他人に土足で踏み込まれたくない物事がある。作家志望でなくても、そのぐらいは判る。

「本当に慕っておられたんですね、伯爵のことを」

「ええ……」

茅乃は間髪入れずに応じた。帰蝶はそんな彼女に、もう一つの疑問をぶつけた。

「ところで寒川さん、その髪飾りは……？」

言われて、茅乃は後ろ髪を抑えた。その仕種は恋人から手渡された贈物を他人から指摘された生娘のそれを思わせた。恥じらいの色が頬にある。

幾らか間を開けて、茅乃は答えた。「私の大切な方に、昔いただいたものです」

「昔に……？」

「私がまだ小さい頃の話でして」

女が恋を語るのに、年齢など関係ない。それは世人の多くが認める感覚であろう。俗に恋愛は男からすれば人生の一部分に過ぎないと卑下されるが、女性にとって恋とは人生そのものだと言われる。男尊女卑の感が多分に滲んだ言い草であるが、悲恋心中ものの主人公の多くが、結ばれぬ恋を悲観して死んでゆく女性に主眼を据えて展開していることを思えば、滅茶苦茶な主張とも言い切れまい。何しろ古今東西の歴史を紐解けば、上は王族から下は最下層の庶民までそうした話が好きなのだから。

「その葉っぱは、庭に植えられている木のものですよね」

「はい。皇都から来られた人には珍しいかも知れませんが、ここではよく見かけるものですよ。名をハクハツキと言うのですが」

「ハクハツキ、ですか？ 変わった名前ですね」

「夫婦仲良く白髪になるまで生きよう、との意が込められたものでして」

「白髪（しらが）の木、とでも書くんですかね？」

「意味はそれで大体合っていると思いますよ」

だとすれば、この家にあの木が生えているのは、皮肉に違いない、と帰蝶は感じた。宅の主は愛娘と共に転落死し、残されたのは夫人だけだ。その夫人にしても、今度南加大陸帰りの大金持と華燭(かしよく)の典(てん)を挙げる、という。

地下に眠る親子は、妻そして母のそうした振舞をどう捉えているものであろうか？

「ところで、里中さんとはどういう方なのですか？」

「私も詳しくは存じませんが、亡き旦那様の、母方の親族だと伺っております」

「伯爵夫人とは年齢差がありすぎるような気がするんですが……」

「私もそうと思いますが、もう決まった話ですし、未亡人一人の身で旦那様が残された財産を管理するのも大変ですし物騒なのです。ここは人生経験が豊富な里中様が自他共に認める公的協力者(パートナー)となって、互いの財産を一元管理した方が好ましいと、川嶋様が仰ったとか何とか……」

「二人の仲を取り持ったのは」帰蝶は念を押すように確認した。「川嶋画伯？」

「はい。年齢差など社会的責任の前には関係ない——と。私共もそうですけれど、小村伯爵家には大名だった頃からの領地と、各種工場など守らなければいけないものを多数の従業員と共に背負っています。皆の生活のことを考えますと、その主張にも一理あると思いますが」

土地の名士の苦悩と言え、そうかも知れない。何千人もの人間を雇っているとなれば、面倒臭いから全てをやめますとは、おいそれと口には出来ぬ。多数の人間を路頭(ろとう)に迷わせれば、世間に何と後ろ指を指されるか。

面子やら体面を極道(やくざ)並に大切にする貴族からすれば、到底耐えられる話ではないだろう。だがそれでも違和感はある。里中老人は、今幾つだ？

「でも、里中さんは大分お年でしょ。あと一〇年も持つんですかね？」

かなり失礼な物言いだ、物事の核心を抉(えぐ)っている、とも評せた。どう見ても七〇は過ぎている老人が、あと二、三〇年健在だとは、到底思えないのだ。

「そこは私には何とも……もともと、里中さんは余生を楽しく過ごせるのであれば、残った財産は全て奥様に譲っても構わないとまで言っておられたそうですが」

恋は人を盲目にさせる。使い古された表現だが、歴史の真実でもある。時の権力者が女の我儘に振り回されて、国を傾けた事例など枚挙に暇がないのだ。

老いらくの恋に溺れた老人が、大義名分を適当にでっち上げて、周りもそれを認めたと解釈した方が自然だ。何しろ留美子夫人は若くて美しい。故小村伯爵から受け継いだ財産に、里中老人のそれを加えれば、一生どころか二生三生遊んで暮らしてもびくともしない巨万の富が掌中に転がり込むのではないか。

「……皇都の探偵さんとは、そういうことまで調べるのですか？」

つい主筋の問題をあれこれと口にしてしまった茅乃は、急速に込み上げてきた罪悪感を誤魔化すために、そんな皮肉めいた言葉を帰蝶にぶつけた。

師匠と同じようなことを言われているな——と帰蝶は流れ落ちる冷や汗と共に感じた。昔から「子供は親に似て子分は親分に似る」と俗に言われるが、その通りだと思う。いや似たもの同

士だから先生は私を採用したのかしら。

「何に答えが潜んでいるか判りませんからね」帰蝶は内心に潜むものを押し殺しながら答えた。

「職業柄必要な技能です」

単なる好奇心から質問を重ねたわけではない——とこれで通じれば良いのだけれど。演技が得意なわけではない帰蝶は、そう願った。

程なくして、茅乃の方が折れた。「まあ仕方ありませんね。あなた方は川嶋様がお連れになったわけですし」

呆れたような物言いではあるが、助かった。探偵役としては、情報源になりうるかも知れない相手に嫌悪感を抱かれて、口を閉ざされると困るのだ。

「ご理解、有り難うございます」

「調査なさるのは構いませんが、屋敷の中にあるものを壊さないでくださいね」

軽く釘を刺した茅乃は、本の修復を再開した。どうやら、現場責任者の一人から自由裁量の権限を与えられたらしい。

「済みませんね。では」

ここに犯人が潜んでいるわけがない——そう察した帰蝶は、萱野を無駄に怒らせる真似を避けるために、図書室から離れることにする。

調べなければならない範囲は、まだ多いのだ。一つの場所に固執する必要はない。

取り敢えず判ったことを書き記しておくか——と帰蝶は懐に忍ばせておいた備忘録（メモ）に、先程茅乃の口から引き出した情報を書き加えた。

9

風潰し（ローラー）作戦が必ず成功するのであれば、世の中には未解決事件などきっと存在しないのだろう。人海戦術を行使できる、最強の合法暴力組織である警察が、一個人で犯罪を犯した愚か者を取り逃がすはずがないからだ。

だが、暮林は助手——帰蝶を含めても二人きりだ。全ての部屋を調べるにしても時間が必要で、それを実行に移しても同時に複数やるわけではないので、犯人を取り逃がす可能性がある。国費を濫費（らんび）しても仕事だと主張できる公務員が何となく羨ましくなるのも無理はなかった。

「収穫らしい収穫はない、な……」

暮林は帰蝶に渡したのとは別に作成した、小村伯爵邸の見取り図を卓上に拵げながら呟いた。場所は庭に設けられた喫茶区画である。白い丸洋卓に肘掛け椅子が数個ばかり置かれているそこは、皇都の開放型喫茶店（オープンカフェ）を思わせる風情がある。

個人の庭とは思えない広さを持つそこは、木が多数植えられている関係もあり、風がそよぐと大層気分が良い。盆地にあり、夏は蒸し暑くなりがちな皇都と比べると、雲泥の差だと言える。閑静な田舎ならではの快樂であろう。

だが、その過ごしやすさとは裏腹に、暮林は煮詰まった気分を抱いている。

帰蝶が半分冗談で口にしたであろう「抜け穴云々」についても彼は検討した。もしかしたら一と一縷の望みがあるのなら、調べるだけの価値はあるのではないかと。

されども、抜け穴は見つからなかった。奇跡が起きなかつただけの話であり、何も驚くには値しないのだろうが、影の如く現れて、そして消えていく怪人と実際に戦わねばならない者からすれば、向こうが一種の思考放棄を促すようなインチキを行使する相手だったと判明する方が、いささか気が楽なのである。

「隠れ潜む隙間がないとすると、残るは誰かに変装しているか……」

それこそあり得ないな——と暮林が鉛筆を口の端に銜えながら頭をガリガリと搔いていると、柔らかな声が背後からかけられた。

「お仕事は進んでいまして？」

暮林が肩越しに視線を声のした方に向けると、そこには留美子夫人が立っていた。薄化粧をしている。香水ではない、彼女の肌から直に発せられているであろう甘やかな香りが鼻腔をくすぐる。年齢不詳との表現が似つかわしい女性だ。

「小村夫人」

直接の依頼者は川嶋だが、屋敷の主は留美子夫人である。暮林は銜えていた鉛筆を離すと、慌てて立ち上がろうとした。だが、彼女はそれを手で制した。

「構いませんのよ。楽になさって」

「はあ」

二年前に、良人と愛娘を同時に亡くしたはずの未亡人の身体からは、どうにも異性を意識させる空気が漂っている。世間一般の男の認識からすれば、美しい若後家は男好きだとされているが、それは男に都合の良い妄想である。亡き伴侶の死を悼み、貞節を貫く女性は数多いのだ。

しかし、留美子夫人の顔を視ていると、暮林は低俗な猥褻（わいせつ）本、あるいは皇都の場末にある活動写真館（シネマハウス）で上映されている官能（アングラ）劇——撮影関係者が当局に睨まれて、直ちに全員逮捕拘禁されても仕方がない代物——で描かれているものが、真実の一部分を映し出しているのではないか、と思えてくるのである。

何を莫迦な、と自らに言い聞かせても、牡（おす）の本能は正直だ。身体のうちから、妙に滾るものを感じる。人妻の——彼女は未亡人だが、もうすぐ再婚予定——色気とはこんなものかと、脳の小隅で月並みな感想を弄んだ。

そんな暮林の思惑を知ってか知らずか、留美子夫人は彼の肩に手を置いた。そのまましなだれかかるように体重を預けてくる。彼女の肌から発せられる香り、鼻腔と脳髓を強く刺激するそれが、尚更に強くなる。

「あの……小村夫人？」

「下の名前で呼んでくれて構いませんのよ」

今日の留美子夫人の服装は、袖無し（ノースリーブ）のワンピースである。白くしなやかな肩口が剥き出しにされており、洋袴部分の丈も一〇代の娘のように短い。膝頭は疎か、程良く脂の乗った太腿まで外気に晒されている。「男を誘っている姿」だと言われても反論が出来ない出で立ち。

そんな未亡人の挑発に、暮林は水兵服姿の帰蝶の姿を重ねた。彼女は若く活発的な娘らしく、洋袴の丈を詰めていたが、あれとはまた別の趣（おもむき）がある。ぴちぴちとした若鮎（わかあゆ）に熟成した色気を持つ女神像――比べるのも分野（ジャンル）が違うから変なのかも知れないが、今の彼の心中、その少なくない部分を占める少女の事を、どうしても意識せざるを得なかったのは確かだ。

女の細腕をふりほどけずにいる暮林の姿勢に、留美子夫人は慣れているのか、手を肩から胸に移動させ、薄桃色の口唇を彼の耳元に近づけて囁いた。

「私の部屋でお茶にでもしません？ 一日か二日で結果が出るお仕事でもないんでしょう。この家は田舎にある分広いですから、一通り見て回るだけでも大変ですしね」

誘いに応じたら単なるお茶会では済まなくなる可能性は、火を見るよりも明らかである。偏見を抜きにして、娯楽の少ない田舎では、そうした行為――他所から来た客人と「後腐れの無い遊び」をする者が身分の上下を問わずにいるという。

良人が家を留守にしがちな職業――遠洋漁業にでる漁師が多い村などでは、配偶者が留守中にそうした行為に及ぶのを黙認している、と広く信じられている。文明の灯から遠い場所では、人道徳よりも、人間が肉体に備えている欲求を優先し、または無理に否定せずに解消する方法を選ばせる――と聴くが、ここでもそうなのだろうか、と暮林は痺（しび）れたような頭で考える。

「一緒にいらしたお嬢さんのことを考えておられるの？ 探偵さんも律儀ね。大丈夫よ。私としばらくの間、直に話をする必要があったとでも言えよ――」

服越しに、胸襟（きょうきん）の辺りをなぞられる。桜色をした爪には強い光沢がある。爪化粧（マニキュア）を施しているらしい。爪自体からは香りは感じられないが、男をその気にさせる素材としては一級品と言えるだろう。

暮林も男であるから、学生時代や社会人生活を始めたばかりの頃、金で男の相手をする女性の世話になった経験が幾度かあり、「遊びに慣れていない」わけではない。そこいらの貧乏書生のように、憧れを胸に秘めたまま、悶々と年月を重ねてきたわけではない。

しかし、直接的ではないとは言え、依頼主と関係を結ぶのはどうか、という職業倫理がある。しかも相手は間もなく再婚を予定している女性なのだ。いや老人の妻になる予定の人だから、独身のうちに後腐れなさそうな男と火遊びがしたいのか。

「先生、女を焦らすものではありませんわ。視れば貴男は身体を随分と鍛えておられるご様子。私逞しい男性の肉体美を鑑賞するのが嫌いではありませんの。ねえ、私の部屋で是非（ぜひ）とも絵の題材(モデル)になっていただけませんか。私、川嶋さんに絵の描き方を習いましたから、多少なりとも自信がありますのよ」

「逞しい男性が好き」「川嶋画伯に絵の描き方を習った」そのフレーズが熱で灼き尽くされようとしている脳裏を掠めた。漫画的表現を用いれば、茹（ゆ）でた蛸（たこ）のように真赤（まっか）になった顔に、渦巻きの眼が描かれようとした時――

「留美子さん、相変わらずあんたは元気が過ぎるようじゃな」

老人の乾いた声が響いてきた。思わずはっとなった二人がそちらの方に顔を向けると、杖をつ

いた白髪白髯の老人――里中が、黒眼鏡越しに怒りの視線を投げかけていた。

ギラギラと光るレンズが、翁の強い怒りを湛えているようだった。百万語の罵言よりも、彼の眼から発せられる光の方が、感情を強く表している。

「里中さん……いえ、あなた。これはその……違いますの」

夫人は現場を押さえられた状態で狼狽した。責任を暮林の方に投げつけようとしているのは、口調や身振りから理解できた。

「あんたは元気なのが取り柄だが、それも場合によりにけりじゃ」老人は込み上げてくる怒りを辛うじて呑み込んでいる風である。「儂の目の届かない範囲での遊びは頼むからやめてくれんかね」

「え、ええ……はい」留美子夫人は項垂れた。まるで親や教師に面罵された子供のような感じだ。年齢差を考えれば無理もないのかも知れないが。

「全員が川嶋くんのように口が硬いわけではない。この地における小村家の力にも限界がある。侍が切り捨て御免をやれた時代ではもうないのだから、口封じなどそう簡単にはできない。軽口な者と下手に関われば身の破滅――そこをわきまえてくれ」

老人の声には懇願するような響きが滲んでいた。

それを一方的に聴かされた暮林の頭は、俄に混乱している。どういう訳だ？ この二人の関係は？ 調査不足の身では、悲しいかな判らない。

「申し訳ありません。つい……」

「もういい。部屋に戻りなさい」老人は杖で向こうに行けと示した。

「はい――」

肩を落とし、どこか名残惜しげな風情を背中に漂わせながら、留美子夫人はしずしずと歩いて行く。その後ろ姿に、暮林は五星教の悪魔祓い（エクソシスト）に撃退された淫魔（サクキュバス）を重ねた。欧洋州の怪談話に出てくる、淫らな女悪魔とは、こんな感じなのだろうか？

「探偵さん、身内の恥をさらしたな」

里中の口調には、怒りよりも悲しみが滲んでいた。自分ではどうしようもない災厄に挑まねばならない人間の苦悩が読み取れた。

「済みません。僕は――」

「いいんだ。儂は最初から視ていた。あんたは彼女から誘われたが応じなかった」

心はぐらつきましたが――とは、とても言えなかった。七〇を過ぎた老人と正面から喧嘩をして負ける気遣いはないが、こちらは向こうの婚約者に手を出しかけた。正義はあちらにあり、何があろうとも自分は正しいと信じられる愚か者でもない限り、気まずさから身体の動きは鈍り、一方的に叩き付けられるのは目に見えていた。

これ以上の謝罪は、却って老人の自尊心を傷つけることになるかと察した暮林は、続ける言葉が見つからない。何と言ってよいのか判らず、沈黙を続けると、老人の唇からため息と共に告白が漏れた。

「あんたも先に聴いた通り、留美子さんは川嶋くんと関係を持っている。いつの頃からか儂は知らない。伯爵と娘さんが亡くなり、女の身一つで生きなければならなくなった寂しさゆえか、あ

の人の性質なのか」

恐らく後者だろう——とは無神経に過ぎる発言であった。暮林は喉奥で呑み込む。

古来より瑞穂では好色は罪ではない。男女同権が田舎でも都市部でも成立しているこの国では、女性が多数の男性と関係をつぶすのを容認する空気がある。

だがそれも、「独身のうち」との注釈がつく。配偶者がいるのに、あちこちの異性と繋がるのは、法的にも倫理的にも問題がある。世間的な常識から切り離された地域に住む者らは別にして。

「僕はもうこの年齢（とし）だ。彼女を男として満足させられる自信はない。それならばと、川嶋くんに、世間には絶対に口外しないとの条件で、彼女の恋人になって貰った。仕方がないとそのことは割り切れた。何と言っても彼女は若い。肉体的欲求をないように扱っては、どのような歪（ひず）みが生じるのか、深く考えずとも判る。あんたもそうじゃろう？」

同意を求める老人の声に、暮林は素直に頷いた。嫉妬の焰に身を焦がしながら、妻になる女の欲求と世間体を両立させねばならなかった男の懊悩が見て取れた。

「ですが、平気なのですか？」

不躰だと思いながらも、暮林は問いかけていた。愛する女性が他の男性と肉体的な関係をつぶすのを容認する心情を、彼は理解しかねた。

「やむを得ない。僕はそれを承知で結婚することにしたのだからな」老人はうちから込み上げてくる怒りを、懸命な努力で呑み込んでいるようだった。

「それよりも探偵さん」

「何でしょうか？」

「あんたも相方から目を離さない方が良いと思うぞ。ここは一見すると平和そうだが、実のところ魑魅魍魎（ちみもうりょう）が闊歩する伏魔殿（ふくまでん）なのだ。世俗の常識など、ここでは何の意味も持たない。あるのは欲望を剥き出しにして恥じぬ獣たちの宴だ。獣は自分の振舞を恥はせぬが、巻き込まれた一般人はえらい迷惑ををすると思う。何か嫌なことが起きる前に、退散した方が僕は良いと思うのだがね」

「……忠告ですか？」

「そうじゃ。忠告だ。あんたも一度引き受けた仕事だから、そう簡単に手を引くわけには行かないのかも知れんが、後悔してからでは遅い」

「ご忠告感謝します」暮林は一礼した。「ですが、僕はこの事件に大いに好奇心を刺激されました。僕と助手の身ぐらいは守り抜いて見せますよ」

「そうか」老人は悠然と頷いた。「だったら僕も成り行きを見守らせて貰おうか。……どうなっても知らんがね」

それだけ言うと、白髪白髯の老成金は身を翻した。彼の背中からはやり場のない怒りを背負った者だけが醸し出す、一種独特の霊気（オーラ）が漂っていた。

「あの老人、ただの南加帰りの成金とは思えない」暮林は黒眼鏡の奥に潜んだ鋭い眼光を思い出しながら、ぽつりと呟いた。「この事件は表面だけでは図れない何かを秘めている可能性が高い。小村伯爵が事故死した時点から洗い直してみるか」

脳裏を過ぎるのは、古府新聞に勤める友人の姿。暮林は職業柄知り得た事柄を他者に話して聴かせる習慣を持たないが、現地で生きた情報に触れてきた協力者を求めるのは、吝かではなかった。彼は志田執事に申し出て電話を借りることにした。新聞記者と連絡を取ると素直に言えば、拒絶される可能性が高かったので、学生時代の友人が近くにいるので、協力を要請したいと、言葉足りぬ物言いで誤魔化した。事態は新たな展開を迎えようとしていた。

10

夕刻――

周辺に街灯のない田舎町だと、天道が沈んでしまえば、辺りは真暗になる。それは一種の自然現象であり、別段驚くには値しない。だが、家の中に幽霊を連想させる自由移動ぶりを見せる脅迫者が潜んでいるかと思うと、否が応でも恐怖が込み上げてくる。

事件調査を任された探偵――暮林と帰蝶にしても、あまり良い気分はしない。留美子夫人に粘着質的な執着を見せる「白き復讐者」の矛先が、いつ自分たちに向けられるのか判然としないからだ。殺人すら辞さない犯罪者を相手にするのは、本職の人間でも苦勞する事を思えば、尚更だ。

「屋敷の中の調査と関係者への聴き取りを一通りやったが、成果は零（ゼロ）に近いな」

暮林が帳面に纏めた話を指でなぞりながら、ぼやいた。不審者が隠れられる隙間やその形跡は皆無。関係者から聴いた話は、婦人週刊誌を連想させる愛憎劇と来ては、態度がいささか投げやりになるのも仕方がない。

「川嶋さんと留美子さんが恋人同士で、里中さんはそれを認めた上で、留美子さんと結婚すると言うのですか？」

理解しかねる――と言いたげな表情で、帰蝶は机上に拵られた帳面の内容を見つめる。これが単なる小説であれば、悪趣味とは思いながらも興味をそそられる話なのだが、自分が今いる場所で繰り広げられているものだと思うと、不快感の方が優る。

「高齢の良人を持つ満たされない人妻が――なんて言うと、色情小説の題材みたいで笑えるんだけどね」暮林は苦笑して、気づいた部分に触れる。

「『白き復讐者』を名乗る御仁は、いつも留美子夫人を視ていると言っていた。それなのに、この奇妙な関係について一切触れないのは、おかしくないか？」

「言われてみればそうですね」

「コソコソと尾行――監視や脅迫を続けるよりも、そのことを世間に公表した方が、余程留美子さんからすれば打撃になると思うんだが」

貴族は面子を何より大事にするのは、先に触れた通りだ。「白き復讐者」が何処にいるのかも把握させないような、完璧な幽霊ぶりを見せている以上、留美子夫人と川嶋画伯が寝所で何をしているかを――その時の情景を写真にでも撮り、地元の新聞社や雑誌社にでも送りつければ、たちまち大騒ぎになるだろう。

「何かそうできない理由があるとか？」

「だとすれば何だろうね。かなり粘着質な奴だから、ひと思いに仕留めずに、ネチネチと標的をいたぶり続けるのを愉しんでいる——とも言えるが」

欧洋州の犯罪史を紐解けば、そう言う事例は数多い。数十人の男女を殺害した、とある淫楽殺人魔など、ご丁寧に一人一人に脅迫状を送りつけ、標的が恐怖のどん底に突き落とされて、半分気が変になってから仕事にかかったという。

瑞穂の場合、お国柄もあるのだろうが、殺人の理由は殆ど怨恨——個人的に恨みを抱いていた相手を、堪忍袋の緒が切れてから殺した、との展開が目立つ。快樂目的での殺人など、まずお目にかかれない。

「先生の仰る通りなら、当面は私たちの恐怖を煽るだけで終わるんですかね？」

「どうだろう」暮林は首を傾げた。「僕たちがやって来て、状況に変化が起きたのを察しているはずだから、突然行動を起こすかも」

「そんな物騒な——」

帰蝶が柳眉を顰めた時だった。何かが割れ砕ける音が、外から響いてきた。

暮林と帰蝶は、反射的に身構えた。「襲撃」の二文字が頭を過ぎる。

二人とも護身用に拳銃を装備しているし、度胸もある。「白き復讐者」がどのような相手であれ、顔を視るだけで怯むような無様な真似を晒すつもりはない。しかし軽拳妄動は慎むべきだった。飛び道具はこちらだけの特権ではない。相手がより強力な重火器を装備している可能性がある以上、注意する必要が認められた。

「君は部屋に残るか？」ここは別館——客室である。内側から鍵を掛ければ、敵の突入進路が限定される分、対処がしやすい。暮林の提案も無理なかった。

「修羅場は実際に経験せねば」帰蝶は懐から取り出した回転式拳銃（リボルバー）——四州一八式拳銃を見せた。六連発式のそれは、瑞穂陸海軍で採用されている軍用拳銃でもあるため、信用度は極めて高い。

「まあその通りだ」これは言っても無駄だな——と察した暮林は、翻意させるのを諦めた。「怪我はしないように気をつけてくれよ。特に顔には」

「心配してくれるんですね、有り難うございます」

短い遣り取りが交わされる。その間にも事態は動く。二人はそれに対処すべく、銃を構えて廊下に出る。こちらの装備を視て、相手がいきなり発砲してくる可能性を考慮して、姿勢を低くして前進する。

さあ、敵の御尊顔（ごそんがん）を拝めるか——と固唾を呑みながら、二人が音のしたところに距離を詰めていくと、割れた窓硝子の破片、額から血を流している川嶋、胸元を乱している茅乃の姿が見えた。

——何が起きたんだ？

それが師匠と弟子の垣根を越えた共通認識になる。正体不明の脅迫犯がこの場において、棍棒（こんぼう）でも構えていれば話は判るのだが、これだけ視てもさっぱり状況が呑み込めない。

「あの、何が起きたんですか？」帰蝶が拳銃を構えたまま、誰と特定せずに訊いた。

傷口をハンカチで押さえながら呻いていた川嶋が、帰蝶の手にあるものを視てぎよっとなる。

滴り落ちる血が、絨毯に赤い染みを形成する。

「『白き復讐者』が乱入してきたのかと思ひまして」暮林がなぜ二人とも武装してきたのか、その理由を説明する。

「違います」幾らか落ち着きを取り戻した川嶋が、唇を噛みながら否定した。「突然石が放り込まれてきたんですよ。それが僕の額に直撃して」

「石？」暮林はそう言われて、床に視線を落とした。紙にくるまれた石ころが目についた。拾い上げる。包み紙を取ると、目当ての相手がそれを投げつけてきたのが理解できた。

「探偵気取りの闖入者共よ、この件から手を引け。さもないと後悔しても追いつかぬ事になるぞ。俺は貴様たちの一挙手一投足をつぶさに観察しているのだ。

白き

復讐者」

「どうやら、僕たち宛に送られてきた伝言（メッセージ）らしいな」

この脅し文句に該当する人間と言え、暮林たちしかいない。他の面々は当事者であり、「この件から手を引け」云々は関係ないはずなのだ。だが、だとするとおかしい。

「『白き復讐者』は、どうして私たちがいるところに、これを投げ込まなかったんでしょうか？」帰蝶が疑問に感じたことを口にする。

「白き復讐者」が文面にある通り、暮林たちの言動を監視しているのであれば、客室にいるところにこれを投げ込むのが道理だろう。そうすれば手紙の内容と行動が一致するのに、おかしい真似をするものである。

「知りませんよ」川嶋は役に立たない探偵たちを睨み付け、悪し様に罵る。「あなたたちも仕事で来たのなら、事件を未然に防いでくださいよ。これでは、案山子（かかし）も同然ではないですか。行動派の探偵とは、看板や宣伝だけですか」

これまでのところ、相手は自由往来の為体（ていたらく）。相手が何を仕掛けてきても防げた例しがない。依頼者の指摘は、そこに八つ当たり気味な怒りが含まれていても、至極尤もだ。暮林は眉を顰めながらも「申し訳ない」と詫びた。殺人事件にまで発達しなければ許されるというわけでもないのである。

男たちが不毛な遣り取りを続けている間に、女たちは動いていた。胸元の乱れを右手で押さえながら、茅乃は場から走り去る。何かあったと察した帰蝶は、同性としてそれを放置するのに忍びなくなり、気づけばその後を追いかけていた。

廊下の突き当たり。投石現場から徒歩で五分ほど離れた場所で、茅乃は床に片膝をついて、荒い息を吐く。彼女は突然の投石に驚いたというよりも、他の何かに衝撃を受けて、その場から一歩でも遠い場所に行こうとした、という感じだ。

「どうしたのです？」

度胸はあるが、人生経験が豊富とは言いかねる帰蝶が、そう問いかけていた。若い娘が、服装を乱して男の前から逃げ出した――と言え、何が起きたのかを察するのに努力はいらないはずだが、思わずそうしてしまったのだ。

「川嶋様……あの人……私を……」

茅乃はそれだけを繰り返す。黒く美しい瞳は、憎悪の焰を奥に秘めて燃えている。若く、そして健康的な娘には不似合いな色。

「……………」

帰蝶は咄嗟に返す言葉が見つからず、片膝を床につけている茅乃の姿を見下ろす。胸元以外には乱れた感じがない。どうやら最後の一線は越えずに済んだようだ。未遂。だがそれを悦ぶ気持ちになれないのは、彼女にも理解できた。

他人を呪う気持ちを心中深くに抱きながら、茅乃は続けた。「あの人は……旦那様が元気でおられた頃も、奥様と……」

「えっ？」帰蝶は眼を瞬いた。暮林の説明から、小村夫人が川嶋と関係を持っているのは理解したが、故小村伯爵が健在だった頃から、あの二人は愛人関係にあったとなると、いささか様相は異なる。

「それなのに……今になって私を……」

人は他者を意識しないで済む状況、あるいはそうした心理状態にある時に、決して嘘はつかない。それは世の不変の真理だ。一体誰が自宅の自室で一人くつろいでいる時も、本音を隠したりするだろうか？

このまま無言の呟きを記憶の中に縫い止めたい——帰蝶は、そんな衝動に捕らわれた。探偵を志す者は、例外なく好奇心が強い。他人が心の奥底に秘めている、決して口外したくない秘密を解き明かしたくて仕方がない、と考えるぐらいでなければ、務まらないという仕事でもあるが、彼女はまだ世間に揉まれておらず、また優しかった。

端正な容貌とは裏腹に、友情や女性を弄ぶ川嶋に対し、深い腹立ちを感じていた部分もある帰蝶は、「とにかく部屋に。お茶でも飲んで落ち着きましょう」と茅乃に肩を貸した。我が身を穢されかけた可哀想な少女を、このまま放置できなかったのだ。

茅乃は抵抗しなかった。されるがままに帰蝶に身を預ける。だが、その間にも男に対する呪詛の言葉は唇から絶えることがなかった。

「あんな人……地獄に落ちればいい……旦那様が、きっとそうしてくださるわ……」

「地獄」と冠される事柄が世の中には案外多い。死を迎えたあとに罪人が終わりなき責め苦を受ける場所が、現世にあるわけがあるまい——との抽象理論を唱えて茶化すのは容易いが、眼にしてみると実際そうだと思わせる存在も何気にある。暮林は、案内役——大学時代の同期生で、現在は地元新聞社に勤める保坂昭之（ほさかあきゆき）の先導を受けて、小村伯爵が愛娘と共に転落死した地獄峠に足を運んでいた。

地獄峠には、その「名物」と評される岩があり、そこから足許を覗き込むと、白い渦を巻く溪流（けいりゅう）が視られる。その途中にはゴツゴツとした岩と不規則にねじ曲がった木の枝が、針地獄のような景観を形成している。ここで足を滑らせて落ちたら、水底に呑み込まれる前に、岩か枝のせいで剣山かと思紛う姿で絶命するのではないか——と思わせる迫力がある。

「伯爵はここから落ちたのかい？」切り立った崖の上から覗き込む現世の恐怖世界。そこに何かを疑うような眼差しを向けながら、暮林が保坂に訊いた。

「うん。もう二年も前の話だが」恰幅の良い保坂は、ここまで来るだけでも汗だくだ。恐ろしげな名前とは裏腹に、地元の観光名所としてそこへと続く山歩道が整備されていなければ、恐らく途中で音を上げたことであろう。帽子の中に納められている毬栗（いがぐり）頭にもびっしょりと汗が滲んでいる。

「そういう事故はよくあるの？」

「昔から何度かあるな」保坂は胸に下げていた水筒をゴクゴクとやった。「若い者が度胸試して近づいて、足を滑らせて転落死——というのは珍しくない」

「特殊な事例というわけではないのか……」

暮林は、岩に片膝をつけ、次いで片手をついた。何か割れ砕けたような印象を受ける。岩の手触りを確認する。外見通り硬い。鉄槌（ハンマー）片手に鑿（のみ）を振るったところで、そう簡単に砕けそうにない。握り拳で何度か叩き、それを確信へと変える。

「何かおかしな部分があるのか？」

「人為的な細工がないか探っている」暮林は言葉を飾らずに答えた。「どうにも気になってね。二年前の事故は本当に事故なのか——と」

「殺人を疑っているのか？」保坂は水筒の蓋を取り落としそうになる。「警察も来て調べていたぞ。顔見知りの刑事に頼んで、俺も現場に居合わせた。事故として片付けられたが」

「僕の個人的な直感だけだね」暮林は岩の表面を虫眼鏡で覗き込む。「あの屋敷はおかしな部分が多い。世間一般からズレた金持など別段珍しくないが、女性向け週刊誌が面白おかしく書き散らすような愛憎劇が渦を巻いているんだから、変だと感じたところは、世間的にはもう終わっていても、洗い直す必要があると僕は思うんだ」

「愛憎劇？ 来てから三日でもう気づいたのか？ だとすれば、お前は新聞屋（ブンヤ）になれるぞ」

「うん？」友人の意外な反応に、暮林は首を傾げた。「どういうことだい？」

「留美子夫人と川嶋画伯の事だろう。あの二人は小村伯爵が健在だった時から出来ていたともっぱらの評判だったぞ。伯爵が慈善事業に勤しむ傍ら、屋敷の中で好きなように逢瀬を重ねていたそう。川嶋画伯の仕事場に夫人が絵を習いに行くとの口実で逢引（デート）を続けているうちに、そうなったと聞いたが」

「噂話の類？」あの未亡人ならさもありなん——と思いながら、暮林は訊ねた。地元の新聞社に籍を置く保坂ならば、そうした色恋沙汰（ゴシップ）に関しても詳しいと考え、なるだけ情報を引き出そうとしている。

「無責任な噂には違いないが、俺は真実だと信じているね」はち切れそうな太鼓腹（たいこばら）を揺さぶりながら、保坂は微苦笑を顔に刻んだ。「留美子夫人は男狂いだ。少しでも良い男と視れば、ちょっかいをかけずにはいられない性癖の持主なんだ。あの天女のような外観からはちと想像しにくい。彼女につまみ食いされた男など数知れない。川嶋画伯は、その中でも一番長続きしている相手というわけさ」

「成程ね」暮林は屋敷に来てから二日目の自分に、妙に親しく接してきた留美子夫人の姿を思い出す。「そんな調子なら、地元紙にあれこれ書かれたんじゃないかい？」

「小村家は地元では名士でね。新聞社も雑誌社も一睨みで沈黙させられたさ。殿様と正面から喧嘩して勝てる道理などありはしない」

「殿様か。確かにそうだね。鼻薬を嗅がせるのも容易そうだし」当主の死後に一人残された未亡人が、経済的に自立する術を持たない愛人を囲い込んで、尚かつ安楽に暮らしているとなれば、そうなのだろう。

「殿様と言えば」保坂は懐から取り出した紙巻き煙草を銜えた。燐寸（マッチ）で火を点ける。盛大に紫煙を噴き出してから続けた。

「この先の山に小村家代々の墓場があるのを知っているか？」

「いや」暮林はかぶりを振る。「それと殿様とどう関係があるの？」

「そこは山の中腹をくり抜いて造られた場所だな。出入口には頑丈な鉄製の扉があり、内部は漆喰で塗り固められているんだ。話に伝え聞く、欧洋州の王侯貴族の墓地に近い造りで、地元では『殿様の墓場』と呼ばれているんだよ」

「『殿様の墓場』か」暮林は北ヤフリカにある、名高い三角陵墓（ピラミッド）の内部を想像した。数千年の昔から砂漠を睥睨（へいげい）するかのようになら立っているというそれは、内部は複雑な迷路と化しており、墓荒らしから古の王者（ファラオ）の遺体や副葬品を守り抜いてきた、という。ヴリタニヤの探検家が写真撮影した「王の間」は、さながら何千年前の情景をそのまま切り取ってきたかのような風情を漂わせていた。

「瑞穂の墓にしては珍しい造りだね」

「故小村伯爵のお祖父さんが欧洋州かぶれで屋敷をそちらから持ってきたと聞いた時には呆れたが、先祖からして五星教の邪宗か何かに帰依（きえ）していたそうだ」

瑞穂が対外進出を進める過程で、国外からの珍しい産物がどっと流れ込み、それが何でも歓迎される時代が存在した。五星教の水晶の五芒星首飾り（ペンタグラム・ネックレス）、陶器製の装飾人形、色鮮やかな硝子細工品（ギヤマン）、遙かなる星が見えるという遠眼鏡、正確に時を刻む万年時計――

異文化に対する拒否感が乏しく、物珍しいものならば何でも受け入れるという性癖を持つ者が多い瑞穂では、物欲を金銭で即座に満たせる金満家こそ、そうした異国の物品に囲まれていた。これは巡礼教徒相手に「聖地奪回」を掲げた軍隊――信教軍を幾度も送り込んだ欧洋州人らが、遠征先で手に入れた戦利品を本国に持ち帰った際の様子に似ているが、略奪品ではなく殆どが金銭購入か物々交換だったところが瑞穂人らしいか。

「それで墓場まで洋風にしたのか、筋金入りだね」

「その墓場なんだがね、面白い噂があるんだよ」

「何だい？」

「ご先祖様が埋めた宝物だか、海賊が隠した金銀財宝が眠っているというんだ」

「おいおい。それじゃ古墳か西洲の冒険譚みたいだぜ」

呆れたような視線を、暮林は保坂に向けた。少年向けの冒険小説ならともかく、現実には嘔かれ

る噂としては、荒唐無稽（こうとうむけい）に過ぎた。莫迦莫迦しいと笑い飛ばすのが関の山の話だと言える。

「まあそう言うな。俺だって本気にしていなかった話だが」

「本気にしていなかった？」暮林は眉を顰めた。それならば今は信じているとも解釈できるからだ。「どういうわけだ？」

「南加大陸帰りの里中翁がいるだろう。あの人のことを気になって調べてみたんだがね、彼の地で財を成した——という話は、どうも眉唾（まゆつば）ものらしい」

「えっ？」暮林の脳裏に、年老いているがきちんとした身なりをしている老人の姿が浮かんだ。彼は詐欺師（さぎし）という雰囲気は微塵（みじん）もなかったのだが。

「里中翁は確かに金持だよ。小村伯爵邸の近くに立派な屋敷を構えている。単なる老結婚詐欺師が用意できる代物じゃない。知っているかい。彼は自宅に『宝物殿』なる建造物まで建てて、我が身が築いた財を自慢しているのだが、そこに納められているものの少なからずが、海外の収集家（コレクター）から盗まれたものだと言われているんだ」

「それならあの人は大盗賊団の首領とでも言うのか？」

「そうじゃない。盗品だと言われているものは、なくなったのが数十年から百年前のものに限定されているんだ。一昔前、橋道洋（きょうどうよう）全般で暴れ回った海賊の出身地がここで、そいつは滅多なことでは開かれない、小村家の墓場を、盗んだものの保管場所を選んだと言われているんだ」

宝石などは扱いが難しい。雑な管理をしていると、傷がついたりして価値を減じてしまう。その辺の事情からすれば、死人が出ない限り開かれることのない、岩室（いわむろ）のような墓所は、宝物を隠すにはうってつけの場所だと言えよう。何しろ土地の名士の墓場を無断で暴いてまで噂の真偽を確かめようとする暇人など、そういるはずもないのだし。

「仮にそうだしても——」突飛な想像を感嘆に肯定するわけには行かない。そうした理性を基軸に、暮林はものを言っている。「どうして里中さんは留美子夫人に近づいたんだい？ あの歳で使うに余る財があるのなら、何処に行こうが生活には困るまい。それをわざわざ人の面倒がありそうな土地に戻るなんて、意味が判らないよ」

「さて、俺もそこなんだ」保坂は腕組みをした。「墓場に財宝が眠っていたとする。それを失敬した男が、現場に留まるなんてありえるのだろうか——と」

「墓場に行って確認しようにも、全てを持ち出した後ならば、どうにでも言い訳できるからね。『おい、根も葉もない噂話を基準にして、儂を盗人呼ばわりするつもりか！』と返されたら、そこまでだ」

「質の良い嘘発見器でも使うか？」

「そんなもので他人を盗掘犯扱いするわけにはいかないよ」

友人の冗談を、暮林はばっさりと切り捨てる。軍部では捕虜から強制的に情報を聞き出すため、自白剤の研究が進められていると噂されるが、それが使用されるにしても、戦争中に得た捕虜（POW）しか考えられず、そもそも一般の警察組織が使用する日が訪れるとは考えられない。嘘発見器にしても、変わり者の発明家が忘れた頃に発表して、束の間は話題になるが、直ぐに

消える泡沫のような機械に過ぎない。

「容赦がないな」保坂は肩をすくめた。

「小説ならば何とでも書けるが、現実を冗談でどうこうするのはね」

とは言え、里中相手に抱いた違和感は消えない。何か発想の転換になるようなものはないだろうか――暮林が溪流の白い渦を見つめながら考えていると、保坂が話題を転じてきた。

「そう言えば、これも噂話なんだが、興味深いのがあったな」

「一体何だい？」

「実を言うとな――」

暮林はそれを聴いた途端に、顔色を変えた。そんな彼の耳朶を、さえずりを交わす山鳥たちの鳴き声、風のそよぐ音、切り立った崖の下で激しい音立てながら渦を巻く溪流が撃ち続けていた。

。

12

帰蝶は前日同様に暮林から別行動を命じられていた。地獄峠へと続く山道がきつばかりが理由ではない。小村伯爵邸内に残り、「白き復讐者」が何事かをしでかした時に対処できるように、との名目である。ただし、例のように単独での交戦は禁じられていたが。

要するに、備えがない事を示すための留守番なのだ――と帰蝶は自虐的に思う。二人ともいない時に問題が起これば、調査半ばでお払い箱となる可能性がある。負傷者まで出た以上、それは否定できない要素だ。

依頼人を安心させるため――と言えばそこまでだが、探偵の役割とは事件の調査と解決であり、精神治療（メンタルケア）ではない――などと思う辺り、帰蝶は幼い頃から愛読してきた推理小説（ミステリー）、そこの主人公気分がまだ抜けていないのかも知れない。

そんな感じで、暇を持て余している感のある帰蝶のところへ、川嶋が里中老人の邸宅へ足を運ばないかと誘いをかけてきた時、彼女は少しばかりなら良いかと思ったのである。

何と言っても里中は事件の当事者の一人であり、彼の身辺を確認する意味はある。それに川嶋は昨晚の不審行為がある。男共の秘密を暴き立てることが嫌いな女性は少ないが、彼女もまた例外に漏れなかった。

「里中さんは、この近くに住んでいるんですよ」

額に握り拳大の石ころが命中した痕跡を、大きな絆創膏（ばんそうこう）で隠している川嶋が、帰蝶に教えた。あんなことがあった直後なのに、留美子夫人と不義の契りを結んでいる仲なのに、彼は女性に対する興味関心を隠そうともしない。そうした辺り、良い根性をしていると言えなくもないが。

さりげなく手を握ろうとする川嶋をあしらいながら、帰蝶は里中邸へと進む。そして彼女は視た。小村伯爵邸ほどではないが、これまた立派な屋敷を。南加大陸に裸一貫で渡り、そこで、一代で財を築いたという老人が手にした代物は、妙な力を感じさせた。

訪れた二人を、屋敷の主人――里中が迎え入れた。謎の脅迫者に狙われている当事者の一人の

はずなのに、彼には動じたところがない。豊饒（かくしゃく）という表現そのままに、齢七〇を過ぎているはずの身なのに、背筋は定規を差し込んだかのように伸びているし、歩調に怪しいところもない。言葉遣いも明確だ。ただ、彼の顔を覆う黒眼鏡が光を浴びる度にキラキラと輝くのが、眼にする者の心を奇妙に波立てたが。

川嶋は里中さんが收拾してきた宝物を、この人にも披露してみたくなりまして一一と、まるで我が事を自慢するかのよう調子で言う。まあ、彼からすればやがて自分の財産、その中に含まれるものだと見ているのだろう。何しろ留美子夫人が里中と再婚すれば、その財産は倍にも三倍にも膨れ上がる。留美子夫人と自分の方が長生きするのは確実だから、何年後かには大昔の王侯貴族のように、金銀宝石に囲まれた生活が出来るのだ。法律的には愛人が相続したものになるのだけれど。

我を隠さない一一と言うか、本性を剥き出しにしている感のある川嶋に、帰蝶は不快感を禁じ得なかった。老人を相手に、お前の財産は、そのうちに俺のものになるのだぞと言う神経を、彼女は持ち合わせていない。

されども、帰蝶もまた光り物が嫌いな質ではない。女らしく美しい宝石に興味がある年頃だ。彼女は内に秘めた感情を呑み込んで、里中の案内を受けて、屋敷の一角に足を踏み入れた。

それを目の当たりにした瞬間に、帰蝶は思わず息を呑んだ。皇都の一流宝飾店だと、頑丈な一一気の荒い泥棒が鉄槌で殴りつけても決して割れない強度を誇る一一硝子展示箱（ガラスケース）に商品を並べ、目映い光を見せつけるが、その光景がそこに再現されていたのだ。

黄金造りの刀、真珠の首飾り、銀装飾鮮やかな仮面、金剛石（ダイヤモンド）・紅玉（ルビー）・緑柱玉（エメラルド）に代表される各種宝石一一一代成金が手にしたものとは到底思えない、宝物の山だ。時価に直すと何百万円もするか判らない（大工の日当が一円で、総理大臣の年俸が二〇〇〇円だと言えば、金銭感覚が判り易いか）。

帰蝶は硝子越しに映じる財宝に眼を見張った。こんな片田舎に御伽話（おとぎばなし）に出てくる世界が再現されていようとは、全くの想像の外であるから。食い入るように見つめるのも無理はない。

「どうですか、儂の財産の一部は」

呵々大笑するような感じで、里中は帰蝶に語りかけた。その言葉に、彼女は驚く。

「これで一部なんですか？」残りは証券や現金だと言われても納得できそうなのだが、つい問いかけていた。

「そうです。これなどほんの一部に過ぎないのじゃよ」

「そんな莫迦な！」帰蝶は反射的に声を張り上げていた。この場にあるものだけでも恐ろしい価値がありそうなのに、それが前座扱いだと言われて、そう簡単に信じられる訳がないではないか。

「里中さんの仰る通りですよ」川嶋は笑った。「僕も留美子さんと一緒に初めてそれを視た時には、文字通り魂消ました。帰蝶さん、貴女もご覧になったらどうです？」

多少のことには驚かないつもりでいた帰蝶だが、これには仰天した。大金持ちの留美子夫人ともなれば、身の回りを飾る宝石などには事欠かないはず。にもかかわらず「魂消た」などと言わ

れば、一体どのような代物が飛び出すのか？

容易く想像できない黄金郷（エルドラド）を、臃気ながら、あるいは揺らめき続ける蜃気楼（しんきろう）のように考える帰蝶を、里中老人が促した。

「では、ご案内しましょう。儂の『宝物殿』へね」

スタスタと歩く老人の後に、二人は続く。彼は杖こそ手にしているが、それはなぜか歳よりらしさを演出するための道具に見える。帰蝶にはそんな感じがした。どうも進退頑強な人間が歩けないふりをしているような、奇妙な違和感だ。

古き良き瑞穂庭園という風情を漂わせている庭に出る。そこには練石（コンクリート）造りの建造物がある。外観は地方にある蔵を模している風だが、近づけば土壁でないのが理解できた。老人が悪戯半分の表情で「蔵」の壁を叩いて見せた。

「良く出来ているでしょう。これはそんじょそこらの泥棒には決して壊せはしません。どうしてもと言うのであれば、建設用重機を持ち出すか、軍隊から大砲か飛龍兵（フライングドラゴンズ）——航空機が発展途上にあるこの世界では、制空・爆撃・雷撃をこなす航空戦力と言えば、それを指す——でも借りてこなればなりません」

興味を覚えて、帰蝶も壁を叩いてみる。成程確かに硬い。筋骨隆々（きんこつりゅうりゅう）な拳闘家（ボクサー）が力任せに殴りつけたところで、彼の拳の方が根負けして割れ砕けるのが当然だと言えた。里中の言うように、本気で壊すつもりならば、最近になりようやく市中に出回り始めた建設用重機か砲爆撃が必要になりそうだ。

「この『宝物殿』にはですね、それだけの手間暇をかけるだけの価値ある代物が眠っているんですよ」宝物を友達に自慢するような口調で、川嶋は言った。

「はあ」

ピンと来ないものがあり、帰蝶は生返事をした。成金というものは大体我欲が強く、自分が手に入れたものを手放したがない修正がある。卑しい拝金宗に帰依している輩の心根など、一般人には理解の外だ。

ただ、里中老人が屋敷の中に展示しているものだけでも、皇都にある黄金博物館の同等かそれ以上なので、自分では一生どころか一〇生働いても手に入れられない珍品奇品が並べられているのに違いないと推測できた。

老人は「宝物殿」の扉の前に立つと、その大きな把手——目盛（ダイヤル）を回し始めた。ギリギリと機械が締め付けられる時特有の音が鈍く響く。帰蝶には、どうしてかその音が、冥界——いや地獄へと続く扉が開く時のそれに思えた。鬼気迫るものを感じたのだ。

「この鍵はね、儂が皇都の〈千術使〉の鍵職人に特注で頼んで造らせたものなのじゃ」老人は口許に薄い笑みを浮かべた。「儂も詳しくは理屈を知らんのじゃが、歯車と時計を組み合わせた特殊なものだそうで、開けるのに必要な番号が毎日変わる。判るかね。一二桁（ケタ）ある解錠番号のうち一つでも間違えたら、決して開かないのだよ。〇から九まである番号を出鱈目（でたらめ）に入力して正解する確率は、一兆分の——天文学的な数字になる。国家予算でも二〇億円で済むのに、それを三桁も上回るんだよ。空が白み始めてから夕陽が沈むまで延々とそれに挑もうが、的中する確率は皆無に等しい」一〇桁目の番号を合わせ終えた彼は、ますます笑みを深

くし、自らの頭部を指で指した。「その複雑な番号の仕組みを知るのは、今のところ儂一人じゃ。儂がお迎えが来るまでに、留美子さんにはそれを報せるつもりじゃが、はてさて……」

話しているうちに、一二桁目の番号の入力が終わった。鍵が外れる時特有の、ガチャリという例の音がした。重々しく扉が開いた。

「さあ、儂が生涯をかけて集めた宝物の数々をご覧ください」

里中が先陣を切って進む。その背を青年画伯と探偵助手兼小説家見習いが追う。彼らが現実に見た黄金郷をくたくたく書くことは避ける。ヴリタニヤは大武博物館にある、世界中の宝物を並べた、あれを超えると思える代物が所狭しと並べられていたとだけ記しておこう。

問題は、その宝物鑑賞会が途中で恐ろしい闖入者の手により打ち壊されたことにある。

そう。我らが冒険探偵・暮林千榛がその背を追いかける怪賊（かいぞく）——「白き復讐者」が出現したのである。彼は自らの来訪を、外へと続く扉を閉めることにより告げた。

扉のある方向から、何かが軋み、そして閉じる音がした。最初にそれに気づいたのは、里中老人である。彼は「うん？」と首を傾げた。彼は広い屋敷に住んでいるが、奉公人の類は殆ど置かず、身の回りの世話は自分でしている。「人間が多くいると面倒臭くなるので」あるいは「ボケ防止を兼ねた運動」のために、との名目で。

だから、急に誰かが来て扉を閉めるなど、まずありえないのである。

次いで、不安そうな面持ちをした帰蝶が、戸惑いも露に訊ねた。「里中さん、一体何が起きたのですか？」

「扉を外から閉められたようじゃ」老人は眉を顰めた。「うちには使用人など殆どおらんのだが」

「では、誰の仕業なんです？」

「判らん」

そんな無意味かつ短い遣り取りが交わされている最中、あの聞き覚えのある不気味な声が、「宝物殿」の内部に高らかに響いてきた。

「川嶋くん、里中翁、可愛い探偵の助手さん、昼間から仲良く宝物の鑑賞会かい？ いいご身分だな」

「『白き復讐者』！」帰蝶は顔を引き攣らせた。嗚呼（ああ）。何と云うことであろうか。師の言いつけに背いて出かけたばかりに、謎の脅迫犯と我が身一つで戦わねばならないとは。

いやまあ、他に男が二人いるが、一人は七〇を過ぎた老人で、もう一人は若く逞しい肉体の持主だが、素人なのだ。やはり、ここは彼女が何とかするしかない。

「貴様！ 何処にいるんだ！ コソコソと隠れていないで出てこい！」

川嶋が声を張り上げて、「白き復讐者」を怒鳴りつけた。だが、彼が吼えたところで、「白き復讐者」は何も答えぬ。虚しく声が反響した。

「お前も男なら、正々堂々と戦いを挑んできたらどうなんだ！」

続けての怒声は、嘲笑に遮られた。あの恐ろしげな笑い声が、石造りの牢獄に閉じ込められた面々の耳朵を打つ。

「うふふふふ……」

真直ぐな怒りを向けている時に、相手に笑われると、普通ならば更なる怒りをぶつけてしまうものだ。だが、今回はいささかどころではなく勝手に違う。いきなり外部との連絡を遮断され、自力での脱出も困難と思える状況下から事態が始まったのだ。帰蝶だけでなく男たちも顔から血の気を引かせたのも、無理からぬ事だった。

「貴様、何がおかしいんだ、答えろ！」

それでも川嶋が勇気を振り絞って詰問をすると、今度は返事らしい返事が来た。

「君たちにはここで眠って貰うよ」

眠る？ その言葉の意味を即座に理解できる者は皆無であった。彼らは紙のように青白くなった顔を互いに見合わせた。まさか何日も放置して全員を漏れなく白骨死体にでもするつもりなのではあるまいか。そんな恐怖の想像が脳裏を過ぎる。

沈黙を続ける一同に、答えとして返されたのは、シュウシュウと音立てて足許に滑り込んできた、白い瓦斯（ガス）だった。それは明らかに空気より思い感じで、浮かび上がらずに溜まっていく感じだ。それが帰蝶の膝下にまで届いたところで、川嶋がその意に気づいた。

「これは……毒霧（どくむ）だ！」

軍部がその種の兵器を開発しているとの噂は、市中に既に広まっている。何でも、ブリタニヤ人がヤフリカの植民地で紛争が起きた際、それを鎮圧するために散布したのが、その始まりだと言われている。

墨のように黒く、雅典彫刻のように屈強な身体を持つ現地人たちは、それを吸い込んだ途端に、喉(のど)を搔(か)き雀(むし)りながら、または眼や鼻から真赤な血を盛大に垂れ流しながら、呆気なく絶命したと伝えられる。

現地に足を運んだ従軍記者は、後に残されたあまりに悲惨な光景に、

「このような措置は文明人の為すべき事ではない。虐殺が帝国の統治に寄与すると思うのであれば、それは大いなる間違いだ。女王陛下の軍隊は地に落ちた」

そう書き残している。事実、軍部の方も「やりすぎだ」と現地軍司令官と使用許可を出した総督を罷免する方向に動き、帝国政府もそれを認めた。

その恐ろしい兵器がここにある！

そう考えただけで、帰蝶は身の毛がよだつ。彼女は、幻想の中で活動写真館の映写幕を思い浮かべていた。そこには、白黒の色褪(あ)せた画面の中で、地獄絵図が展開されているのだ。画面に救いを求めるように、血の滲んだ手を張り付ける人々。もがき苦しみながら膝から崩れ、糸を切られた操り人形のように倒れ伏し、そのまま二度と動かない。折り重なった骸の山が画面全体をいつしか埋め尽くす。その蛋白質(たんぱくしつ)の塊と化した人体の中に、見覚えのある顔がある。それは誰か。自分なのだ。「苦悶」と題された仮面に血化粧を施したような、一度見たらそれが生涯の精神外傷(トラウマ)になりかねない、苦痛と恐怖に歪んだ死に顔を、自分は観客の前で晒しているのだ。

個人的視点と客観とが、いつの間にか万華鏡のようにグルグルと入れ替わり、意識を明滅させる。観客のつもりでいたのが、気づけば自らが悲劇の題材そのものになっていた、と言うのは、人生の中で往々にして見られる光景だが、帰蝶はそれを極めてしまった。

さほど長くない洋袴から覗く白い膝が、ガクガクと際限なく揺れた。死ぬのは怖い。しかも覚悟なしとなれば尚更だ。気づけば彼女は首の辺りに爪を立てていた。熱いわけでも痒いわけでもないが、幻視の恐怖がそれを強要していた。

「助けて……先生……！」

喉を掻き毟りながらも、帰蝶はか細い声で尊敬する師匠兼雇い主を呼んでいた。「危ないから一人で対処しようとするな」という彼の忠言が今になり身に染みた。莫迦な真似をした一々の後悔が、強く胸を刺した。温和しく言われた通りにしていれば、こんな場所で死なずに済んだのだ。

断末魔の形相を顔に刻んだ帰蝶の近くにいる男共も、苦しげに呻いている。川嶋は溺れる者が水面から必死の思いで手を突き出すかのような動きをし、唇の端から泡を吹いている。端正な容貌がそれだけで台無しなのに、彼は情けなくも「死にたくない！ こんなところで……！」とただ喚いているのだ。

死へと至る過程を、全身を用いて現している若人たちに対し、老人の里中は呻き声こそ発しているが、温和しいものだ。もう間もなく夫婦の契りを結ぶ予定の留美子夫人の名すら、彼は口にはせぬ。栄耀栄華(えいようえいが)を極めた人間らしく達観しているのか、あるいは日常から恐怖の世界へと突如転落した衝撃に身体がついていかないのか、そこは判然としない。

恐怖が心を責めさいなみ、胸の内が絶望の色――漆黒に塗り固められた時、帰蝶は何かが決壊する音を聴いた。それは自らの羞恥心であり、あるいは人が人として生きるために必要な自制心であったのかも知れない。彼女は股間に広がる生暖かい感触と共に意識を喪失した。

膝を折り、前のめりに崩れ落ちる哀れな少女。その脚の付け根から、黄色い滴りが、彼女が屈したことを示す何よりの証拠だと誇示するかのように、床に垂れて、染み――そして水たまりを形成する。

倒れ伏した一同の身体を、重く、そして白い煙が相変わらずシュウシュウと不気味な音立てて包み込んでいく。後には白い闇と沈黙が残されるばかりだった。

毒霧を吸わされた面々は、ヤフリカの墨人（ぼくじん）たちのように、果たして全滅したのであろうか？ いやいやそうではない。あの蛇のように執念深い「白き復讐者」がひと思いに憎らしい連中を殺すわけがないではないか。猫がわざと鼠を半殺しにしていたように、彼の脅迫者も獲物を一呑みにしてしまうつもりはなかった。

川嶋は冷たくひんやりとした空気に頬を打たれ、目を覚ました。あの毒霧は質の悪い夏夢か何かで、自分は愛しい留美子夫人と同衾している寝台にでもいたのかと、彼はため息をつくような思いで考えた。

だが、現実には現実である。あれは夢ではなかった。もしかしたら現実が悪夢に浸食を受けて、その姿をドス黒く変貌させていたのかも知れぬが、それは言っても詮無きこと。迫り来る死神の鎌を躲す術を彼は持たぬ。

身を起こした川嶋は、自分が練石打ちっ放しの床に転がされていたのに気づいた。此処は何処だ？ 俺は何をしていたのだろう？ そんな疑問が脳裏を過ぎるが、答えてくれる者はない。部屋は四方を剥き出しの練石に覆われており、唯一の出入口とおぼしき扉も、分厚い鉄製で、鍵も固く閉じられている様子だ。

川嶋と一緒に毒霧を吸わされた者ら――帰蝶と里中の姿を、顔をキョロキョロとさせて確認しようとした。室内は薄暗い。ぼんやりとした光がそれでもあるのは、天井に裸電球がぶら下げられているからで、それがなければ完全な暗闇に支配されていたであろう。

眼が少し慣れてくると、自分以外はこの部屋にはいないことを、川嶋は確認できた。彼は文字通りの一人きりで薄暗い牢獄の中に寝かされていたことになる。自らが置かれていた状況を把握すると、急速に不安が込み上げてくる。どういうことだ？ どうなるんだ？

それは死刑を宣告された犯罪者が、いよいよ独房の中に放り込まれた時に抱く気分似ていたかも知れない。死刑執行のその日が明日か一〇年後なのかを知る術を、外界から隔絶された身が持ちようがないのだ。

川嶋は不安で表情を歪めた。日頃の女性受けが良い容貌は俄に崩れ去り、泣き崩れそうになる。彼をこんなところに閉じ込めた犯人――「白き復讐者」が、彼に一毛ほどの好意も抱いていないのは、これまでの経緯から確認済みで、そうであるからには、これからどれだけ残酷な仕打ちを受けるのかが想像がつかぬ。

「誰か！ 誰かいないのか!!」

気がつけば、川嶋は声を嗄らして叫んでいた。それは絶海の孤島に、一人きりで流れ着いた漂流者の嘆きにどこか似ていた。返事をしてくれるのであれば、もはや血に飢えた獣――獅子や虎に代表される、肉食獣でも構わぬ、との響きがそこにはある。

このまま一時間も放置されれば、彼は孤独感と恐怖心から俄に発狂していたかも知れない。憎

悪した相手を恐怖のどん底に突き落とすことを望みとする「白き復讐者」からすれば、それはそれで満足の得られる結果が出ただろう。

だが、稀代の策略家である「白き復讐者」が、そんな幸福な結末を用意するわけがない。彼は最後の最後は自分の手で決着をつけねばすまぬ質なのだ。意識を自らの意思で遠くに飛ばし、はいそれまでよといく道理はない。

それが証拠に、一人寂しく叫び続ける哀れな虜囚に声をかけたのは、彼を閉じ込めた当人である。彼は川嶋が何度目かの絶叫をして、息せき切らし始めた時に存在を示した。

「お目覚めかね、川嶋くん」

声は鉄製の扉から響いてきた。そこには鉄格子（てつごうし）を嵌められた窓がある。大人が立てば丁度眼に届くようなところにある、ただし大きさはさほどではない。赤ん坊でも通り抜けられない代物だ。その用途は完全に覗き窓であろう。何しろ成人男性は疎か、小学生ぐらいの女子でも、腕一本を突き出せるぐらいの大きさしかないのだ。

叫びの合間を縫うような形で響いた声。川嶋はそれに素早く反応した。その様子は牢獄の変化を歓迎する囚人と言うよりか、人の気配を察した獣を思わせた。憎悪という名の汚濁を瞳に漲らせた彼は、狂を発したかのように喚いた。

「やい貴様！ 俺を閉じ込めてどうするつもりだ!？」

言い終えてから、鉄扉の方へ向かい走った。そこをガンガンと両拳で殴りつけた。金属が叩かれた時特有の、乾いた鈍い音が周囲に響く。その様は、まるで動物園の檻に閉じ込められた猛獣のようだった。脱出する見込みが絶無な者がしでかす、虚しい抵抗。

「無駄だよ川嶋くん。この扉は人間の力如きでは決して壊せない。私が金と手間を惜しまずに造らせたんだからね。実験や計算によると、フィスパニヤの猛牛が頭から突撃しても打ち壊せない代物だと太鼓判を押された。つまり本職の拳闘家が殴りつけてもビクともしないんだ。素人の君が何をしたところで小揺るぎもしない。虚しい真似はよし給え」

「虚しい」「無駄」と言われて止む抵抗運動は少ない。大抵は当事者が抗うことの無意味さを痛みと共に痛感するまで続く。川嶋もその例外に漏れなかった。彼は大切な商売道具――絵筆を握る手の痛みと共にそれを学んだ。固く結ばれた握り拳は気がつけばそこら中がささくれ立ち、血が滲んでいる。腫れた部分も多く、出血箇所以外も赤くなる。

川嶋は荒い息を尚更に荒くして、床に膝をつけた。頭に血が上った影響から暴れたが、激しい動きがそう長く続くはずもないのだ。

「理解してくれたかね？ 落ち着いたら私の話を聴いたらどうかね。今日はそのためにお招きしたのだよ」

「お招き？ お招きだって!? こんなところに閉じ込めるのが、か？」川嶋は髪を振り乱して吼えた。「人を莫迦にするのも大概にしろ！ 貴様は何を企んでいるんだ!？」

単に殺害するだけでよいのであれば、例の毒霧――恐らくは単なる眠り瓦斯だったのだろうが――で全ては済んでいたはずだ。いや彼はそもそも里中に恨み節を向けていたではないか。無差別殺人に踏み切るにしても、順番がおかしい。

「私は君に個人的な恨みがあるのだ。今こそそれを晴らさせて貰う」

「個人的な恨みだって？」川嶋は狐に摘まれたような気分で鸚鵡（おうむ）返しをした。今までこの敵対者――「白き復讐者」が巧妙に姿を隠していたこともあり、彼と直に対面するのは今日が初めてなのだ。そんな相手から恨みを買う覚えなどない。仇を討たれるにしても、自分が一体何の罪を犯したのか？ 早い話、意味不明な宣言であった。

「そうだ。君は許されざる罪を犯した」謎の脅迫者は眼を鋭く光らせた。

「君は私の妻を盗んだ」

そこには、罪を告発する者特有の怒りが、強く滲んでいた。耳にする者の息を思わず吞まさずにはおれない何かが潜んでいた。川嶋は圧倒された。次いで考えた。この男は何を言いたいのだ？ 私の妻？ 俺が盗んだ？ 判らない。判らない。彼は罪人特有の、犯罪に対する罪悪感の希薄さを、天性の才として備えていたのかも知れない。いやもしかしたら自分が肉の繋がりを持つ寡婦のことを、心の底から我が物として信じていたのかも知れない。

だが、場が持つ緊迫感が、川嶋の頭脳を回転させ、解答を導き出した。その間に一分ほどの沈黙を挟んで――となるが。

「妻――まさか留美子さんのことか!？」

事ここに至って、川嶋は「白き復讐者」が何を言いたいのか理解したのである。彼は留美子夫人と――里中が公認しているとは言え――不義の契りを交わしているのだ。世間一般的には姦夫（かんぶ）と呼ばれる立場にあるのだ。留美子夫人に異常な執着を燃やしている「白き復讐者」が――彼女の言動を四六時中視ていると豪語している変人が、二人の間柄を知らぬ訳がない。

狂気に脚を踏み込んだ人間の恐ろしさを、川嶋は認めた。恋敵を害するためだけに、この異様な手間暇をかけるとはと、背筋が寒くなる思いを味わう。こんな真似をしでかす輩は、余程に恋心に身を焦がし、気を違えたに違いないのだ。それは狂人の妄想であり、常人には想像も及ばない楽園の住民が見た夢なのであろう。

だが、川嶋にも意地がある。満天下に自慢できる行為をしているとは、厚顔無恥（こうがんむち）を地でいく彼も口にする自信はないが、「愛おしい恋人」のために精一杯の虚勢を張るだけの勇気は、まだ胸の奥底に残されており、それが彼を突き動かした。

「この気狂（きぐる）いめ！ 誰が誰の妻だ！ 留美子さんは俺のものだ！」

鉄格子に手を伸ばし、扉の先にいる相手に掴みかかろうとする。だがその努力もまた虚しい。彼の逞しい腕は途中でつかえ、その先に進めなくなる。その様は壺の中に仕舞われた餌を掴んで離さない猿の様子を思わせた。頭で理解できていても、感情がそれに逆らうのだろう。牢獄付近の空気をただ攪拌（かくはん）するのみに終わる。

そんな画伯青年の行為を、「白き復讐者」は嘲笑う。文字通りの呵々大笑をした彼は、息荒げる敵対者に対し、淡々とした口調で告げた。

「私の主張には正当性がある。世界中の如何なる裁判官も認めるような正当性がね。今それを君に教えてやろう」

「白き復讐者」は自分の顔に手を伸ばした。そこから何かを外した。その様子はどこか厳粛なも

のに感じられた。川嶋はそれを見つめる。彼の言う「復讐の正当性」を確認したい――との心理が作用したし、暗闇の中に浮かぶ人間の顔に、何か鬼気迫るものを感じたのである。

暗闇の中に浮かび上がるのは、「憎悪」と題された仮面のような、強い怒りの滲んだ、皺深い顔である。白髪白髯の老人だ。その老人の眼には、ただならぬ輝きがある。

川嶋はその顔を何処かで視たような気がした。記憶の糸をたぐり寄せると、確かに一致する顔と眼があるのだ。だがそれはうまく食いつかない判じ物（パズル）の欠片（ピース）のように喧嘩をし、一致しない。判らない。判らない。彼は心中で呻いた。

「まだ判らないかね？ ならこれならどうだ？」

「白き復讐者」は中途から声音を変えた。そこには川嶋からすれば懐かしい響きが含まれていた。そしてその懐かしさが不合理さを解消させ、同時に血も凍るような恐ろしい真実をそこに浮かび上がらせたのである。怒りに滾り、火を吹くような光を帯びた彼の双眸が、自分の罪を映し出す照魔鏡（しょうまきょう）のようにも見えた。

「まさか……まさか……まさか……」

辿り着いた真実を前に、川嶋は心棒を抜かれた人形のように、グニャリと崩れ落ちた。尻餅をついた。幼児のように同じ言葉を繰り返した。全身は熱帯の熱病に取り憑かれた者のようにガクガクと震え、顔からは完全に血の気が引いている。

「どうやらお判り戴けたようだね」謎の脅迫者は微笑んだ。それは獲物を前にした獣が浮かべる、舌なめずりを思わせた。彼はもう声音を変えようとしな。川嶋の記憶の中にある調子で喋っている。

「そんな莫迦な！ お前はもう死んだはずだ！」

「そうとも。私は一度死んだ。貴様たちのせいでな。だが、地獄の底から蘇ってきたのだよ。貴様たちへの復讐――それだけのためにな！」

「白き復讐者」は叩きつけるように言った。狭い牢獄の中、それは反響する。彼のこれまでの冷めた口調は一変し、一語一語に熱が込められている。言葉に見えざる刃があるのであれば、目映いぎらつきを有したそれは、既に川嶋の全身に無数の生傷を刻んでいたに違いない。

相手を心底から恐怖させるのに必要なのは、百万語を尽くした罵倒ではない。ただ真実。そして揺るぎない復讐の念――気迫だ。「白き復讐者」はその双方を兼ね備えており、自らの生命を危険に晒す類の修羅場を経験したことのない画伯青年の精神を短時間の間に打ち砕いていた。

「判った、よせ！ 俺は自首をする。犯した罪を官憲に洗いざらい白状する。御上の裁きを受ける。だから……！」

床に両膝をつけた川嶋は、拳を硬く握り合わせた。その姿勢で、自分を見下ろす「白き復讐者」に哀願する。その様は残忍な主人に許しを請う奴隷のようでさえある。鞭が背中に振り降ろされれば、たちまち肉が裂けて血が噴き出し、気の弱い人間であれば目を覆いたくなる凄惨な場が出来上がる。追い詰められた彼は、諸外国で少し前まで繰り返されてきた、そうした光景を思い描いていたのかも知れない。そこには、女好きで誰彼構わず手をつけようとしてきた色男の面影など微塵もなく、眼にする者に慈悲の心が寸分でもあれば、思わず勘弁しそうな風情がある。

だが、人の心を捨てた復讐の鬼に、慈悲など耳かきひとすくい分もある訳がない。彼は哀願す

る川嶋に怒りに滾る眼差しを向け続けたまま、冷たい言葉を投げつけた。

「駄目だ。君への裁きは私自身が下す。御上の手を患わせる必要はない。いや、私自身が君を裁くのでなければ、私には到底納得できない。君は問答無用で極刑――死刑だ」

「死刑！」衝撃的な単語が飛び出たことにより、川嶋は動揺を酷くした。

「そうとも。この部屋は私が特別に拵えさせたものでね。部屋全体が私に忠実な死刑執行係なのだ。一度動き始めたら、もう誰にも止められない。そして君に刑罰が科されるのは、今だ。死刑執行は既に開始されているのだよ」

どうということだ――と川嶋は周囲を見回す。四囲を練石で囲まれた部屋の中には、処刑道具――断頭台(ギロチン)や絞首台は疎か、西洲の昔話に出てくる、鉄の処女(アイアン・メイデン)だの棘付樽(とげつきだる)に代表される恐ろしげな拷問機具の類もない。ガランとした空間には、他に人の気配もない。血に飢えた獣の唸り声もせぬ。水や食糧の類もまた一切見えないことから、日干しにすることを目論んでいるのでは――と言えなくもないが。

戸惑いを露にする川嶋に、「白き復讐者」が楽しげに語りかけた。

「判らないかね？ まあ無理もないか。奇抜な方法だからな。天井を見上げてご覧。裸電球があるだろう。それがジリジリと君の方へ近づいていくのが見えないかね？」

そう言われて、川嶋は天井を見上げる。すると、確かに僅かずつであるが、天井が沈降していくのが視認できた。一秒間に数センチも動いていない。だが、確実に彼との距離を詰めてくるのだ。耳を澄ませれば、ギリギリという歯車が軋む時に響く、神経を刺激する音、そして鈍い機械(モーター)音までが認められた。となると、答えは一つしかない。

「……！」

川嶋は絶句した。「部屋全体が私に忠実な死刑執行係」だと言われた時には、相手が何を伝えたいのか理解しかねた。あまりにも莫迦げた表現だとも思えた。だが、現実天井が不気味な音を立てながら迫り来るのだ。もうそれを冗談や脅しだと返せる余裕を喪っていた。

脱出する術どころか、抗う方法さえ見出せぬ哀れな囚人に対し、「白き復讐者」は楽しげに語りかけた。

「天井は丁度一時間後に、床にまで届く。そうなれば君は部屋の中で肉煎餅(にくせんべい)さ。判るかい？ 私は君にその一時間の間に、私が君たちのせいで味わった絶望と恐怖を凝縮し――いや何倍もにして追体験して欲しいのだよ。そうしてこそ私の恨みは晴れ、胸のつかえが取れるのさ」

「悪魔――悪魔の所行だ、これは！」

川嶋はようやくそれだけを、搾り出すような口調で言った。復讐の方法に個人差はあれども、太古の世界に伝説を残した暴君のような振舞を見せる「白き復讐者」に、彼は強い憤りを感じている様子だ。しかし相手は動じる素振りも見せぬ。

「悪魔か。確かにそう言われればそうかも知れない。けれどね。私を悪魔にさせたのは君たちだ。これは一種の自業自得――因果応報なのだ」彼は自分の行為に正当性がある旨を訴え、次いで嗜虐的な笑みを顔に刻んだ。「大昔に似たような仕掛けで釣り天井というのがあったが、あんなものは一瞬の苦しみで済んでしまうから駄目だ。私は君を楽に始末するつもりはない。残された

時間、精々藻掻き苦しんでくれ給え」

嗚呼、何ということであろうか。部屋の中に罠（トラップ）を仕掛け、殺人を目論んだ先人は数多いが、部屋そのものを巨大な処刑装置――挽肉機（ミンチメーカー）へと変貌させ、他者を殺害せんとした犯罪者がこの世にしようとは。

ギリギリ、ギリギリ……。

川嶋は自分の頭を締め付ける巨大万力の幻影を、胸中に描いた。彼は無駄と知りつつも鉄格子に手を伸ばし、そこから脱出しようと試みた。だが、赤ん坊ですら通り抜けられない大きさの窓に縋り付いたところで、現状に何の変化があらうか。

「出せ、出してくれ！　それが駄目なら、拳銃か何かでひと思いに撃ち殺してくれ！　こんな恐怖に俺は耐えられない――」

「無駄だよ。何をしても無駄だ。君が死へと至るまで、この部屋の仕掛けは止まらない」

死刑室には、悪魔の如き嘲笑と断末魔の様相を帯びた悲鳴、そして感情を一切含まない機械音ばかりが、ただ延々と響いていた。

14

地獄峠を後にした暮林は、保坂の案内で「殿様の墓場」まで足を運んだ。山の中腹をくり抜いて造られたというそこは、成程頑丈な造りをしていた。特別製の鉄扉は下手なこそ泥が壊せる代物ではなく、その管理の厳重さが窺える。内部に足を踏み入れるとすれば、小村家の一切を取り仕切る志田執事に鍵を借りねばなるまい。

「鍵がなければ入れそうにないな」

暮林は戦艦の装甲板を思わせる分厚さを持つ鉄扉を軽く叩いた。鈍い音がする。鍵そのものは特殊なものではなさそうだが、扉の頑丈さを見る限り、正規品以外で開閉が可能とは到底思えない（暮林は探偵の心得として監禁先から脱出する方法――縄抜けや錠前外しなどを身に会得しているが）。

「どうだい。立派なものだろう」保坂は自分の宝物を自慢する子供のような調子で言った。地元の名物を紹介しているのだから、気分的にはそうなのかも知れない。

「この墓場はね。小村家かあるいはその近親者の葬儀がない限り、決して開かれることはないのだよ。つまり死人が出なければ一〇年でも二〇年でも閉じられたままなわけだ」

「だから海賊の財宝が隠されたとの噂が？」確かめるように暮林は訊いた。

「うん。海賊というのは社会の縮図だ。食い詰めた奴や酒や博打で身を持ち崩した輩、あるいは一攫千金を夢見て志願してきた者と人材は事欠かない。その中に錠前造りの専門家や腕利きの泥棒がいても不思議ではあるまい」

「まるで、支那（しな）の食客みたいだね」暮林は学生時代の貧乏旅行で行ったことのある、支那――ウーラシヤ大陸東部の情景を思い描いている。過去に遊牧騎馬民族――テムジン族が制した大地は、満帝国が瓦解して以来、統一国家らしい統一国家が出現せず、小邦乱立――群雄割拠（ぐんゆうかっきょ）状態にある。その支那では乱世の情報源として、王族や有力貴族が、学

者や武芸者を食客として養い、有事に役立ててきた、との伝統がある。

暮林が旅先で気に入られ、暫く世話になった大人（たいじん）——支那では有力者のことをそう呼ぶ——の屋敷にも、彼が面倒を見ている博士や護衛役（ボディガード）を兼ねている拳法の達人などが百人単位で住んでおり、彼らはそれぞれ一芸に秀でている男たちだった（暮林は彼らから勉学や身を守るために必要な技術を、持ち前の人当たりの良さで学んだ）。

「泥棒とか物真似の名人を養っている人もいるんだっけか、向こうでは？ まるで取り敢えずの亡命先に外人部隊を選んだ連中みたいだね」

瑞穂でも「殿様」と呼ばれている人たちが、芸達者な人間の後援者（パトロン）を務めている事例が多いが、支那ほど派手ではない。保坂はそのことを言っている。

「ああ」暮林は頷いた。海賊・食客・軍隊は社会の縮図という部分は同じだが、三者には明確な違いがある。それは国家の統制を受けているかいないか、その暴力に社会的意義があるのかどうかなのだ——と思いながら、話を変えた。

「小村家で最近出た死人と言え、伯爵だけで良いのかな？」

「うん。元々親戚の少ない人だから」

「誰かを埋葬する度に昔の棺を一つ一つ開く家もあるまい」暮林は一条の煙の中にある焰を見つけたような顔をした。

懐から白い手袋と針金らしきものを取り出した暮林を視た保坂は、さすがに驚いた。訊くまでもないが一応真意を訊ねる。

「こじ開けるつもりか？」

「可能であれば」

「許可は？」

「勿論」取っていないよ——との部分は故意に省いた。暮林は自分の好奇心を満たすことに努力を払うタイプの人間だが、常識を弁えていた。すなわち莫迦正直に頼み事をして、許可など下りない事柄があることを熟知していたのだ。

「暮林」保坂は顔を引き攣らせた。「確か『殿様の墓場』が此処にあるのも知らなかったんだよな、つい先程まで」

暮林は答えなかった。錠前外しを鍵穴に差し入れる。何度か回転させる。手応えを感じた。やはり頑丈ではあるが構造自体は単純なようだ。地元民は恐れ多くて近寄りもしない人間が多いから、そのような造りなのだろう。

「おい、俺は知らんぞ」

「うん。知らなくていい。これは僕が調査上必要だから手をつけたことなんだ」暮林はにこりとした。「君は無関係だよ」

ある種の犯罪行為に手を染めるものが浮かべる、あの何とも言いようのない笑みを浮かべる友人に、保坂は肉厚だけが理由ではない汗を背中から瀧のように流した。相手が無関係だと断じてくれても、ここまで彼を案内したのは自分なのだ。間接的に犯罪に手を貸しているのかも知れない。新聞記者であるから多少強引なことでも平気だと思う彼だが、自分を上回る非常識ぶりを見せつけられると、そんな社会的良識が俄に活気づき、心を責めさいなむのだ。

「本当に大丈夫なのか？」玉粒のように浮かぶ汗。泣き笑いの表情。それだけを視るとまるで笑いを主眼とした舞台劇の脇役のような感じだが、彼は当事者の一人——無理矢理、あるいはなし崩し的に巻き込まれたのだが——である。

「平気だ」暮林は肩越しに視線を投げながら答えた。「うん、開くぞ」

ガチリと錠前が開く時特有の、何処か頼もしい音を立てて、それは開いた。重厚感溢れる鉄扉を押し、外界との繋がりを確保する。

重苦しい音と共に内部へと踏み込むと、ひんやりとした空気が頬を撫でた。「墓場の静寂」との譬えが暮林の脳裏を過ぎる。当たり前の話だが、どこかの紙芝居作品のように、「墓場で運動会」をやる奴など、いるはずがないのだ。いや仮にいたとしても、それは夜の話だ。昼間の今は関係ない。

心底嫌そうな顔をしている無関係当事者——おかしな表記だが、責任がない傍観者ぐらいに捉えて貰いたい——もまた暮林の後に続いた。好奇心の強さと言え、新聞記者にまでなったぐらいだから、彼も相当なものなのだ。ここまで来て怖じ気づいてなるものか、という自棄糞な好奇心もあるが。

「噂話を面白半分にしたのは俺だが」保坂は墓所特有の不気味な空気に当てられている。身をすくめている。「お前もかなり物好きだな」

「だから探偵で作家をしている」暮林は答えた。世間一般的には、彼は売れっ子（ベストセラー）作家なのだが、本人は探偵だけでは喰えないので、作家を兼業しているとの気分を抱いている。

一度罪を犯せば、人は大胆になるものである。まだ手が白いうちならば汚れるのを気にするが、拭えぬ染みがついて黒ずんでしまえば、新たな犯罪に手を染めるのに躊躇はしない。殺人犯の言う「一人殺すのも二人殺すのも同じ」という理屈が作用するのだ。一人殺せば死刑にならずとも一〇年以上の刑期を刑務所で過ごさねばならぬ。そうなれば社会的に抹殺されたも同然になる。縦しんば無事に刑期を終えて出所しようが、御伽話に出てくる哀れな漁師宜しく、そこから生活を再建する術はあるまい。

暮林と彼に引きずられる形で犯罪行為に足を踏み入れた保坂は、そうした覚悟を抱いているのかいないのか、判然とせぬ表情で進んでいく。墓所の奥へと進むごとに扉から差し込む光は勢いを喪い、闇はその力を増していく。

「何か灯(あか)りはないか？」暗がりにまだ眼が慣れていない保坂が、眼を瞬きながら言った。

「燐寸があるよ」暮林が燐寸箱を懐から取り出して、燐寸棒に火を点けた。暗闇の中にボウと音立てて光が灯(とも)る。けれどそれは蛍の光よりも儚く感じられた。

「墓場だろう」保坂が気づいた点を指摘した。「燭台(しょくだい)と蠟燭(ろうそく)ぐらいないかい？」

「うん、そうだな」暮林は燐寸棒を片手に辺りを探る。すると燭台は見えた。燃え尽きた蠟燭が立てられている。だが代替りの蠟燭は見つからない。

「駄目だな。蠟燭はないよ。燐寸を頼りにやるしかないな」

「懐中電灯でも持ってくれば良かった」ぼやきながら、保坂も燐寸に火を灯した。

ともかく光源を確保した二人は、棺が並べられている区画へと進む。古い棺が手前の方にある。埃を被り痛んでいる。その内部に小村家の先祖たちが眠っているのだと思うと、骸(がい)骨(こつ)の集団が列をなしているのだと思うと、不気味さもひとしおだ。

「新しい棺は」暮林は時代を感じさせる棺を一つ一つ確認しながら言う。「奥の方にあるようだね」

「おい、もうよそうや。死人が怒るぜ」

罰当たりな真似はよせ——と声音に込める友人に、暮林は動じることなく応じた。

「何もしないまま惨劇が繰り返される方が、余程罰当たりな行為だよ」

そう言って彼は比較的新しい棺が安置されている場所まで歩いて行く。埋葬されてから一〇年以内のものだと、保存状態が良いためか、さほど痛んでいない。ただし不気味な虫が近くで蠢(うごめ)いていたりするので、育ちの良い女性であれば、眼にただけで悲鳴を上げたに違いないのだが。

「お目当てのものはあるかい？」困惑を泣き顔に宿した保坂は、茶化すように訊ねた。

「もうすぐ見つかると思うが——」言いながら暮林は何本目かの燐寸棒を投げ捨てている。喫煙の習慣のある彼は、燐寸を常備しているが、真暗闇の中、長時間粘れるほどの量は有していない。そろそろ決着をつけねば、墓場で立ち往生しかねない。

僕の勘が間違っていなければ——と暮林は期待感を胸に、最奥部へと歩を進める。すると保坂の言う「お目当てのもの」が目についた。歓喜の声を上げる。

「あったぞ。僕の予想通りだ」

友人の声を聴いて、保坂は恐る恐る問題の代物に近づく。灯りを通じて覗き込んで、彼は「ギャッ」と情けない声を迸らせた。

「まさか、お化け……」

「お化けがこんな真似をするわけないだろ。壁でも何でもすり抜けられるんだから、もう少し丁寧にするさ」暮林は燐寸の焰で顔を照らしている。暗闇の中に赤黒い光が不気味な陰影を添加し、独特の凄味をそこに加えている。彼が何とも言えない顔で笑っているせいもあるのだが。

「だとすれば、君の言う通りか」

「正しくは噂通りだね」暮林は頷いた。「これで確信が持てたよ」

彼らは「殿様の墓場」で果たして何を視たのであろうか？ それが事件の核心を抉るものであるのは間違いがない。だがそれが直ちに犯人逮捕に結びつくものではないのも確かだ。手許の燐寸棒の数も既に心許なく、長居は戒められた。

「とにかく一度戻ろう。状況を整理したいから」

「賛成だ」暮林の提案を、保坂は即座に了承した。「墓参りならぬ『墓場探検』なんて、俺はもう二度としたくないね」

冷や汗と涙を流し尽くした感のある友人に、暮林は微苦笑を投げかけた。

地獄峠と「殿様の墓場」の内部を精力的に確認した暮林は、陽が傾いた頃に、小村伯爵邸に単身戻った。保坂とは途中で別れた。事件解決まで問題を新聞記事にしないで欲しい、との釘を刺して。これは人間不信から来る行為ではない。探偵として職務上知り得た情報を無闇に拡散する方向を避けたのである。個人としての人間性や信頼関係は、職業倫理とは切り離して考えるべきだと考えているあたり、彼は実直なのだろう。

「いいだろう。その代わりに、事が全て済んだら、うちの社に真先に書かせてくれよ」

好奇心の強さに関しては、暮林に劣る部分のない保坂だが、友人の仕事を邪魔するつもりはない。だから、別れ際にそう言い置くだけで、細かな詮索はしなかった。

そんな友人の心遣い――物判りの良さと良心を混淆させたもの――に感謝しながら、暮林は帰路についた。体力には自信があるが、衝撃の反復のせいで、気疲れを起こしている。今日はさすがに食事の後は直ぐに寝（やす）もうか――と考えた。

「白き復讐者」は妙に律儀な部分があり、何か仕掛けてくるにしても、宣言をせずにはおれないのだ。そこは西洲の、ある種の芸術性を備えた連続殺人鬼などにも共通する、奇妙な癖だ。大体犯罪などと言うものは、実行者に主導権がある。何の通達もせずに奇襲攻撃を反復すれば、大抵の者が音を上げてしまう。警察にしても同一犯が同じような犯行を繰り返していると気づいても、その法則性を見抜けない限り、犯罪を未然に防ぐのは難しいだろう。

暮林と帰蝶に関しては、既に「手を引け」と脅しをかけられているのだが、それならば夜襲でもしてくればよさそうなのに、ついぞ寝所には姿を見せず仕舞いであった。向こうが脅しをかけるだけならば、大胆に行動しても良からう――と彼は敵に対する妙な信頼感と共に判断した。

中途から事前予定にはなかった場所にまで足を運んだが、今日は出かける旨を伝えてあるし、何事もなからう――そう楽観的に結論づける暮林だが、彼を待ち受けていたものは、安息の正反対であった。小村伯爵邸――その門の前で志田執事が細い身体に脂汗を滲ませながら立っていた。

そのただならぬ様子から、暮林はまた何か起きたのか――と考えて身構えた。この状況下で不用意に動き回る者などおるまいと高を括っていただけに余計だ。

「暮林探偵！」老人は暮林の帰還を認めると、大慌てで駆け寄った。恐慌（パニック）によりもつれそうになる舌をどうにか機能させて、彼が留守中に起きた異変を報せた。

「大変です。川嶋様と里中様、そして貴男の助手が行方不明になりました！」

叩きつけられた言葉。意味を理解するのに数瞬を必要とした。だが、彼は緊急事態――その対処を専門とする人間である。動揺を表情に現さずに訊ねた。

「行方不明？ いつからです？」

「僕も正確には判りませんが、昼食の時間にお三方を呼びに行きましたが、その時には既におりませんでした。気づいてから方々を探しましたが、見つかりません」

何やかんやと理由をつけ、川嶋と里中は普段から小村伯爵邸に入り浸っていることが多い。だから主人の昼食に合わせて彼らの分も準備するのがこの屋敷の平常運転なのだ。だからこそ昼になるぐらいで気づけたのだろう。

「昼頃ですか……」暮林は腕組みをした。彼が出立したのは明朝である。丁度朝日が昇る頃だ。

そして今は夕方。橙色をした夕陽が傾き、間もなく夜の帳（とぼり）が降りようとしている。彼らの失踪が昼以前だとすれば、もう随分と時間が経っていることになる。

「行き先は告げていませんでしたか？」

「それが何も……」老人は首を横に振る。彼の役割は小村家の一切を取り仕切ることだ。屋敷の中にいる面々の監視ではない。無理もなかった。

「せめて行き先ぐらい告げてくれていれば、探しようがあるのに」暮林は頭をくしゃくしゃと掻いた。川嶋と里中はともかく、屋敷の住人の安全を保つようにと命じていた帰蝶までもが行方知れずと来ては、神隠しを疑いたくなる。

しかし探偵たる者が超常現象が起きたことを前提に話を進めるわけにはゆかぬ。それは単なる思考放棄に繋がるのみならず、責任をも投げ捨てたことになる。恐怖小説であれば理屈を抜きにして話の面白さを追求すれば済むのだが、現実には犯罪者が暴れている状況で、「判りませんから幽霊のせいになります」とは言えないのである。

「他の人たちはどうなのですか？」暮林は他の面々の状態を確認した。三人が行方不明と来たのだから、被害が拡散している可能性もある。

「そこは問題ありません。奥様は無事です。屋敷の使用人たちも、僕を含めて全員何ともありません」老人は正確に被害者だけを告げたいらしい。

「警察に連絡はしましたか？」暮林はそこが重要なのだとばかりに確認した。「単なる脅迫文書ぐらいなら、悪戯だと言い張れますが、現実に行方不明者が三人も出たとなれば、これはもう大事件です。状況からして『白き復讐者』の仕業に間違いがない以上、本職の捜査機関の介入を考慮に入れねば」

自らのことを十全の存在だと考える者こそ墓穴を掘るものだと、暮林は考えている。依頼を受けた探偵なのだから、公的権力の手助けを借りなくても、事件の一つや二つ解決してみせると粋がる者こそ、被害者の数を無意味に増やす疫病神のようなものなのだ。

保坂との約束を破ることになるだろうが、それもこの際やむを得ない――と暮林が歯噛みしながら考えていると、志田は眉を顰めて答えた。

「奥様が大事にしたいと仰いまして……」

「そんな莫迦な！」罵るように、暮林は言った。

失念していた。金満家の家にはこれがある。一般人なら手に負えない案件を警察に通報して解決しようとするが、内部事情を官憲に詳しく知られたくない、との発想が先にある人種だと、どうしても通報を渋るのだ。彼らは家の恥を外に知られるのを病的に嫌がる。そうこうしている間に、状況が悪化するのを理解していないのだ。

暮林は文字通り地団駄を踏んだ。依頼主の川嶋、さほど丈夫な身体の持主に見えない里中の安否も気遣われたが、一番の心配の種は帰蝶である。「白き復讐者」は留美子夫人以外に何ら興味が無い風な発言をしているが、相手は凶悪な犯罪者だ。か弱い乙女がその魔手に落ちたとなれば、何が起きるか判らない。あらぬ妄想が脳裏を過ぎると、もう気が気ではない。頭に血が上るのが自覚できた。

「『白き復讐者』から脅迫状か何かは届いていませんか？ 特別製の音楽円盤をわざわざ仕込む

ような奴なのだから、何かしてきそうなものですが」

「そういうものは来ておりません」志田老人はきっぱりと答えた。「そんなものがあれば暮林探偵、貴男にもう見せていますよ」

「違いない」暮林は思わず天を仰いだ。

派手な演出を行う犯罪者というものは、本来なら追跡側の神経を逆撫でする存在である。追う側がコケにされている感が漂うからだ。だが、同時に「俺はここにいて暴れているぞ」と宣言してくれているのも同然なので、扱いやすくもある。もし黙りを決め込まれて、犯行の手口を不規則に変えられたら、同一犯でも見分けがつかず、犯罪心理学の権威も頭を悩ますだろう。

「白き復讐者」に関しても同様のことが言える。彼は毎度ご丁寧に脅迫状を送付し、何かする度に自らの存在を訴えてきた。おかげで後手に回ろうとも、相手の動向を把握できていたのだ。だが、今回に関しては何の犯行声明も出されていない。状況証拠から彼が関わっているのは明らかなのに、何とももどかしい。

「こうしてはいられない」危機感を刺激された暮林は、その場から駆け出そうとした。この種の犯人が従来 of 法則から外れるような真似をした時こそが、事件の一大転換期だと彼は経験から学んでいる。血生臭い殺人事件の幕が勢い良く上げられたような気さえした。

「お待ちください」そんな暮林の前に、志田老人が立ち塞がる。「もう日は沈みます」

「それがどうしたのです」暮林は疲労感を覚えているせいもあり、いささか感情的になっている。「今日は何も起きないと考えて、屋敷から離れていた僕にこそ責任があります。一刻の猶予もありません。犯人を直ちに捕縛しないと」

「駄目です。周囲の情景をよくご覧ください。この辺の闇は深（ふこ）うございます。土地勘のない貴男様が闇雲に走り回ったところで、埒のあくものではありません。それどころか、犯人が張り巡らせている罠に自ら突っ込むのと同然になりかねません。二次遭難の恐れがあります。ここは明朝から捜索を開始した方が賢明です」

そう言われて、暮林は急速に傾いていく夕陽を見つめた。街灯がない田舎道は、暗くなり始めてから闇に呑まれるまでが早い。夜にこそ騒がしく、そして明るくなる皇都の歓楽街と比べるのも莫迦らしい。確かに老人の言う通り、下手に動いた方が危ないだろう。肉体の疲労もあるし、闇討（やみうち）される可能性を否定できない。

だが、感情が理性に反発した。暮林は爆発するように怒鳴った。

「夜が明けるまで何もしないでいろと言うのか!？」

職務に対する責任感。帰蝶の身の安否。「白き復讐者」に対する憤り。それらが暮林の中で複雑に混ざり合い、理屈を踏みつけたのだ。

しかし志田老人は冷静だった。激高する暮林と正反対の反応を彼はした。

「落ち着いてください。物事には限界があります。それに暮林探偵、貴男まで行方不明になれば、一体誰が此度の騒動の收拾を付けるのですか？」

強い意思を感じさせる真直ぐな眼差しを向けられた暮林は、思わずたじろいだ。初対面時は「干涸らびた河童」にしか見えなかった老人だが、やはり年の功と言うべきか、急場の時には落ち着きがある。

「む……！」

痛いところを突かれた暮林は沈黙した。頭から冷水を浴びせられたような気になる。頭に登っていた血の気が一気に引いた。確かに真相に一番近いところにいるのは、自惚れでも何でもなく自分なのだ。あと一步で判じ物(パズル)が完成しそうだという時に、無意味に危険に身を晒すべきではない。

暮林は深呼吸をした。新鮮な空気を肺に送り込む。混沌の様相を呈していた思考回路が俄に理知的な機能を取り戻した。彼はばつの悪そうな顔をした。

「確かに志田さんの言う通りです。今此処でジタバタしても意味がない」

「お判り戴ければ幸いです」

「ところで小村夫人は何処に？」婚約者と恋人——妙な表現だが、そう言うしかない——を同時になくした形の女主人がどんな反応を示しているのか、暮林はそれが気がかりだ。

「近づかない方が宜しいかと存じます」

「荒れている？」

「奥様が一度癩癩を起こすと、手がつけれません」

怒るのも無理はないか——と暮林は思う。大切な金づると一番のお気に入りの愛人が一緒に消えたとなれば、どれだけ温厚な人物でも普通は怒る。ましてや留美子夫人のような、感情の起伏が激しそうな女性ともなれば尚更だ。

「成程。確かに近づかない方が良さそうだ」

「夕餉と風呂の準備をさせますので、どうか今晚はお寝みを」

「判りました。そうします」

失態を演じておきながら、言い訳もせずに雲隠れ——とは、良識のある大人がする振舞ではないが、感情的になっている女性と一対一で話し合いをする面倒臭さと不毛ぶりを考えれば、暮林の判断を責められる者はそうはおるまい。

一礼した暮林は、いつになく素直に別館の方へと向かった。胸中では自身の不甲斐なさに対する憤りが未だに強いが、ともかく体力を回復させて、仕切り直しだと自らに言い聞かせながら。

そんな探偵の後ろ姿を見やってから、志田は踵を返した。彼には彼の仕事があるし、この一件に老人の知恵が必要な事柄などそうあるまいと自嘲気味に思いつつ。

彼らはこの時等しく知らない。明朝に事件が劇的な展開を迎えることを。

肉体的な疲労と気疲れから、暮林は床に入るなり直ぐに眠りの世界へと落ちた。一応用心にと護身用の拳銃を懐に忍ばせておいたが、「白き復讐者」が寝込みを襲うことはなく、彼は平穩無事に朝を迎えたのだ。

だが、起床の挨拶が一風変わっていた。暮林がまだ寝台の上で目蓋を閉じている時に、彼の部屋に駆け込んできた志田老人が開口一番にこう言うたのである。

「大変です！ 直ぐに来てください」

昨晚の落ち着き払った様子とは一変した、老執事の喘ぎ混じりの声に、暮林は眠りの世界から強制的に覚醒させられた。彼は寝起きが決して悪い男ではないのだが、午前六時前――軍隊の起床時刻より前に叩き起こされて、良い気分がするものではない。

「大変とは何が起きたのです？」

あくびを噛み殺しながら訊ねる暮林に、皺深い顔をした老人は肩を怒らせながら、「説明は後です。直ぐに着替えてきてください」

そのただならぬ様子に圧倒された暮林は、即座に身支度を調べた。朝飯前という言葉があるが、彼は洗顔も歯磨きもせず、不浄に行く暇すらなく、とにかく先導を切って進む志田の後に続いたのだ。

庭に出ると、志田は徐に上を向いて問題のものを指差す。

「あれです。ご覧ください」

洋風の庭園から見上げたそれは、古風な時計塔であった。ヴリタニヤ帝国首都――ロンドンイニウムにあるような立派なものではない。万事が西洲の影響を受けている感のある小村伯爵邸の雰囲気に沿っているとは言えるが、蔦に全体を覆われており、廃墟の一つと言われても納得がいきそうな面構えをしている。

そう言えば庭を歩き回った際に見かけたな――と暮林は思い出す。茅乃にその由来を訊ねたところ、これもまた移築されたものだと返答を得られた。何でも大がかりな仕掛けの時計が壊れて、瑞穂の職人は疎か、国外から技師を招いても手に負えず、さりとて打ち壊すのも惜しまれたので、そのままにされているのだそうだ。

記憶の引き出しを整理しつつ、暮林は示された方角を見つめる。

そこには人形が天辺から垂れ下がる縄により繋がれていた。全裸だ。身に纏うものは布きれ一枚どころか糸くず一本すら見受けられぬ。腰に縄を打たれた、実物大の素裸（すっぱだか）の女人形が、風に揺られてぶらぶらとしている。

何だこれは。とんでもない悪戯をする輩がいるものだ――と暮林はぼんやりと思う。俄に現出した奇天烈な事態に脳がついて行かず、日頃はきちんと機能する脳髓と双眸がその能力を持って余している。だが、見当違いの突っ込みも数瞬のうちに間違いだと気づく。

吊されているものは人形などではない。人だ。見覚えのある顔をしている。

まさか。まさか――

暮林の頬を、冷たい汗が伝う。背中にも玉粒の如き汗が噴き出し、つう――と瀧の如き勢いで流れ落ちる。沈黙を続ける彼に代わり、志田が答えを告げた。

「あれは暮林探偵、貴男の助手ではありませんか？」

凍り付いていた時が、不意に動き出した。暮林は最低まで下がっていた血圧を一気に倍にまで跳ね上げると、駆け出していた。

「帰蝶さん！」

誰にも追いつけない速さを以て時計塔の扉に取り付いた暮林は、そこに鍵がかけられているのを認めると、躊躇なく拳銃を抜き放ち、そこに一撃を加えた。錠前が瞬時に吹き飛ぶ。錆びて脆

くなっていたのと、銃手の怒りが銃撃の際に込められていた影響によるものだろう。

これまた錆び付いている扉を蹴飛ばすような勢いで開けた暮林は、階段を物凄い速度で駆け上がっていく。友情を題材にしたとある小説では「沈む夕陽の一〇倍も速く走った」との描写があるが、彼のそれも劣るものではなく、もし階段を一步でも踏み外せば、突入の勢いそのままに転落——大怪我をするか死へと至っていたに相違ない。

けれど幸いにして暮林は階段を踏み外すことはなく、最上階へと辿り着いた。そこには大分昔に動きを止めた歯車の群が、どこか恨めしそうな感じで構えていた。恐がりの人間であれば、いもしない幽霊の影を認め、悲鳴の一つもあげて立ち去っていたかも知れない場所だ。

されども、理不尽な仕打ちに対する怒りにより恐怖を鈍化させていた暮林は、元から幽霊など信じない性質もあり、物言わぬ歯車に一瞥をくれた後——彼は悪辣（あくらつ）な犯人が何らかの罠を仕掛け、自分と助手を一緒くたに葬り去るつもりなのではないか、と怒りに身を滾らせていても考えていた——に外へと続く道を探した。

窓が目につく。木枠を外した。途端に外部から風が吹き込んでくる。登山（ロッククライミング）の真似事をするには危なすぎる感が早くも漂う。手や足を滑らせたが最後、地上へと真逆様（まさかささま）に落下し、良くて骨折、悪ければそのままご臨終になりかねない。

けれど、暮林は我が身の危険を顧みない。窓が大人一人分通れるだけの大きさを持つことに感謝しつつ、顔を出し、壁の僅かな隙間に指を這わし、三角状の時計塔をよじ登っていく。

三角時計塔の頂点——尖塔部分に縄が縛り付けられていた。その不安定な場所に一日取り分の体重がかけられているのだと思うと、いつボキリと折れても不思議はないと、暮林は青くなる。帰蝶の生死は不明であるが、ともかく引き上げてやらねばと縄に手をかける。命綱を用意してこなかったことに後悔の念が今更過ぎるが、縄を持って来るまでに帰蝶が地面に叩きつけられたら、後悔では追いつかぬ事が起きると、覚悟を決めた。

帰蝶は暮林に比べれば小柄である。体重も直接訊ねたことはないが、五〇斤（キロ）はないだろう。しかし風に煽られながら、自身の転落死の危険と背中合わせの状態で楽に引き上げられるのかと言え、決してそうではない。焦らぬように、ゆっくりと確実にと自らに言い聞かせながら、彼は縄をたぐり寄せていく。

どうにかなるか——との期待感が、脳裏をチラリと過ぎる。絶望感と共に困難な事業に挑むより、たとえ僅かでも希望がある方が、作業効率を上げる。

だが、その天使の囁きは、悪魔の嘲笑でもあった。「此処まで来れば大丈夫」と呟いて淫楽殺人魔に殺害された物語の人物、その数の多さを思えば、暮林は安全が確實視される場所に帰蝶を連れ戻すまで、決して安心するべきではなかった。

果たして何が起きたのか？

帰蝶は死んでなどいなかった。ただ眠り薬を嗅がされて深い睡眠の世界に落ちていただけである。その彼女が俄に薬の効力薄れ、目を覚ましたのだ。

「此処は……何処……？」

薄目を開けて確かめる。ぼやけた視界の中に、更にぼやけた地面が映じる。

訳が判らない。自分の置かれている状況、その無意味な理不尽さに頭がついて行かない。

しかし頬を撫でる風が、布きれ一枚身につけていない我が身を撫で回す空気が、ぼんやりとした頭を現実世界へと立ち返らせた。

――私、宙づりにされている!?

瞬時に血の気が引いた。と同時に「キャーッ」という絹を引き裂くような悲鳴が口唇から迸った。不自由な中、身体をジタバタと暴れさせる。

さて困ったのは、割かし順調に進めていた救出作業を、救出するつもり的人物から突然妨害され、一緒に転落死しかねない状況に置かれた暮林である。

「帰蝶さん、落ち着き給え。暴れないでくれ！」

叩きつけるように言い、踏ん張る。それだけで大変な努力を必要としたのだが、そんな素振りには微塵も見せぬ。

「え、あ、先生――!？」

もつれゆく舌、胸中でグルグルと火焰車のように回転する死への恐怖、裸ん坊でいることへの羞恥心――それらが複雑に絡み合う中で、帰蝶は希望を見出したのだ。

気を喪う直前に助けを求めた人物が、自分を助けるために無茶な振舞に及んでいる――との現実を素早く認識した帰蝶は、暴れ回りたい衝動をどうにか抑えつけた。その努力は歩けない人間が無理に歩こうとする時にせねばならない努力、彼女が味わった苦痛はそれに似ていた。

一喝により帰蝶が正気を取り戻したのを確認した暮林は、救出作業を再開する。とにかく我が手の届くところに釣り上げねばと気合いを入れる。

だが、一度傾いた運を取り戻すのはやはり相当に難しいらしく、帰蝶の腰に撃たれていた縄、それが緩み始めてしまう。そのことに気づいた彼女の口から再び悲鳴が出かけるが、

「僕を信じて縄を掴め！ 自力で這い上がってくるんだ!!」

暮林が汗だくになりながらそう叫ぶと、帰蝶は残された気力を必死に振り絞り、縄を掴んでよじ登り始める。彼女にとり師匠が握るその縄は、哀れな地獄の囚人を助けるために、神様が降ろしてくれた蜘蛛の糸にも等しい存在だ。文字通りの頼みの綱なのだ。ここで手放しては生存の希望が一切立たれてしまう――とばかりに握るその手にも渾身の力がかかる。

彼らの行いを果たして神様も見守っていたのであろうか？ 運の傾きこそあったものの、完全に死へとそれが傾くことはなく、師匠と弟子の手は時計塔の尖塔部分で硬く、本当に硬く握り合わされたのである。

「先生！」

「絶対離すんじゃないぞ」

手の繋がりは暮林が帰蝶を引き寄せることにより、抱擁に姿を変えた。彼はうら若い乙女を全裸姿で抱き留めたのであるが、彼らにそれを気にする素振りも余裕もない。

「し、死んじゃうかと思いました……！」

大きく、そして硬い、頼もしい男の肩に手を回しながら、帰蝶は涙を流した。

「僕もだ」暮林が同意した。「心臓が潰れるかと思った」

その時になり、階下から志田老人以下の屋敷の使用人たちが駆けつけてきた。

「暮林探偵、大丈夫ですか!？」

「ああ、僕も彼女も無事さ」

そう答える暮林の声には艶がない。一晚寝ることにより回復した体力を、早朝から使い果たしたような感じがするのだから、無理もない。

「ご無事で何よりです」

「僕のことよりも彼女だ。何か着る物を頼む」暮林はしっかりと抱き留めている帰蝶の身体、その柔らかさとかぐわしさを今更ながら意識しつつ注文した。

「畏まりました」

使用人を代表して、茅乃が駆けていく。そうした階下での遣り取りを声から察しつつ、暮林は深い安堵のため息をついた。尖塔部分から窓まで降りるという困難がまだ残されているが、それまでの労苦と比べれば何ほどのこともない。

そんな師匠に身を寄せながら、帰蝶は今更ながら頬がカッと熱くなるのを察した。

――視られたのかな？ そんな余裕も暇もないけれども……。

こちらの懸念も安堵から来る余裕には違いなかった。ともあれ暮林による帰蝶救出作戦は無事に遂行され、朝の早くから時計塔の尖塔部分、そこで裸で抱き合う男女、という奇妙な光景が現出したのだった。

17

落ち着いてから事情聴取――ではなく聴き取り調査を行うことにした。何しろ宙づりにされて死にかけた直後に話を聴いても要領を得る訳がないからだ。寝台の上に寝かされて眼を渦潮のようにしている帰蝶の傍に暮林は控え、回復の時を待った。

寝かされている愛弟子の、眼を閉じた姿、それを見やりながら、暮林は「白き復讐者」の陰険なやり口に改めて憤りを感じざるを得ない。

――それにしても何という奴なのだろう。ひと思いに殺したりせず、死の恐怖を強く感じるような真似をするとは！

あっさりとして殺されて生首を玄関先に放り捨てられていた方が良かったのかと言えば、そんな道理はない。もしかような蛮行に及ばれていたら、暮林は犯人を許すことが出来ず、地の果てまで追い詰め、自らの手で裁きを下していただろう。御上の手を患わせる必要などない。いや自らの手でくびり殺さねば納得が出来ない。

仮定の話論じてても詮無きことだが、自制の箍が外れるか否かの事柄なので、暮林は真剣に考えざるを得ない。同時に自らの無力さを悟る。何があろうとも目を離すべきではなかったのだ。想定のがんが身に染みた。

昼頃になり、ようやく帰蝶が気分を直し、ぼつりぼつりと語り始めたところによれば、里中の「宝物殿」を川嶋に誘われて観に行った時に、「白き復讐者」の襲撃を受けた、という。目映い輝きを放つ金銀財宝の前で、三人が毒霧を吸わされて倒れ伏したのだとか。

「私は、あの時もう駄目かと思いました。毒霧を吸い込んだ途端に気が遠くなり、直ぐに倒れてしまいましたので」

恐ろしい情景を無理に思い出す帰蝶の瞳には怯えが宿っており、暮林に訊かれたのでなければ、二日三日と言わず、一生涯その事に対し沈黙を貫きそうだった。

「これは僕の推測だが」暮林はそう前置きをして続けた。「それは毒霧じゃない。毒霧であれば一息分でも肺に取り込めば、たちまち血反吐を吐いて死ぬしかないからね」

「それでは……？」

「単なる眠り瓦斯だよ」暮林は断定的に言った。「川嶋さんがいきなり毒霧だなんて言い出すから、その気になってしまったんだろう」

誰しも混乱を避けられない時に、それに拍車をかけるような発言をされたら、恐慌状態になり、冷静に判断できる能力を喪う。地震が起きている時に「火事」がいつの間にやら「暴力主義者（テロリスト）による放火」になっているように、後から見ればなぜこのような事態に、と首を傾げるような話は案外多いのである。

「成程。我ながら冷静さが足りませんでした」

「いきなり閉じ込められた上に瓦斯など撒き散らされたら、誰しもそうなるさ」

慰めるように言う暮林。彼とても「冷静さに欠ける振舞」をした直後なのだから、助手兼弟子の醜態を責める気にはなれない。

「冷静さと言えば」帰蝶は時計塔での救出劇を思い出しながら言った。「先生もあの時はかなり慌てていましたね」

「当然だろう」暮林は否定しなかった。「寝起きにいきなり弟子が宙づりにされている光景を見せつけられれば、大抵の師匠は慌てるさ」

「ですね……」帰蝶は微苦笑した。空中ブランコを名物にした雑伎団(サーカス)ならば、そんな事故の一つも起きるかも知れないが、さすがに練習中ならば命綱かそれに準ずるもの――安全網を仕掛け、団員の身の安全を確保するだろう。自分のように真裸（まっぱだか）でやるわけでもなかるうに――

そこまで考えて、帰蝶は俄に赤面した。あの時はとにかく夢中で師匠にしがみついたが、嫁入り前の娘が全裸で男性に抱きつくなど、何とも恥ずかしい。

女弟子の頬に朱が差したのを認めた暮林は、その理由を察し、彼もまた同様の反応をしてしまう。咄嗟で夢中になっていたことだし、緊急避難的な意味が強かったから、「裸を視た」「裸を視られた」との論議をすること自体が莫迦莫迦しい限りなのだが、当人たちは真剣だった。

利害関係が一切ない者らからすれば、阿呆らしい事で争っている勢力――例えば宗教上の聖地を巡って長年戦争を続けているような――を眼にした時並の気分を抱くような話だろう。だが、互いに一歩踏み込めば「そういう間柄」になるかも知れない甘酸っぱさがあるのだから、仕方がなかった。

「あー」沈黙に絶えられなくなった暮林が、先に口を開いた。

「まあ、あれだね。あの状況で服まで用意して助けるわけには行かなかったからね」

莫迦な言い訳である。全裸体を視たことへの詫びにもなっていない。いや、そもそも暮林は放置されていたら転落死が確実視された相手を命懸けで助けたのだから、その過程で生じた問題に責任を負う必要など、一切ないのだが。

「そこは存じております」帰蝶の口調にも責めの響きはない。いや、むしろ感謝していた。師匠の言いつけに背き、勝手に出かけた先で敵の罠に落ちた。意識を喪う寸前に、それでも師匠に意識の中で縋り付いたが、まさか現実には彼に助けられるとは思わなかった。裸を視られた事やその姿で抱きすくめられた事など、大した問題ではない。

「それで……どうでした？」

「どうって……何が？」

「私の――」

「皆まで言うな」暮林は帰蝶の言葉を、片手を挙げて制した。

「いろいろと面倒になる。行き先がなくなったとか言うのなら、僕が責任を持って引き取るが、現状では雇い主が部下に性的嫌がらせ（セクシャルハラスメント）をする最低の職場（ブラック・オフィス）みたいになるから」

職業倫理を持ち出して沈黙を強要する暮林に、帰蝶は彼なりの不器用さを視た。彼から何かしらの好意を向けられているのは、弟子入り以来察しているが、それを明確な形で言葉にされたことはない（いつも隣にいる相手が自分に対し愛情を抱いている、との考えは、その人物が精神を病んでいない限り、正解なのだ）。

「私は別にあれを性的嫌がらせとは感じておりませんが」帰蝶は苦笑いをした。と同時に薄手の寝間着に包まれている、自身の胸部を抱いた。

「何なら別の機会にもう一度確認します？ 責任を取ってくださるのであれば、触感や香りまで確かめられても構いませんが」

「ば――」

「莫迦なこと」と暮林は言いかけて言い切れなかった。自分が彼女に対し好意を抱いているのは、疑う余地がない。職業柄他人の行状について懐疑的な眼差しを向けることの多い彼であるが、自身の好き嫌いに基づいた心理反応は偽りようがない。

であれば、自分は彼女をどうしたいのか？ あるいは何処まで二人で行きたいのか？

常識的な判断に基づけば、解答は一つしかない。

「何でしたら、今すぐにでも試しますか？」

生命の危機、それを強く感じさせられた帰蝶は、いつになく大胆になっていた。どこか捨て鉢な勇気が彼女を支えていた。

俗に「吊り橋効果」と呼ばれるものがある。それは危機的状況に置かれた男女が、そこを二人の努力によりくぐり抜けたら、奇妙な連帯感が生まれ、その感情がいつの間にやら恋愛に変化していた――という話だ。

帰蝶の場合、暮林に対し初めから好感がある。憧れの人気作家だからだ。そして初対面のその日のうちに海賊騒ぎに出くわし、共に危険を突破した。いわゆる戦友意識が既にある。そんな関係だから、此度の出来事を契機に、「一歩先に」進んでも構わなかった。

「君ねえ……」

敢えて呆れ混じりな風を装うが、視線は実のところある部分に集中している。文字通り目が離せない。寝間着の内側にある膨らみが注視の対象だ。あの部分の柔らかさとかぐわしさを、彼は

服越しであるが体感している。

暮林は勿論健全な男性である。独身を貫いてきたが、関係を結んだ女性は、玄人素人問わずに複数人いる。だが、完全に自分好みの――まるで神様が特別奉仕（スペシャル・サービス）してくれたかのようにど真ん中（ストライク）な娘さんが目の前に薄着でいて、最終的な責任を取るのなら、今すぐその身体の具合を確かめても良いと言われれば、冷静な判断など出来ない。

「責任を取りたくないと言っているのであれば」帰蝶の眼に挑発的な輝きが宿る。

「最初の一回だけ特別ご奉仕で結構です」

「特別？」暮林は喉を呑み鳴らしている。彼もまた危機的状況をくぐり抜け、無事に生還できたという反動からか、その種の行為を肉体が求めている。

「はい。どうぞご自由に。今回だけ……」

そう言うと帰蝶は眼を閉じた。起こしていた身を寝台に沈め、誘いをかける。

「君ねえ……男相手にこんな真似したら……」

「私は五分間だけ眠ります」帰蝶は駄目押しするように告げた。「その間、何があろうとも関知するところではありません」

五分間！

絶妙な数字である。興味のある部分を一通り試す時間がある。

気に入らなければ早々に手を引き、手が止まらなければ延長――最終的な責任を取ることにすれば良い。

そして暮林は、早い段階で「引き取り手云々」の話を持ち出した。その気も覚悟もあるのだ。あと必要なのは、一歩踏み出すための「決意」だけであろう。

――どうする？ やるか？

暮林は我が身の両手を蟹（かに）の脚のように蠢かせた。女にここまで言わせておいて何もしないのは、恥を搔かせることになるのではないか、と感じた。

もしこれが行きずりの相手で、隣室に強面の「自称旦那」が控えていそうな雰囲気であれば、駆け足で逃げ出すのだが、眼前にいる少女と自分は知らぬ仲ではない。それどころか、共に死線を越えてきた戦友なのだ。その愛すべき存在が恥も外聞もかなぐり捨てて、自分と一線を越えようとしている。それが判っていて尚、何もしないのであれば、誕生日に手渡しされた贈物を、その場で突き返すのと同じぐらい失礼なのでは、とも思う。

――ええい、ままよ！

手の震えを押さえつけ、ある方向へと進むように調整する。そう書くとまるで機械腕(ロボットアーム)を遠隔操作しているかのようだが、自分の手がまるで他人の手のように感じられるような状態だから、やむを得ない。

唇から発せられる艶めかしい息づかいまでが、誘いをかけているように感じられた。あと僅かで本日二度目の「触れ合い」が始まろうかという時――

「大変です！」

扉を叩きもせず、室内に乱入してきたのは、またしても志田老人である。彼は息せき切らしつつ、叩きつけるように怒鳴ったのだ。

音と声に驚いて、暮林は手をびくりと振るわせて引いた。帰蝶も顔を引き攣らせて眼を開けた。一体何事かと、両者は気恥ずかしさを誤魔化す意も兼ねて、闖入者の方を視る。

「どうしたのです、今度は？」惜しいことをしたかな——と思いながら、暮林は訊ねた。

「例の『白き復讐者』が奥様の部屋の中に木箱を置いていきました」

「何ですって、木箱？」

爆発物の類か——と想像を膨らませた。だがそれも瞬時に消え去る。向こうがこちらをただ殺せば良いだけならば、夜中に屋敷の各所に放火でもすれば済む話だからだ。爆弾を仕掛けるにしても、邸内の目立たない場所に設置するはずで、留美子夫人の部屋の中にと目立つ場所に置く必要などないだろう。

「なぜ『白き復讐者』からだ直ぐに判ったのです？」次に訊ねたのは帰蝶だ。彼女はわざと乱した胸元を慌てて直している。あと少しで先生が触れてくれそうだったのに——との悔しさを内心で噛み締めてもいるが。

「箱に血で名前が書いてありましたから」

「箱に？」例の血文字手紙の件は、外部に漏れていない。暮林はそれを知っている。何しろ家の問題を外の世界——官憲に触れさせるのを病的に嫌がる人種が、この屋敷の主を務めているのだから。つまりは模倣犯——面白半分に悪戯を仕掛けた、全く無関係かつ無責任な輩——の仕業ではない。

「ともかく来てください」

この種の言葉をかけられるのは、今日二度目だ。嫌な予感しかしない。

そんな思いが暮林の表情に滲んでいたのだろうか？

「先生、私もご一緒します」

無理に身を起こした帰蝶が、そう申し出ていた。体調が決して万全の状態ではないのが、身体の動きから判った。先程の意識した気分の高揚も響いているのかも知れない。

「無理しないで此処に——」

そう言いかけて、暮林はやめた。昨日目を離した間に何が起きたのかを思い出したのだ。多少無理をさせても今回は同行させる必要を認めた。

「仕方ない。直ぐに着替えてくるんだ」

「はい」帰蝶は頷いた。そんな彼女の動きを見てから、暮林は志田の後に続いた。

木箱の数は正確には五つを数えた。いずれも白く、赤い紐で閉じられている。箱の正面に黒に近い赤色で「白き復讐者より」と記されているのが、何よりの特徴だと言えた。若い娘を丸裸にした上で時計塔の尖塔部分にぶら下げるといふ非常識な振舞に及んだ「白き復讐者」に対し、屋敷に詰めている全員が敵愾心（てきがいしん）を通り越した不気味さを感じているので、各人の眼にはその箱は何とも奇怪な存在に見えた。

「一体中には何が納められているのでしょうか？」

一夜明けて病的興奮（ヒステリー）状態から回復した留美子夫人が、不安そうな面持ちで訊ねた。彼女の証言によれば、気分転換にと庭に出ていた時にそれは置かれたらしい。

「……………」

情緒過多な女性の常として、一度火が点くと手がつけられない傾向が、留美子夫人にもある。暮林としてはまた騒がれたら叶わないと感じている。軍隊の指揮官は砲煙弾雨が行き交う中で冷静な判断を下せるのだが、彼は集中力を何より重視する作家でもあるので、周囲の人間が無意味に騒ぐのを嫌う。できることなら静かでありたい。とは言え、まさか屋敷の主人を邪魔だからと追い出すわけにもゆかぬ。依頼者は形式上は川嶋なのだが、この屋敷の権限は彼女に集中しているのだ。

「判りません」暮林は断定を避けた。今は情報が不足している。示唆（ヒント）になるようなものもないのに、適当な事は言えない。まさか裏を搔いて爆発物——ではないと思うのだが。

爆発物であった時の備えは、一応為されている。暮林は室内の扉と全ての窓をどれも開け放しにさせた。何か爆発した時に、爆風が内に籠ると被害が酷くなる。窓や扉を開けておくと、衝撃波がそこから逃げるので、威力が軽減されるのだ。

危険物と見做された木箱に正面から向き合っているのは、そうした次第で、暮林のみである。他の面子は、帰蝶ですら廊下の方に出ている。万が一ガードカンと来た時に対する備えである。ただし、皆が好奇心を抑えかねたようで、室内の様子を離れたところで視ている。黒光りする洋卓の上に置かれた木箱の群に、全員が刺すような視線を向けている。

「開けてみます」暮林が皆に確認を取るように宣言した。「全てはそれからです」

固唾を呑む音が誰かから響いた。いやもしかしたら、全員が同じ動作をしたのかも知れぬ。御伽話の中にある、蓋を開けた瞬間に白い煙が吹き出し、それを浴びた者がたちまち総白髪の老人になる様子を想起した者もいたかも知れぬ。

暮林は木箱の紐に手をかけた。思いの外固く結ばれている。まるで外界からの干渉、その全てを拒否しているかのよう。ビリビリと電流のように悪寒が広がる。けれど意を決し、指先に集中力の全てを込めてほどいた。次いで蓋に手をかける。この時点で嫌な予感しかしないのだが、可能性についての議論——箱を開けるまで猫が生きている未来と信じている未来を論じられる、

という有名な話――をするために彼はこの場にいるのではない。現実の問題に立ち向かわなければならぬし、その解決法を定義せねばならぬ。

唾を呑み鳴らしながら、暮林は白木箱の蓋を開けた。その瞬間、封じ込められていた瘴気がいちどきに噴き出した。彼はおぞましい悪霊の群が飛び出すのを、独特の鼻の付く臭気と共に認めた。欧洋州の神話で語られている禁断の箱が目の前にあるのだ。常人ならばたちまち腰を抜かすか発狂していただろう。だが、初めから覚悟を固めていたためだろうか、暮林は蓋を外した瞬間に目に飛び込んできた情景から、精神の均衡を崩すほどの衝撃は受けずに済んだ。

箱の中には「川嶋」がいた。

これは嘘でも大袈裟な表現でもない。欧洋州の伝説や絵本の中に出てくる魔法使いが、彼の身体を縮めた訳でもない。単純に箱が大きかったのでもない。彼は木箱の中に収まる大きさにされていたのだ。飾り気のない表現を用いるのであれば、そこにいたのは彼の生首であった。生気のない顔に恨めしそうな、光の失せた双眸がある。それが夏の暑さに当てられ、異臭を放っていたのである。

「先生、何が納められていたのです？」

暮林が箱を開けても爆発する様子がないことから、帰蝶が廊下から歩み出てきた。師匠のただならぬ様子から何事が起きたのかと心配している。

沈黙したまま、箱の内容物を見つめていた暮林は、帰蝶のその声を聴いて我に返った。と同時にこんな光景を婦女子に見せるわけには行かないとの常識的な見解が彼の中を支配した。錆び付いたような我が身を叱責しつつ、近づこうとする彼女を慌てて制止する。

「来るな！ 視ては駄目だ！」

だが、その注意は少しばかり遅かった。箱の中を好奇心に誘われるまま覗き込んだ帰蝶は、恐ろしい光景を見て驚き、尻餅をついた。「キャーッ」という悲鳴が唇から迸る。暮林の危惧した通りの反応。歯が何度かカチカチと噛み鳴らされ、やがてその音が消えると、彼女はバタンと卒倒してしまった。昨日は薬で眠らされ、その翌日には視的衝撃に耐えられず、彼女は再び気を喪ったのである。

異変を察した他の面々も部屋の中に駆け込んできた。そして暫く肉を食いたくなくなるような情景に出くわし、絶句した。まさか遙か昔の刑罰――晒し首を思わせるものが箱の中に詰められていようとは、誰が想像できたろうか？

「暮林探偵、となると他の箱も――」志田が辛うじて正気を保ちつつ恐ろしい想像に触れる。暮林も皆まで言われずとも気づいていることだった。

促されるかのように、暮林は他の箱の紐もほどいた。すると彼らの想像通り、見るも無惨な川嶋の一部が納められていた。右手・左手・右足・左足――それらがまるで彫刻のように存在した。いっそ全てが蠟人形（ろうにんぎょう）だったと言えれば気が楽なのだろうが、それらには細かな皺や産毛（うぶげ）があり、作り物にそんな芸当が出来ようもない。ましてや鮮やかな切り口に浮かぶ固まった血の跡が毒々しすぎた。

気を喪った者を除く全員が、「白き復讐者」がいよいよ恐ろしげな牙を剥いたことを認めた。今までなら単なる嫌がらせで済んでいたのに、川嶋がかくも無残な死様を晒し、世に言う「バラバラ殺人」が実際に起きた以上、もはや官憲の介入は避けられぬ。

皆が死にも似た沈黙を続ける最中、天井から哄笑が響いてきた。

「どうだい、皆さん。俺の手になる芸術作品は？」

聞き覚えのある声と共に投げつけられた悪意。間違いない。「白き復讐者」だ。彼は分断された死体を視て衝撃を覚えている面々を天井裏から透き見していたのである。

「貴様！ 何処にいる。出てこい！」

額に青筋を立てた志田老人が吼えた。彼は箱の中を確認した後に帰蝶を介抱していた暮林に代わり、残虐な殺人者に対し怒りを表明したのだ。

「うふふふふ……」

しかし、「白き復讐者」はその問いかけに答えない。彼は怒りに狂う者の神経を逆撫するような、薄気味悪い声と共に笑うだけである。

「芸術作品とは如何なる意味か？」帰蝶の身体を抱えている暮林が、天井を睨み付けながら問いかけた。かつて読んだ西洲の犯罪史にまつわる話を、彼はその最中に思い出している。ある種の美的感覚を備えた連続殺人者は、必ず自分が殺人を犯したという証拠を残す。今回のように四肢を切断したり、内臓の一部を抜き出して警察に脅迫文書と共にそれを送りつけたりするのだ。

「君の聴いた通りさ、間抜けな探偵さん」天井裏に潜む殺人者はいよいよ快活になる。

「俺は芸術家だった川嶋くんに敬意を表して、『彼自身を芸術作品にしてあげた』のだよ。よく視てくれ給え。眼にする者を一瞬絶句させるだけの迫力を備えているではないか。これを視て平静でいられる者など、探してもそうはおるまい。人々の耳目を一瞬でも集めるのが芸術家としての本懐ならば、彼は長らくその名前が語り継がれるだろうぜ。何しろ自らを一個の作品に仕立てた輩など何処の国にいるだろうか？」

言い終えてから響く「ワハハハハ……！」という悪魔の嘲笑。それは耳にした者全てに生贄を前にして舌なめずりをする邪神だか魔王の姿を想起させた。

「では、これは、本物の川嶋さん……？」ガクガクと脚を震わせながら、留美子夫人が問いかける。彼女も帰蝶同様に卒倒しそうだ。無理もない。不義の関係とは言え恋人の無残極まりない惨死体を見せつけられて、平気でいられる女がいようか。

「俺の言うことが嘘だと思ふのなら、川嶋くんの生首に接吻でもするがいいぜ。懐かしい味がするだろう。それとも腐った肉の味かな？ まあいい。触れば判るはずだぜ。かつて睦み合いの中で絡め合った指先、背中に回った脚の感触を、まさか君は忘れてはおるまいな？ 君もそこまで薄情ではあるまい」

再び「ワハハハハ……！」という嘲弄の笑い。

何ということであろう。「白き復讐者」は公然の秘密で、誰しものが口にするのを裂けていた不義密通の際の情景を、そのまま口にしたのである。夫人に対する辱めとしては、彼女自身を草むらにでも連れ込んで陵辱（りょうじょく）するよりも、何倍も効果的であろう。

百万語を尽くした罵詈雑言よりも強烈な言葉をぶつけられた留美子夫人は、顔を鬼のように赤

くしたかと思うと、次に死人のように青ざめ、それを信号機のように幾度か繰り返した後、遂に力尽きて倒れ伏してしまった。

「奥様！」志田老人が慌てて駆け寄る。彼は女主人の身体を抱き上げると、天井を睨んで怒鳴りつけた。「貴様、何が目的なのだ！」

「俺は裏切行為を決して許さない質なのだ。留美子が他の男と関係する度にそいつを殺してやると心に決めている。俺は心底気狂いなのだ。納得のいかないことであれば是正せずにはおれない。俺を止められると思うのであれば、止めてみたまえ。まあ無駄な努力に終わると思うがね。俺は影のように忍び込み、姿を消すことが出来る。判るかい？ 君たちは空に浮かぶ雲を掴むような真似をしているのさ」

「ふざけるな！」怒った志田が、留美子夫人を茅乃に預け、その辺に落ちていたもの――陶器製の灰皿を天井に向かい投げつけた。ドシンという音と共に天井とそこに吊られている装飾付きの電灯を揺らした。

「そんなことをしても無駄さ。俺は留美子が悔い改めない限り、何度でも現れるぞ。不幸のどん底に突き落としてやるぞ。それが俺の愛情表現なのさ」

三度目の嘲笑と共に、何かが這い回る音がする。どうやら言いたいことを言った彼の脅迫者は退散を決めたようだ。気配と笑い声が急速に遠ざかっていく。

「直ぐに追いかけて――」

力む老人を暮林が制した。「無駄です。奴はこの屋敷の構造を隅々まで把握しているようです。下手に追いかけると逆に危険かと思われます」

「しかし……！」

「それよりも警察に連絡すべきです」暮林は川嶋だったもの――今は血塗られた肉塊と化した物体に一瞥をくれてから続けた。「ここまで悪行を重ねられて尚、官憲の介入を拒むという選択肢は、もはや通用しないのでは？」

老執事は息を呑んだ。日頃は女主人の意を汲んで、世間の常識に反するような振舞を続けてきた彼だが、さすがにここに来て暮林の意見の正しさを認めたのである。

「……やむを得ませんな」

「古府警察には僕の知り合いがいます。彼に来て貰いましょう」

顔の広さを改めて口にする暮林であったが、その声に力はない。探偵の役割は推理小説であれば謎解き一択なのだが、本来なら最初の殺人が起きる前に犯罪者を捕まえるべきなのだ。未然に犯罪を防げなかったのは全て彼の落ち度だ。それに立て続けに衝撃を受けた帰蝶を、どう回復させるべきなのか？ 彼には今のところ見当がつかなかった。

連絡を受けた古府警察が小村伯爵邸に辿り着いたのは、夕刻頃である。それは凶悪犯に対する備えとして、三〇人ばかりを現場指揮官が連れてきたからで、準備期間を必要としたのである。そのかいあってか彼らはいずれも屈強かつ精悍（せいかん）な男たちばかりだ。いずれも不適な

犯罪者と正面から対しても負ける気遣いのない者たちだ。

捜査現場の指揮を執るのは、現地の犯罪者たちからは鬼のように恐れられている淀沼留次郎（よどぬまとめじろう）警部である。彼は八の字髭を蓄えた四〇過ぎの中年男で、身体には年齢に相応しい貫禄がついているが、学生時代から銃剣道で心身を鍛えているため、それは肥満した体躯というよりも押し出しの強さを加味するもの、との印象を眼にする者に与えた。

淀沼は名前が示す通り次男で、彼の兄はこの辺りを管轄下に置く方面部長である。早い話、代々を警察一家として過ごしてきた家系なのだ。そして大学時代を皇都で過ごし、その後も暫くそこで勤務した。暮林と淀沼が縁を結んだのは、その関係による。淀沼が同じ大学の六期先輩なのだった。

そうした次第で、暮林と淀沼は同じ釜の飯を喰ったわけではないが、卒業生（OB）かつ現役警察官として、淀沼が暮林が籍を置いていた推理小説（ミステリー）研究会にちょくちょく顔を出しており、彼らは小説で行われている奇想天外な詐術（トリック）は果たして可能なのかと、幾度か論争をしたことがある。互いに親しい先輩後輩という意識がある。

「久し振りだな、暮林」剛毛の生えた逞しい手で、淀沼は暮林の肩を叩いた。その野性味溢れる顔には、懐かしい顔と再会した悦びと前代未聞の凶悪犯罪者と向き合わなければならない、という苦悩が不均衡に刻まれていた。

「先輩も壮健そうで何よりです」暮林は微苦笑した。袖振り合うも多生の縁と俗に言うが、学生時代に親しく接していた先輩と事件現場で刑事と探偵という立場で再会するとは思ってもよらず、彼の気分も複雑だ。

「お前は小説家として成功したそうだな」淀沼は遠い昔を懐かしむ風に言った。「新刊が出る度に俺も買っているよ」

「有り難うございます」暮林は一礼した。一応付け加える。「僕は探偵兼小説家をしていると考えているんですがね」

「お前らしいな」淀沼は相好を崩した。「そのどこか他人に喧嘩を売っているような物言いは昔から変わらん。それに一一嘘を言っているわけでもないか」

「ええ」暮林は頷いた。「先輩のお手を煩わせることになりましたが」

「ううむ」淀沼は唸った。死体が送りつけられた場所一一今は鑑識が詰めかけている留美子夫人の自室に、彼は視線を投げた。

「バラバラ殺人というものは、前例皆無ではない。欧洋州の犯罪者の中には、そればかりを繰り返す殺人淫楽者が何人もいる。だが、瑞穂では殺人は怨恨の線で行われる事が多いから、こういう無意味に残酷な真似に及ぶ者は酷く少ない。縦しんば起きたとしても、それは人の数が多い都市部での話だ。こんな田舎でそんな凶行に及んだ奴など、ついぞ聴いたことがないな」

「そこは国民性とか民族性ですか」

米食を昔から続けてきた瑞穂人は、近代民主主義国家を形成して尚、どこかに農耕民族としての気風を残している。だからいわゆる「大虐殺」をした例などない。宗教についても寛容で、他民族の宗教を否定し、改宗を強制したことなどない（宗教戦争が理由で一都市が丸ごと消滅させられた事例は数多い）。

それに対し西洲人——列強の一角を担うブリタニヤやガリヤの方はと言えば、ヤフリカ大陸の先住民を奴隷として酷使し、自分たちの宗教に鞍替えせぬ者たちを、片端から殺害してきた。その容赦のなさは狩猟民族——肉食を続けてきた者らしい徹底さを持ち、向こうに大犯罪者がちらほら出てくるのも、そのせいかもしれない。暮林の言うこともそれらを根拠にしたものである。

「何にせよ、こんなふざけた真似をした奴を許すわけにはいかん」淀沼は犯罪者に対する怒りを込めて言った。「必ずお縄にしてやる。御上の裁きを受けさせる」

「頼みます」

「ところで暮林」淀沼は探るように言う。「犯人の目星はつかないのか？ お前なら現役の推理小説家だし、そういうのは得意ではないか」

その問いかけに、暮林は返答を一瞬躊躇した。証拠もそれなりに揃えているが、荒唐無稽（こうとうむけい）な部分があるし、果たして口にして良いものか迷いがあつた。

「何かあるのだな」淀沼は重ねて訊ねた。「どんなくだらないうちでも構わない。言ってくれ。このような事件は、何が解決の糸口になるのか判らない部分があるのだ」

事件を未然に防げず、痛ましい犠牲者を出した罪悪感が胸のうちにある暮林は、他人の眼が他に向いているのを確認すると、自分が探り出した事柄をぼつぼつと語り始めた。

それを聴いているうちに、淀沼の顔つきが俄に変わりだした。

「何……本当なのか、それは？」

「冗談でこんな話はしませんよ」暮林は眼を伏せた。「残念ながら僕の行き着いた結論はそれです。どんな御伽話にも出てこない、痴人が書いた夢物語のような話なのです。否定されても仕方がないですが——」

「待て、一応辻褄は合うぞ。それにあの御仁が何の音沙汰もなく行方不明と来ているのも、頷けるしな」

「仮にそうだとしても、彼が今どこにいるのかは僕には判りません。結局のところ、先輩を頼るほかないわけでした」

「人捜しなら俺の方がある意味本職だな。近隣の青年団を駆り出して山狩りでも何でもさせれば、尻尾ぐらいは掴めるかも知れない」淀沼は顎を撫でた。

「参考になったのなら幸いです」

「任せておけ。跡は俺が始末をつけてやる」暮林の肩を、淀沼は再び叩いた。

駆け出して、電話口の方へ向かう先輩刑事の後ろ姿を見やりながら、暮林はこれで事件解決に一步踏み出したことになるのだろうか、と微かな寂しさと共に思う。官憲の介入を招いた以上は、後はもう彼らに襷（たすき）を委ねるべきなのだ。彼は自分の不甲斐なさを叱るような気分で、そう結論づけた。

だが、この時の暮林は知らない。密談じみた遣り取りを耳にしている者がおり、それゆえに新たな犠牲者が生じることを。事件は、まだ解決には向かわず、流転を迎えることになる。

立て続けの衝撃を受けた帰蝶は、寝込んでいた。暑苦しくなる時期に、夏バテになり床につく者は珍しくないが、殺人未遂に斬殺死体との対面と来ては、どれだけ気丈な者とても人事不省に陥り、倒れてしまうのが普通だろう。

暮林は、そんな不憫な女弟子の看病をしていた。額に乗せてやる氷嚢（ひょうのう）を準備し、食欲がなさそうな彼女を気遣い、摺り下ろした林檎（りんご）を洋匙で口許にまで運んでやる。その様子は、親子というには年齢が近く、少しばかり年の離れた兄が、妹の世話をしているように見えた。

「申し訳、ありません……」三〇分ほどかけてようやく茶碗一杯分の林檎を食べ終えた帰蝶が、熱に赤らんだ顔で詫びた。

「仕方がないさ。僕も犯人がまさかあんな非常識な奴だとは想像もしていなかったんだからね」暮林は茶碗と洋匙（スプーン）を片付けながら言った。「君は難しいことは考えないで、今は養生しなさい。どんな職業に就いても、身体が資本なのは変わりがないのだからね」

「はい……」

しおらしげに答える帰蝶に、暮林は痛ましさを感じた。あの段階では連れて行かない方がまずい気がしたのだが、結果的にはより打ちのめす感じになってしまった。いや、もう少し制止するのが早ければ、こんな状態を現出させることもなかったのか。

「大学時代の先輩がここで刑事をされていてね」暮林は帰蝶を安心させようと、万全の布陣を敷いた事を告げる。「付近の青年団を駆り出して山狩りをするという気炎を吐いておられたよ。恐らく犯人はもう捕まるだろう」

「犯人に目星が？」

「うん。君には言っていなかったが、僕は小村家の墓場を暴いたのだ。そこに真相が眠っていた。恐ろしい悪鬼がそこで生まれたのさ」

「悪鬼――」

抽象的な物言いを、帰蝶は理解できる状態にはない。ただ、師匠が事件の核心部分に触れてきたのを、言葉の端々や態度から察した。

「うん。だがもう追い詰められているはずだ。なぜなら――」

暮林が皆まで言いかけた時、廊下から騒がしい声が響いてきた。人が行き交う激しい足音もし、俄に喧噪が辺りを包んだ。

「また何か起きたのでは？」

「まさか。屋根裏から縁の下まで見張がいるような状況だよ」

二人が顔を見合わせていると、扉が乱打された。何かと暮林が応じて扉を開けると、そこには淀沼が連れてきた警察官の一人が立っていた。

「暮林さん、淀沼警部が直ぐにお越しになるようにと」

「一体どうしたのですか？」

「屋敷の使用人の一人が、部屋の中で死んでいるのです」

「え、新たな殺人が？」

「今のところ判りません」警官は首を横に振る。

話だけでは訳が判らない。とにかく現場に向かう必要がある。そう考えた暮林は、「直ぐに行きます」と応じた。こんな警戒嚴重な時に、影の如く屋敷の中を徘徊し、標的に忍び寄り鮮やかに仕留めるなど、魔法使いさながらの離れ業だ。

「先生……！」

「君は此処に残り給え。女性の美容に良くない情景が、また出来ていそうだからね」

下手な冗談を自覚していると、無理な笑みにも苦味が残る。だが、また心が壊れた画家が、画布（キャンパス）に書き殴ったような情景を心身を参らせた少女に見せるのは忍びがたかった。

「判りました」力なく帰蝶は頷いた。無理を言う気力もないのだった。

「行きましょうか」暮林は若い警官を促して、事件現場へと向かう。

殺人あるいはそれに類した事故死亡現場とは、血生臭いものだとの印象がある。その考えは本職――捜査――課に籍を置く刑事や、悪鬼羅刹の如き連続殺人鬼と相對する探偵ほど根強いと思われる。何しろ彼らは職業柄血みどろの死骸や無残な傷口などを見慣れているから、鼻をつく死骸の臭気や夜な夜な夢に浮かんでくる恐ろしげな死顔を、日常の些事をしている最中にも忘れかねるのである（戦場帰りの兵士が、前線で心的障害を負い、突然暴れ出すのと風情が似ている）。

警官の先導を受けて室内に足を踏み入れた暮林は、沈痛な面持ちでいる淀沼を見つけると、彼に声をかけた。また殺人が起きたのですか？

「それがどうも様子がおかしい」淀沼はその屈強な外見に似合わぬ声で応じた。

「様子がおかしい？」暮林は鸚鵡返しをして、問題の死体に視線を投げた。

床には茅乃が仰向けの姿勢で倒れていた。薄桃色の唇の端から血の筋が垂れているのが見える。顔色は酷く青ざめており、眼は閉じられている。その近くには床に落ちた際に割れ砕けたとおぼしき硝子容器（ガラスコップ）がある。その様から彼女が毒を飲んで死んだのが察せられた。

「毒殺されたように見えますが」

「俺も最初はそう考えた。ところが遺書があるんだ」淀沼は懐に収めていた手紙を取り出した。暮林に手渡す。

訝しみながら「遺書」を受け取った暮林は、その内容を一読した。そこには一連の事件の犯人は自分である旨が淡々と記されていた。誰か共犯者がいなければ無理だと思われる部分に関しては、盗み貯めた金を用いて雇った外部の人間を用いたと説明している。そして一連の犯罪の動機は、だらしのない生活を続ける留美子夫人に対する個人的な怨恨によるものだとして結ばれていた。

「彼女が子供時分を過ごした孤児院は、確か伯爵の死後に閉鎖されていましたね」暮林は動機に関する部分について触れた。「それに留美子さんが伯爵を蔑ろにして、好き放題にしていたというのも、あながち外れていませんが」

「だとしてもおかしい」淀沼は、そこに書かれているのは嘘ばかりだ――と断言するように告げた。「女にあんな残虐無残な殺人が出来るものか。屋敷の使用人なのだから、どの部屋にも自由に入出入りできるのは間違いないが、こんな莫迦な結末があるものか」

「僕も同感です」暮林は同意した。「茅乃さんは明らかに他の人間を庇っている。時間稼ぎをするつもりなのです。これは捜査攪乱を目的とした自殺に違いありません」

「そうだろうな。だが、この線からも一応捜査しなくてはならない」警察もお役所なのだ――との響きを、淀沼は声に滲ませている。

「時間稼ぎなのが明らかでも、応じざるを得ない、と？」

「そういうことだ。莫迦莫迦しいが」

そこが御上に雇われている人間の限界なのだ――と言葉にならない部分を、淀沼は瞳で語る。一人で何もかも決められる存在など、総理大臣ですらも法の制約を受ける瑞穂では、滅多におるまい。大企業のワンマン経営者ぐらいか。

「でしたら僕が動きます」暮林は我が身の胸を叩いた。「『白き復讐者』の復讐劇が、こんな中途半端な形で終わりを迎えるわけがありませんからね」

「そうしてくれるか？」

「留美子夫人の近辺の警護、それさえ盤石ならば問題は起きないかと」

「判った。そうしよう」

頷いた警部を視て、暮林は一礼して場を去ろうとした。その際に彼は仰向けに倒れている茅乃の死体に、再び視線を投じた。そして気づいた。彼女の死体は、右手に何かを握っていることに。それは銀杏の葉と梅の葉を合わせたような形をした髪飾りで、それと似たものを暮林はどこかで視たような気がした。

――死者の告発（ダイニング・メッセージ）か何かだろうか？

通常、「死者の告発」は、犯人を把握、あるいは目星が高確率でつく状態の時、殺害された者が、犯人の名を他者に報せるために残すものだ。推理小説だと暗号分化されているものが多く、探偵役がそれを如何にして解き明かすかが注目の的となるのだが、此度は自殺者が真犯人を庇おうとして自殺したのだ。にもかかわらず、犯人に結びつくようなものを残したりするだろうか？

「暮林、どうしたんだ？」茅乃の右手に握られているものを凝視する暮林に、淀沼は訝しげな眼差しを向けた。早い話、意図が不明なのだ。

「いえね、茅乃さんが何かを握り締めているから気になって」

「握り締めて？ ああ。ハクハツキの髪飾りか」

「ご存じなので？」意外の感を、暮林は受けた。淀沼は質実剛健を絵に描いたような部分がある人物なので、植物には疎いとの印象がある。

「この辺りでは有名な花だよ」淀沼が暮林に教えた。「男女が恋を語る時に用いられる花だ。夫婦和合を祈願するために、新婚家庭の庭先に植えられたりもするな」

「恋を語る花？」茅乃の身辺調査はしていないが、この屋敷とその近くに恋愛対象となる人物が果たしていたのだろうか――と暮林は思う。

そんな探偵の心中に浮かんだ疑問符に構わず、淀沼は続けた。「愛情を告白する時に男女のどちらかが手渡す事が多いかな。最近はそのような習慣も廃れた感があるが、年寄りしか判らない昔語りというほどでもない。ただ――」

「何か問題でも？」

「ハクハツキにまつわる恐ろしい伝説が一つだけあるな。妻に裏切られた男の話なんだが」

「妻に裏切られた……」

姦夫姦婦を取り巻く話というのは、瑞穂にも数多い。一度仕事に出ると滅多なことでは還れない旅商人や遠洋漁業に従事する漁師の妻などが、独り寝の寂しさに耐えられず、つい不貞に勤しむというのが定番だ。妻を寝取られた良人が嫉妬に狂い、世にも恐ろしい復讐に走るという展開も目立つが。

「妻とその姦夫に毒を盛られて埋葬された男が、墓場で息を吹き返すんだが、毒の影響で容貌が別人のように変わるんだ。頭は総白髪となり、顔は皺だらけ。要するに三〇代の男がいきなり爺さんのようになるんだが。それでそいつが正体を隠して姦夫姦婦に近づき、言葉巧みに騙して、まず姦夫を、次いで裏切者の妻をハクハツキの下に埋めてしまうんだ。その際に男はこう言うんだ。『二世を誓った俺をよくも裏切ってくれたな。俺ばかりを白髪頭にした恨みをここで晴らさせて貰うぞ』——とね」

「生き埋めにするんですか？」殺害してから埋めた、との弁はなく、ただ埋めた——と言われたら、そう想像するよりない。

「うん。男は姦夫姦婦を生き埋めにした後に、何処にか消えてしまうんだ。恐ろしい話だよ。ハクハツキが夫婦和合どころか妻との姦夫の墓標になるんだからね」

「ハクハツキというより白髪の鬼ですね」

「その通りかも知れん」淀沼は同意した。「言われてみれば、暮林の推理はこの地に伝わる伝説と酷似している部分があるな」

「悲劇は繰り返される——と？」

「俺は歴史家じゃない。そんなことは判らんよ。ただ——」淀沼は事切れて尚、愛を語る花を象った髪飾りを握り締めている少女に、哀れみを込めた視線を向けた。

「現実に死人が出ている。それも二人もだ。俺はそれを解決せねばならん」

「確かに」色褪せた伝説よりも、目の前の殺人事件——と言われれば、暮林も確かにそうだ。犯人を逮捕せぬ限り、悲劇の連鎖はまだ続くことだろう。

「ここは俺に任せて、お前はお前の線で当たってくれ」淀沼は剛毛が生えている手で、暮林の背中を力強く叩いた。

「頼んだぞ！」

これは淀沼の癖だった。暮林は懐かしさを覚えながら頷いた。

床に伏している帰蝶に求められるままに、暮林は自信の推理を話して聴かせた。それは荒唐無稽の排りを免れぬ御伽話のような部分を有していたのだけれど、師匠の見解を一度は耳にしたいと考えていた女弟子は、一言一句聞き逃すまいと、不自由な身体に気合いを入れて耳を傾けたのだ。

「……そうですか。茅乃さんはあの髪飾りを抱き締めて自殺を……」

「うん。状況から考えて、他殺はあり得ない。捜査攪乱が狙いにしても突拍子もないやり方だし

、彼女は主犯じゃなくて共犯者だ。幾つかの事件の最中に現場不在証明（アリバイ）があるし。君も居合わせていたのだから、それは直ぐに判るだろう？」

「はい。茅乃さんは真犯人を庇うために――あるいは逃げ延びる時間を稼ぐために、身を挺したのですね」女の情念の凄まじさを、帰蝶は同性として理解できた。

「そう。彼女は他殺じゃない。真犯人を庇うために、出鱈目な遺書を残して自殺したんだ」

暮林はそこが重要なのだとばかりに、噛んで含むような物言いをした。それは帰蝶に自身の考えを述べていると言うよりか、自らの考えの正しさを、己に言い聞かせているかのようだった。

「先生の仰る通りだとすると――」

「真犯人はまだ目的を遂げていない。最後の殺人が起こるだろう」暮林は両手を握り合わせると、それで額の辺りを撫でた。

「淀沼先輩に小村夫人の護衛を増やすように頼んだ。僕もそこに加わる」

「危険ではありませんか。隠れ蓑を剥がされた犯人が何をしでかすか」

「それは承知の上さ。けども、今更他人に解決を任せるのも性に合わなくてね」

暮林が椅子から立ち上がり、留美子夫人の部屋へと向かおうとした時である。突如、遠方から鋭い爆発音が響いてきた。多少遅れて衝撃も来る。

電灯がグラグラと揺れた。花瓶が左右に揺れて床に落ち、割れ砕けた。窓硝子もビリビリと震え、さながら戦争でもしているかのような雰囲気になる。

「先生、これは……？」

「爆裂弾（ダイナマイト）だ」暮林は断定した。「山間部の工事の時に、面倒なものを発破解体するのだけれど、その際に使うのさ。恐らく、犯人の仕業だろうな」

「小村夫人を屋敷ごと吹き飛ばそうと？」

「可能性としてなくはないが、今更そんな真似はしないだろう。恐らく陽動だな」

「だとしても危ないのでは？」帰蝶の瞳には師匠を心配する光がある。

そんな女弟子に、師匠は明るく切り返した。

「危険に挑むのは僕の専売特許さ。忘れていないかい？ 僕は冒険探偵なのさ」

夜陰に雨が降ると接近してくる者の気配が消えてしまう。これは何処の国でも変わらぬ真理だ。古くから夜目が利く者が多い瑞穂では、軍事面での不利を夜間奇襲作戦で補って勝利してきた、との事例が数多い。それは犯罪に関しても同様で、昼間は近づくことすら困難な場所に、暗闇を利用して侵入する輩は後を絶たない。

留美子夫人は亡夫の部屋にいた。これは彼女の好みではない。凄惨なバラバラ死体が送りつけられてきた彼女の部屋が、警察の調査対象となり、閉め出された結果による。だらしのない男性関係の構築に余念のない彼女でも、まさか亡き愛人が置かれていた場所に、その日のうちに眠る気にはなれなかったのもあるが。

窓硝子を叩きつける雨音がやかましい。黒雲から突如顔を覗かせる雷の音もまた然り。ガラガ

ラと空自体が落下してくるような物音を叩きつけてくる。

この美貌の女主人は、今更子供のようにそういう音に怯える者ではない。だが何となく落ち着かず、嫌な感じがする。雨や雷の音が人の気配を消し、あの恐ろしい犯罪者が、警官隊が構成した濃密な包囲網をくぐり抜け、自分の喉元目掛けて食いついてくるのではないか――そんな取り留めのない妄想が脳裏を駆け巡る。

「本当に大丈夫なのですか？」

自身の身辺を警護する刑事に警察官、彼らに留美子夫人は不安げな面持ちで問いかける。

まさか我が家において暗殺の恐怖に怯える日が来ようとは想像の外だったので、図太い神経を持つこの女主人も、平静ではいられなかった。

「屋敷の周辺を寝ずの番をしている者たちが取り巻いています」銃剣術で身体を鍛えている若い警官が、不安に怯える留美子夫人に胸を張った。「全員が格闘技の有段者たちです。卑劣な犯罪者の一人や二人に後れを取る奴はいませんよ」

「ならば宜しいのだけれど」

あいつは影のように忍び寄り、影のように襲いかかってくる。気がつけば後ろから首筋を刺されて、一人また一人とやられていなければよいのだけれど――とは、留美子夫人も言えなかった。それを認めてしまえば、何処に隠れていようとも無駄になるからだ。恐ろしくて口に出来るものではなかった。

周囲にいる人間が発する、抑えられた殺気と熱気、自身が感じる恐怖を伴う緊張感。それらが留美子夫人を俄不眠症にした。どうにも目が冴えて眠れないのだ。厨房にある葡萄酒でも寝酒として持ってこさせようか――とも思うが、あいつが毒を仕込んでいるかも知れないと考えると、水一滴呑む気にはなれぬ。

ジリジリと、万力で我が身を締め付けられるような緊迫感が一同を包む中、体力に自信のない留美子夫人は、ついウトウトとし始めた。完全に眠れる訳でもなく、ただ集中力を切らした人間特有の、この世にいるようでそうではない、一種独特の浮遊感――そんなものに翻弄されている時、突如爆音が外から響いてきた。

ドカン！ ドーン！

そう評すしかない凄まじい音が、耳をつんざく。山奥の工事だ。発破解体だ。その騒がしくも派手な行いが、壮麗な屋敷の周囲で起きているのだ。現実感が何とも乏しい。

「奴か、奴が来たのか！」

血相を変えた警官たちが叫び、周辺をドカドカと音立てて走り回る男共の足音が満たす。嵐の前の静けさは終わり、戦争のような騒ぎとなる。

「貴女は此処にいてください！」

護衛として二名の警官が残される。後の面子は爆発音のした方角へ向かう。相手の凶悪ぶりは既につとに知られているので、強力な火器を有している可能性が高い。となると、一人でも多くの援軍が必要とされるのは、自然の流れである。

夏の蒸し暑さが感じられる夜とは言え、自宅を突然戦場にされた留美子夫人は、生きた心地がせぬ。刑事たちの提案に賛意も反対も述べることが出来ず、ただ見送るのみだ。

「我々から離れないでください」

残された二名の警官は、留美子夫人の身边にピタリと寄り添う。犯人が突然姿を現しても、対処できる構えだ。そんな男たちに、彼女は僅かながらも頼もしさを感じた。

だが――

電灯が突如チカチカと明滅を始めた。まるで悪魔が生命を模した蝋燭の焰を吹き消そうとしているかのように、光と闇が室内を交差し始めた。

「何だ、停電か!？」

こんな時に――と警官二名は眉を顰めて天井を見上げた。とその時、闇が光を圧倒し、遂に部屋の中は真暗闇となる。そしてその直後、ひときわ大きな雷声！

天が割れ砕けるような音が室内に響き渡り、そこに被さるような鈍い打撃音が二つ。微かな呻き声と共に、どうっと何かが倒れ伏す音。

「え、え？」

留美子夫人は顔から血の気を引かせ、両の目蓋をパチパチとした。いきなり真暗になったかと思うと、謎の打撃音がし、そこに何かが倒れる音がした。まさか、まさか――

齒の根をカチカチと鳴らす女主人の予想は、悪い意味で的中した。

そこに、一人の鬼がいた。

窓硝子から差し込んでくる雷の光を背にした男が立っている。彼の顔はよく見えぬが、この状況で親しみを込めた笑みが刻まれている道理はない。表情があるのだとすれば憤怒。あるいは憎悪を色濃くしたようなものが宿っているに相違ない。

鬼は留美子夫人に、優しさすら感じさせる口調で語りかけた。

「留美子。迎えに来たよ」

それは聞き覚えのある声だった。いてはならない者の声だ。そんなことがあるはずがないわ。そんなことがあるはずがないわ。何処かに捨てたはずの罪悪感、良心の呵責（かしゃく）。それらがグルグルと万華鏡のように心中を回転する。地獄の亡者が半分腐り溶けた手で、自分を手招きをしている幻想が、脳裏の過半を占領した時、留美子夫人は床に崩れ落ちた。

そんな留美子夫人を抱き上げた鬼は呵々大笑した。ワハハハハ……！ という勝ち誇った者が口にするそれを一通り響かせた後、

「留美子、さあ行こうか」

そう楽しげに獲物に語りかけた。邪魔をする者はいなかった。

「小村夫人が攫（さら）われた、ですって!？」

倒れ伏して呻いている警官二名、彼らが介抱される様子を一瞥してから、暮林は困惑も露に、淀沼に訊いた。注意を促した矢先にこのような出来事が起きようとは――と彼の表情が雄弁に物

語る。

淀沼もまた困惑している様子で答えた。「爆発音がして、他の者が場から離れた隙に、後頭部を一撃されたい」

「白き復讐者」が神出鬼没な犯罪者であることは、誰しも認識できていた。けれども、警官隊が屋敷の内外を固め、万全の備えをしているところに誘拐事件が発生するとは、皆の想像の埒外だった。

「暮林に指摘された通り小村夫人の周辺を固めたつもりでいたのだが」淀沼は苦渋に満ちた表情で続けた。「あくまでつもりの域を出なかったようだな……」

結果論から言えば、まんまと「白き復讐者」に淀沼や暮林を含む一同は出し抜かれたことになる。見るも無惨な、死体を見慣れている人間でさえ、眉を顰めて吐き気を覚えるであろう代物が送りつけられてきた反動から、皆が「あいつは何をしでかすか判らない」との先入観を植え付けられたのである。そこに派手な爆発が起きれば、全員の注目がそこに寄せられてもおかしくはない。

面子を潰された悔しさと後輩の予想が的中した事の悔やみを表情に混淆させた淀沼は、改めて暮林に助言を求めた。

「奴は何処に向かったのだろうか？ 小村夫人を抱えての移動となると、そう遠くには行けないはずなのだが」

「彼が行くべき場所があるとすれば、たった一つのはずです」名探偵は自信を持って断言した。

「僕には判っています」

「それは何処だね？」後輩が醸し出す奇妙な威圧感、それに押されるように淀沼は訊いた。

「僕が先導します。急ぎましょう。まだ間に合うかも知れませんから」

「う、うむ」淀沼は気圧されて頷いた。

そこからがまた一大騒ぎとなる。現場指揮官淀沼警部が、大雨が降る夜中の山道を強行軍で進むと言い出したからだ。皆が地元民であるがゆえに地理には明るい、いきなりそんな事を言われて戸惑わない者はない。

だが、文句を言う者はいなかった。この奇怪千万な事件がいよいよ終幕（クライマックス）を迎えるとなると、それを見逃してなるものかと、好奇心を太く、そして遅しくした者が過半を占めたからだ。皆が雨具かそれに代わるものを着込んで出発した。

「暮林、それで何処に向かうのだ？」折り悪く吹き始めた強風、それに厭つい顔を雨と共に打たれながら、淀沼は訊ねた。

「『殿様の墓場』ですよ。彼の産屋（うぶや）です」

懐中電灯に照らし出された道は、不気味さを宿している。単なる未舗装のそれが、地獄へと続く底なし沼のようにも視えた。悪い意味で想像力を働かせると、南加大陸の邪教徒共が、その実在を信ずる生ける屍（ゾンビ）の手が、不意にによきによきと伸びてくるのではないか――とさえ思える。

文字通りの強行軍は、されども一人の脱落者を出すこともなく終わりを迎えた。暮林がつい先頃に無理矢理こじ開けたあの鉄扉が暗闇の中で光を浴び、浮かび上がってきた。

暮林は扉に手をつけた。施錠の有無を確かめる。鍵はかかっていなかった。やはり彼は、いや彼らはこの中にいるのか——との確信を強める。重厚感溢れる鉄扉を押した。何かが重く軋む音を立てながら、それは開いた。

一同は暮林を先頭に立て、懐中電灯を手に内奥へと進む。一步進むごとに空気の重さが増していくようだが、此処まで来て後には退けない。皆が緊張感で脂汗を流しながら、ひたすら前へと進んだ。やがて、蝋燭で薄ぼんやりとした灯りが灯された区画が目についた。

そこに暮林が懐中電灯の光芒を向けると、誰かが床に座っているその姿が、影絵（シルエット）となり浮かび上がった。誰だそこにいるのは、と問いかける必要すらない。犯人だ。

「やあ探偵さん。あんたは来ると思っていたよ」暗闇に潜む幽鬼——「白き復讐者」が、どこか楽しげな口調で言った。「今から儂らの結婚式をやるところだ。歓迎するよ」

人を食ったような調子でそう言う「白き復讐者」に、淀沼は鋭く問いかけた。

「貴様、小村夫人は何処にやった!？」

「結婚式だ——と言ったろう、刑事さん」質問された側は、愚者に道理を説く学者のような感じで答えた。「相手がいなければできないものではない。ほら、そこにいるよ」

顎で示された場所に視線を転じると、猿轡（さるぐつわ）を噛まされ、縄で雁字搦めにされて、床に転がされている小村夫人の姿が目についた。彼女は意識を取り戻しており、苦しげに「ウーウー」唸っている。のたうっている。

「もう逃げ場はありません。観念してください」暮林は懐中電灯を左手に持ち替えると、右手に愛用の拳銃を構えた。犯人の名を告げる。

「里中さん——いや、小村伯爵！」

白髪白髯の老人——里中は、口許の端を僅かに引き攣らせた。だがそれも長くは続かない。彼は黙って黒眼鏡に手をかけると、徐にそれをかなぐり捨てた。

「いつから気づいていた？」特徴的な眼——暮林が以前に新聞記事で眼にした時と同じ輝きを有する双眸が、暗闇の中で独特の光彩を放っている。それは余命幾ばくもない老人のものではなく、まだ三〇代の青年のそれであった。

「初めから何となく怪しいと踏んでいました」暮林は銃口を小村に向けたまま続けた。「貴男の声音や仕種は本物の老人のそれじゃない。演技だ。確かに良く出来たものではありませんが、僕の目を誤魔化せるものではありませんでした」

「成程。儂は所詮演技の域を抜けられなかったのだな」小村は妙な感心をした。

「それから、僕の友達の新聞記者が、示唆をくれたのですよ。貴男ご自慢の宝物の数々は、もう随分と前に海外の収集家から盗まれた物ばかりだとね。そして『殿様の墓場』の中が、海賊の財宝の隠し場所になっているとの噂も聞きました」

「君の言う通りだ」小村は正直に認めた。「儂が築いたと吹聴した財産、その尽くは、この墓場に死蔵されていた金品ばかりだよ。この辺りの出身の海賊が、滅多なことでは開かれぬ頑丈な金庫に目をつけて、せっせと運び込み、結局のところ使われぬまま持主が消えてしまった品々さ。儂は墓場で息を吹き返した時に、それを見つけた。持主がもういないのであれば、それを墓場の主である儂が独り占めするのに何の遠慮が必要だろうか」

「何もかも暮林の推理通りという訳か！」淀沼は膝を叩いて悔しがる。死者の埋葬が殆どの場合、火葬である瑞穂では、欧洋州の怖い話にあるように、いわゆる「早すぎた埋葬」がないのである。だからピンと来ない部分があったのも確かだ。

「僕は貴男の横領を咎めるつもりはありません。だが――」暮林は引金にかけた指、それを強い意志で引き絞らぬようにしている。

「川村さんを殺害し、僕の弟子を危険な目に遭わせ、茅乃さんを自決に追い込んだのは、許せない。法の裁きを受けて貰います！」

その言葉を合図にしたかのように、警官隊が一斉に拳銃を構えた。銃口が全て一点の目標に対し合わされている。並の犯罪者であれば、尻込みするに違いない情景。

されども、夥しい数の銃口を向けられて尚、小村は不敵な態度を崩さない。

「君の女弟子を危険な目に遭わせたのは謝る。あの時はああする必要があったのだ。だが――茅乃に自決を強要した覚えはない。あれは儂に自主的に協力を申し出たのだ。危ないと感じたら、君だけでも逃げろと言い含めておいたのに、彼女は自ら命を絶った」

未練がましい自己弁護に聴こえるが、小村の弁に嘘はない。それは暮林にも判っている。

しかし、釈然としないものがある。鞭打つように言葉を投げつけた。

「ハクハツキー―それを象った髪飾りを、彼女は握り締めて死にました」

それを聴いた小村は、一瞬化石化したようだった。彼は小刻みに震えた後続けた。

「探偵さん、あれの花言葉をご存じかね？ あれはね、『信頼及び愛情』『何があろうともあなたのことには裏切りません』――そう言う意味があるのだよ」

「……彼女は貴男の正体を知った上で協力を申し出たのですね？」

「その通りだ。儂が南加大陸帰りの成金紳士に変装し、演技もすっかり身につけて尚、あの娘は儂の正体に気づいた。判るかね。この変わり果てた儂の顔を視て、あの娘は直ぐに気づいてくれたのだ。妻とかつての親友――憎んでも憎み足りぬ近親者が判らなかつた儂の正体を見抜いたのだ」

「一連の事件は、協力者の存在なくして成立しない部分が多々ありました」あの純情な娘を死に追いやったのは貴男だ――との意を込めて、暮林は語りかけた。

「君の言いたいことは判っている。儂は復讐のためとは言え、既に二人もの人間を死なせている責任を取らねばならない。だがね、御上の手を患わせるつもりはないのだよ。儂は儂自身を裁く方法を既に決めてあるのだからね」

「一体、何を――」暮林は言いかけて、火縄が焦げる臭いに気づいた。視線を小村から外して左右に投げかけると、爆裂弾だけでなく樽詰めされた火薬が目についた。

「探偵さん、あんたもご存じの通り、この女は天女のような外面とは裏腹に、内部に夜叉を飼っている。我が子を我が子とも思わぬ真性の娼婦なのだ。儂が一度死んだのは、この女の本性に気づかなかつたからで、その手抜かりがなければ、娘も死なずに済んだのだ。儂は儂の不覚を許せない。この墓場で目覚め、娘の無残に傷ついた死体を眼にした時、誓いを立てた。儂自らの手で、あやつらに復讐をしてやるとな。金に目が眩み、儂だけを殺そうとしたのであれば、まだ納得も許容も出来たかも知れぬ。だが、肉欲に溺れ、幼子まで手にかけて鬼畜外道をどうして許せよ

うか」

「復讐と自裁を、だからこの場所で行うと？」暮林は半ば呆然として訊ねた。残された時間が刻一刻と減少していくのを自覚しながら。

「君の言う通りさ。この女がかような本性を剥き出しにしたのも、儂が甘やかしたからだ。良人として言うべきことを言わなかった儂の落ち度なのだ。その責任を取らねばならない。それには、もう一度この女と夫婦（めおと）の契りを交わす必要がある。判るかな。判ってくれるだろうか？ これはね、形を変えた結婚式なのさ。今度こそ儂らは離れる事はない」

「狂っている！」

「愛する事と狂う事は似ているとは思わないかね？」

小村の眼には煌々と輝く狂気の色が認められた。もはや彼を説得する術などありはしないし、その時間ももうない事は、誰の目にも明らかだ。

「先輩！ 火薬樽がもう爆発します！ 直ぐに避難を！」

「しかし犯人を目の前にして――」淀沼は危険なのは承知していたが、直ぐには納得しかねた。言い募ろうとする。

「全員生き埋めになりますよ！」

暮林がもう一度「早く！」と促した時、恐怖に駆られた者らが、「わっ」と声を立てて、入口目掛けて駆け出した。本物の狂気に吞まれようとした常人が取るべき反応だ。

「探偵さん、あんたは逃げんのかね？」

「全員の避難を見届けてから」責任者としての義務だ――と言わんばかりの調子で、暮林は答えた。実際彼は責任を感じている。誰にも判らない謎を解き明かすのは確かに気分が良いが、事件が発生する前にそれを防ぐのが本来が一番なのである。にもかかわらず、死亡者が既に二人出ている。彼らの自爆を止める術がなさそうな事を思えば、あと二人は死ぬだろう。

「儂はもうこれ以上道連れにする人間を増やすつもりはないよ。出てってくれ」

「小村さん、貴男は――」

「笑ってくれ。儂はこんな仕打ちを受けて尚、この女に惚れているのだ。惚れ抜いているのだ。もう誰にも渡すつもりはない。天国にいる娘のところに母親を連れて行ってやりたくもある。探偵さん、あんたも愛した相手がいるのであれば、手放すんじゃないぞ――」

にこりと小村は微笑んだ。それはこの世のあらゆる義務から解放された人間のみが出来る、達観と安らぎを混淆させた、不思議な笑みだった。

暮林は、もう何も言えなかった。導火線が火薬樽にいよいよ迫るのを認めると、相手に背を向けて駆け出した。間に合うか。間に合うか。今更ながら無茶をしたものだとの後悔の念が頭を過ぎる。

警官と探偵の双方から見捨てられた格好の小村夫人は、猿轡の中から「人非人」「役立たずの畜生共」と貴婦人にあるまじき罵りの弁を発し続けている。されども罵言に現状を変える力などあるはずもなく、稀代の毒婦もこうなってお仕舞いである。

「留美子、これが儂らの結婚式だ。あの世にはお前の大好きな金銀財宝などありはしないし、縦しんばあったところで何の価値もないが、儂らの娘が先にいて待っている。何も寂しい事はない

」

文字通りの二人きりになった小村は、かつて愛した――今も妄執に近い思いを抱き続けている女に、そんな事を語りかける。

思えば、彼らは奇妙な夫婦であった。男は清廉潔白（せいれんけっぱく）な身の上でただ女を愛したが、女が愛したのは金銀珠玉の類であり、気儘に情交を交わせる愛人たちであった。そして女は男を殺し、殺されたはずの男は墓場で蘇生し、復讐の牙を研いで、その思いを遂げようとしている。

その二人が、同じ日、同じ場所で現世に別れを告げようとしている。これ以上の皮肉な成り行きが、世の中にそうあるであろうか？

「留美子、今生の別れだ。接吻でもしようか」

屈み込んだ小村が、床に転がされている妻の額に唇を触れるかどうかした時、遂にその瞬間は訪れた。導火線を辿った火が、火薬樽に到達。百雷を一度に叩きつけたかのような轟音が発生し、彼らの視界は刹那の間に深紅に染まった。

爆発が爆発を呼び、何もかも消し飛ぶ。その様は五星教徒の言う世界最終戦争（ハルマゲドン）を想起させるもので、恐竜を絶滅に追い込んだ隕石の直撃もかくや――と思わせる迫力に満ちていた。棺とそこに納められている遺骸が、爆焰に飛ばされて烏有に帰していく様子は、壮観の一言に尽きた。

何かに背中を蹴飛ばされるような調子で、「殿様の墓場」から抜け出してきた暮林は、耳朶を打つその響きに眉を顰めた。愛の究極の形と言うのは心中だと語る物語は多いが、愛憎の果ての無理心中までそこに含めて良いものかと、彼は事件にあまり関係ない事を考え続けている。考え続ける事により平静を保とうとしている。

「大丈夫か、暮林！」最後まで居残り、辛くも這い出してきた後輩に、淀沼は駆け寄る。

「無茶をしやがって」

「済みません。それにしても危なかった」暮林は微苦笑した。一步間違えば爆発に巻き込まれて粉微塵にされていたのは、誰もが認めるところであろう。

「酷い面（つら）だなあ」淀沼は仮面の下にある本当の表情に気づいている。暮林は学生時代からそういう部分がある。苦しい時にこそ、他人に本心を隠したがる。

「先輩もね」暮林はもう演技できなかつた。その努力も放棄した。悲しげに眉を歪めた。「結局のところ、何も救えませんでした」

「ああ。お前だけじゃない。俺たちもだ」急転直下解決を見た事件だけに、何もできなかつた――との思いが強いのは、むしろ淀沼の方かも知れなかつた。

「何もかも、燃えている……」

「殿様の墓場」の出入口、ほんの少し前まで分厚い鉄扉により外界と隔てられていたそこは、内部から噴き出す焰を吐き出す、通風口のように成り果てていた。内部が頑丈な漆喰で出来ていなければ、その辺一帯が爆風により崩れ落ちていたに違いない。

「寂しい結末だが、これも仕方がなかつたのかもな」

「その一言で全て解決できたら、世の中はもう少し気楽ですのに」

暮林は、皮肉を言っているつもりはなかった。本心からそう思ったのだ。それを察した淀沼は何も言わない。周りの者もそうだ。誰しものが夏の雨に全身を打たれながら、目前と燃え盛る「殿様の墓場」を見つめる。

紅蓮の炎が空を焦がし、黒煙をなびかせる。「白き復讐者」は生まれた場所で眠りについた。もう誰も邪魔する事のないとこしえの眠りに。愛しき伴侶と共に。

それを皆が認めた――